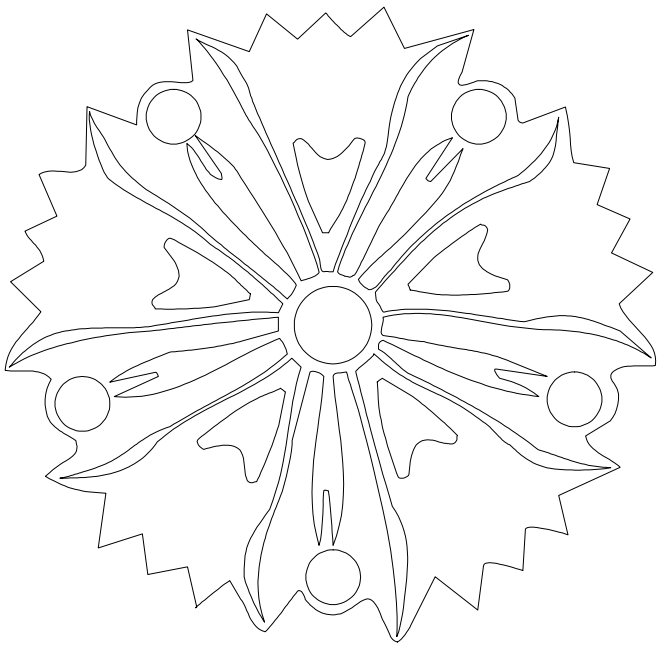
済生会新潟第二病院

院内感染症
対策マニュアル

別冊：手術部位感染予防
ＳＳＩ防止ガイドライン

簡単な目次



Guideline for the Prevention of Surgical Site Infection, 1999（ほぼ全訳）

Department of Health and Human Services
Centers for Disease Control and Prevention

この文書はＣＤＣが公開している「Guideline for the Prevention of Surgical Site Infection, 1999」を訳したものです。もとの文書（Guideline for the Prevention of Surgical Site Infection）はインターネット上で公開されています。
http://www1.mosby.com/mosbyscripts/
mosby.dll?action=searchDB&searchDBfor=art&artType=full&id=a98051

済生会新潟第二病院麻酔科　市川高夫
新潟県西蒲原郡黒埼町寺地２８０－７
℡０２５－２３３－６１６１
Fax０２５－２３３－８８８０
e-mail:ichitaka@med.niigata-u.ac.jp

○全体的なまとめ

「Guideline for the Prevention of Surgical Site Infection, 1999」は、以前は手術創感染(surgical wound infection)と呼ばれていた手術部位感染（surgical site infections、ＳＳＩｓ）に対する、アメリカ疾病予防局（Center for Disease Control and Prevention,以下ＣＤＣ）の勧告である。(12)

第一部：手術部位感染（Surgical Site Infection、以下ＳＳＩ）概要では、ＳＳＩに関する疫学（epidemiology）、定義（definitions）、微生物学（microbiology）、病因論（pathogenesis）、サーベイランス（surveillance）が述べられている。
ＳＳＩの原因に関係している術前、術中、術後の問題の詳細な検討も含まれている。
第二部：手術部位感染の予防のための勧告（Recommendations for the Prevention of Surgical Site Infection）では、ＳＳＩを防ぐために勧められる実践法について、院内感染制御実施諮問委員会(Hospital Infection Control Practices Advisory Committee、以下ＨＩＣＰＡＣ)での合意が記載されている(3)。
第二部に記載されている勧告は、できる限りよく計画された科学的研究によって得られたデータに基づいている。
しかしながら、ＳＳＩの危険因子とＳＳＩの予防方法の正当性を証明した研究は極めて少ない。
やむを得ず、利用できる研究は限定された患者集団や、特別な種類の手術を対象にして研究した調査結果を一般論として、全ての特別であったり、潜在的に問題のある種類の手術にも適応している。
このことはＳＳＩの予防法を実行するにあたっては間違っていない。
最終的には、手術チームで通常行われている幾つかの感染制御手技（滅菌手袋を着用するかしないかなど）に関しては、倫理的・論理的理由から厳密には検討されていない。

このため第二部の勧告の中には、強い理論的合理性と暗示的な証拠に基づいているだけで、科学的な知見による確証が欠如しているものもある。
アメリカ合衆国では、次世紀には全手術の約７５％が「緊急」あるいは「同日」つまり「日帰り」手術になると予測されている(4)。
勧告されている幾つかのＳＳＩ予防策では、これらの状況における外科的処置と、伝統的な入院して手術室で行われる外科的処置の区別はしていない。
　この文書は、主に外科医、手術室看護婦、術後を診る入院または診療所看護婦、感染対策の専門家、麻酔科医、病院の疫学者、その他、院内感染対策に関与する関係者に向けて書かれたものである。
ただしこの文書は、：

●熱傷、外傷、移植に関して、また、医療従事者から血液を介しての患者への感染など、特殊なものに関して特に述べていない。
　また小児外科におけるＳＳＩの予防の詳細についても述べていない。
　最近の小児手術患者の多施設研究で、患者の身体状態に関する因子よりも、手術に関する因子のほうがより重要であることが示されて来ている(5)。
　一般的に、成人で効果的な全てのＳＳＩ予防策は、小児外科手術においても適応できる。
●手術室外で行われる手技（内視鏡）や心臓カテーテルや放射線科的処置のような侵襲的処置における感染予防の案内もしていない。
　しかし、勧告されるものの多くは、これらの手技にも適応でき感染による合併症を減少させると考えられる。
●侵襲の少ない手技（腹腔鏡手術など）に特徴的なＳＳＩ予防策も示していない。
　ＳＳＩサーベイランスのデータから、普通、腹腔鏡手術は開腹手術よりもＳＳＩの危険性は少ないか同等である(6-11)。
　開腹手術（開腹胆嚢摘出術など）で適応されるＳＳＩ予防策は、腹腔鏡的手技（腹腔鏡的胆嚢摘出術など）にも使用する。
●術前の患者皮膚消毒や病院職員の手・前腕の消毒薬についての特定の消毒薬は勧めない。
　病院では食品医薬品局(Food and Drug Administration 、以下ＦＤＡ)によって分類された最新の情報の中から適切なものを選ぶべきである(12)。

第一部：手術部位感染（ＳＳＩ):

概要

Ａ．はじめに

　１９世紀半ばまで手術患者は、通常術後に発熱をきたし、手術創からの排膿があり、重症の敗血症となり、時には死亡した。
手術後の感染による死亡が減少するようになったのはJoseph Listerが１８６０年代の後半に抗菌という原理を導入してからである。
Listerの仕事によって、外科手術は感染と死を伴う作業から病気を終わらせて生命を永らえる技術へと劇的に変わった。
近年アメリカ合衆国では、年間手術症例は二千七百万件である(13)。
ＣＤＣの院内感染調査機構（National Nosocomial Infections Surveillance、以下ＮＮＩＳ）システムは１９７０年に設立され、急性期病院での院内感染の調査を行っている。

ＮＮＩＳシステムのレポートによると、ＳＳＩは院内感染の原因の第三位であり、入院患者の１４～１６％である(14)。
１９８６～１９９６年の間、ＮＮＩＳシステムでの病院で行われた５９万３千３百４４件の手術において、1万5千5百２３件のＳＳＩが報告されている（ＣＤＣ、未公表データ）。
手術患者の院内感染の中では、ＳＳＩが３８％と最も多い。
ＳＳＩのうち、２／３は創部感染、１／３は手術に関係した臓器／体腔感染である。
院内ＳＳＩを持った患者が死亡した場合、死亡の７７％は感染に関係しており、その大半（９３％）の患者は手術に関係した臓器／体腔を含む重症感染症である。
１９８０年Ｃｒｕｓｅは、ＳＳＩは在院日数を１０日間、コストを２千ドル増加させたと評価した(15,16)。
１９９２年の検討で、ＳＳＩは在院日数を７．３日間、コストを３千百５２ドル増加させた(17)。
他のいくつかの研究でもＳＳＩが入院期間と費用を増すことを裏付けている(18,19)。
ＳＳＩのうちでも深部（臓器／体腔）のＳＳＩの方が浅部（切開部）のＳＳＩより入院費用がさらに多くなる(20,21)。
感染の制御の実践は手術室の換気や滅菌法、無菌的処置法、手術手技、予防的抗菌薬の有効性を改善することによって進歩してきた。
これらの活動にもかかわらず、ＳＳＩは入院患者の発病や死亡の重要な原因であり続けている。
耐性菌の出現や、今日の手術患者の多くが、高齢となっており、慢性、消耗性、免疫抑制をきたす疾患を背景に持っているためと考えられている。
また、器具の挿入や、臓器移植手術の著しい増加があげられる。
このようなＳＳＩの危険性を減らすため、この危険性が患者、手術、職員そして病院の特質により影響を受けるということを常に認識して、組織的で実際的な対策を行わなければならない。

Ｂ．ガイドラインで使用される基本用語

１．ＳＳＩの定義分類

ＳＳＩとの認識は、臨床的および検査学的解釈を含むし、サーベイランスでしっかりとした標準化された定義を使用することが非常に大切である。
そうでなければ、不正確な解釈不可能なＳＳＩ発生頻度が計算され報告されることになる。
ＣＤＣのＮＮＩＳシステムはＳＳＩ定義のための標準化したサーベイランス分類を開発してきた（表１）(22)。

これらの基準により、ＳＳＩは切開部ＳＳＩと臓器／体腔ＳＳＩに分類される。

切開部ＳＳＩは皮膚と皮下組織に限局する表層切開部ＳＳＩとさらに深部の軟部組織を含む深層切開部ＳＳＩに分類される。
臓器／体腔ＳＳＩは手術中に切開又は操作の加わった、体壁以外の全ての解剖学的構造物（たとえば臓器又は体腔）を含む（図１）。
例えば、虫垂摘出後、横隔膜下膿瘍を発症した患者では、感染は腹腔内の特定の部位にある臓器／体腔　ＳＳＩとして報告される。
ＳＳＩを定義するための客観的な基準を使用しないと、ＳＳＩの発生割合は大きく影響されることが示されている(23,24)。
サーベイランスや手術に関係する人たちは、多くの環境下で首尾一貫してＣＤＣのＮＮＩＳ

表１－手術部位感染（ＳＳＩ）診断基準

○表層切開部位 ＳＳＩ

手術後３０日以内に起こった感染で、切開部の皮膚又は皮下組織のみであり、
さらに少なくとも以下の１つが認められる

1．切開部の表面から、検査上の確診の有無を問わず、排膿がある。
2．切開創の表層から無菌的に採取された、液体又は組織の培養から病原菌が分離される。
3．以下の感染の症状や愁訴のうち少なくとも１つがある。
　疼痛または圧痛
　限局性腫脹
　発赤、発熱
　切開部の培養が陰性でも外科医が意図的に皮膚浅層の縫合を開けた場合
4．外科医又は主治医が浅部切開部位 ＳＳＩと診断した

以下の状態はＳＳＩとはしない

1．縫合糸膿瘍（縫合糸の穿通した穴に限局した最小単位の炎症又は浸出）
2．会陰切開部や新生児の包皮切開層の感染
3．熱傷の感染
4．筋膜や筋層に波及した切開部ＳＳＩ（深部ＳＳＩを参照）

注：感染した会陰切開、環状切開部および熱傷には別の特別な基準がある[433]

○深部切開部位ＳＳＩ

人工物の埋めこみが行われなかった場合には術後３０日以内、移植人工物が残された場合には術後１年以内に手術に関連して感染が起こり、さらに手術切開部位の深部組織（たとえば、筋膜や筋層）を含む。
さらに以下のうちの少なくとも１つが認められる

1．手術部位の器官・体腔からではなく、切開深部からの排膿。
2．深部切開創が自然に離開したか、切開創の培養は陰性であっても、次の感染の症状や徴候が少なくともいずれか１つがあり、外科医が創を意図的に開放した場合：３８℃以上の発熱、限局した疼痛、圧痛。
3．深部切開創の膿瘍やほかの感染の証拠が、直接的あるいは再手術や組織病理学、放射線医学検査で発見される。
4．外科医または主治医が深部ＳＳＩと診断した。

注：１．浅部深部両方に感染が及ぶ場合は深部ＳＳＩとして報告。
　　２．切開創からのドレーンされる臓器・体腔ＳＳＩは深部ＳＳＩとして報告。

○臓器・体腔ＳＳＩ

移植人工物†が入ってない場合には術後３０日以内、移植人工物が残された場合には術後１年以内に手術と関連した感染や、切開部以外に術中開かれたり操作された（例えば臓器や体腔など）身体のいずれかの部分に感染が生じた場合。
さらに次の少なくとも１つが認められる

1．臓器／体腔に入っている刺し創‡からのドレーンから排膿がある。
2．臓器／体腔から無菌的に採取された液又は組織から病原体が分離された。
3．臓器／体腔から膿瘍またはほかの感染の証拠が、直接的な検査や再手術、組織病理学又は放射線医学検査で認められる。
4．臓器／体腔感染が外科医又は主治医によって診断される。

＊Horan TC et al.[22]
†ＮＮＩＳ定義：ヒト由来でない埋め込み可能な異物（例えば、心臓人工弁、ヒト由来でない移植血管、人工心臓、人工股関節など）で手術により永久的に患者に埋めこまれるもの。
‡もしその穿通創の周りに感染が起こったら、ＳＳＩとしない。それは深さにもよるが、皮膚もしくは軟部組織の感染と考えられる。

図１

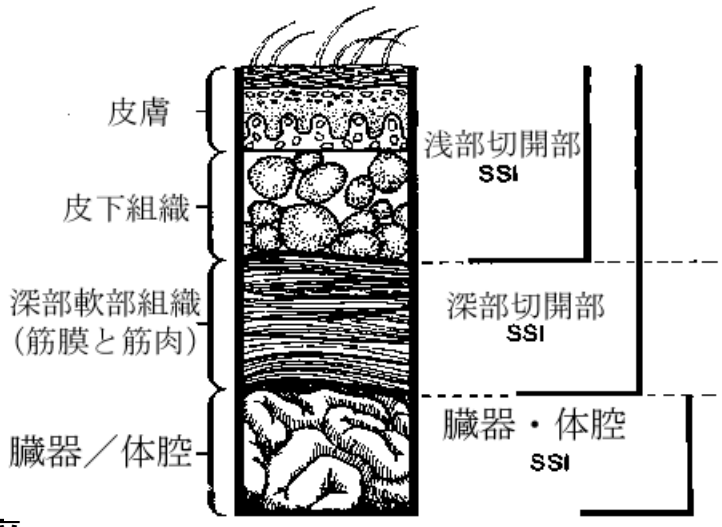


表２－**臓器・体腔　ＳＳＩの特定の部位**

動脈、静脈感染、
乳房膿瘍または乳腺炎、
椎間板腔、
耳、乳様突起、
心内膜炎、
子宮内膜炎、
目、結膜炎以外、
胃腸管、
腹腔、
頭蓋内脳膿瘍、硬膜、
関節又は滑液嚢、
縦隔炎、
髄膜炎、脳室炎、
心筋炎、心膜炎、
口腔内（唇、舌、歯肉)、
骨髄炎、
下気道の他の感染（膿瘍、膿胸)、
男女の生殖路、
副鼻腔炎、
髄膜炎を伴わない脊髄膿瘍、
上気道、咽頭炎、
腟断面

*HoranTC et al.[22]

表３－**ＮＮＩＳシステムによるＳＳＩから検出された病原菌、1986-1996**

	分離率（%）	
	1986-1989(79)	1990-1996(26)
病原菌	（N=16,727）	（N=17,671）
黄色ブドウ球菌	17	20
表皮ブドウ球菌	12	14
大腸菌	10	8
腸球菌属	8	12
緑膿菌	8	8
ｴﾝﾃﾛﾊﾞｸﾀｰ属	8	7
ﾌﾟﾛﾃｳｽ・ﾐﾗﾋﾞﾘｽ	4	3
ｸﾚﾌﾞｼｴﾗ･ﾆｭｳﾓﾆｴ	3	3
他の連鎖球菌属	3	3
カンジダ	2	3
Ｄ群連鎖球菌	＊	2
他のｸﾞﾗﾑ陽性好気性菌	＊	2
ﾊﾞｸﾃﾛｲﾃﾞｽ・ﾌﾗｼﾞﾘｽ	＊	2

＊：２%以下の検出は除外してある

によるＳＳＩの定義を適用してきており、現在は事実上の国家的標準である(16,17)。
（訳者注：ＣＤＣの診断基準はＩＣＰの会に参照すること。
またはメディカ出版からサーベイランス用の診断基準の訳本が出ている。）

２．手術棟

手術室、廊下および手洗い場などの付帯設備を含んだ物理的に分離された区域である。
病院の建物の中にあろうと独立した建物であろうと、伝統的な入院患者用の病院の中にある手術棟であろうと日帰り手術に使われる手術棟であろうと、その区別はない。

３．手術室

手術が行われる手術棟内の部屋。

４．外科系職員 (Surgical personnel)

手術患者に術前、術中および術後の期間、ケアを提供する全ての医療関係者。

５．手術チーム構成員 (surgical team member)

手術処置に関する原則を理解して、手術中手術室内にいる全ての医療関係者。
構成員は”手術時手洗い”を行う者とそうでない者に分けられる；手術時手洗いを行った構成員は、滅菌手術野または術野で使用される滅菌器具や医療材料に直接接触する。
（手術前の手・前腕の消毒の項を参照）

Ｃ．微生物学

ＳＳＩから分離された病原体は、ＮＮＩＳシステムによるとこの１０年間で大きな変化はない。（表３）(26,27)
黄色ブドウ球菌、コアグラーゼ陰性ブドウ球菌、腸球菌、大腸菌が最も頻繁に分離される病原菌である。
ＳＳＩの増加の大きいものは、抗菌薬に耐性を持つ病原菌、例えばメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（ＭＲＳＡ)(28,29)、またはカンジダである(30)。
１９９１から１９９５の間にＮＮＩＳによる病院調査で、真菌類によるＳＳＩの発生頻度は１０００検体あたり０．１から０．３に増加していた(30)。
耐性菌やカンジダ属のＳＳＩに占める率の増加は、病態がより悪い手術患者や、免疫抵抗性の落ちた患者が増加していること、予防的かつ治療的な抗菌薬投与がより広範囲に行われていることを反映しているかもしれない。
珍しい病原体、例えばRhizopus oryzae、Clostrudium perfringens、Rhodococcus bronchialis、Nocardia farcinica、Legionella pneumophila、Legionella dumoffii、Pseudomonas multivoransなどによってＳＳＩのアウトブレイクや群発が起こることがある。
これらの稀なアウトブレイクを追跡していくと汚染された粘着包帯であったり(31)、弾性包帯(32)、保菌した医療従事者であったり(33,34)、水道水(35)や汚染された消毒液(36)であったりする。
珍しい病原体のＳＳＩが群発する場合には、正規の疫学的調査を行うべきである。

D．病因

ＳＳＩには必然的に手術部位の細菌汚染が先行する。
ＳＳＩの危険性は次のような関係に概念化することができる(37,38)。

$$\frac{\text{汚染した細菌量}\times\text{毒力}}{\text{宿主の抵抗力}} = \text{ＳＳＩの危険性}$$

量的に細菌汚染が組織１グラム当たり１０の５乗以上になるとＳＳＩの危険性が著しく増加する(39)。
しかしながらその部位に異物が存在すると、感染を起こすに必要な微生物の量はずっと少なくて済む（例えば、シルク縫合糸の存在下では、組織１ｇ当たり１００個のブドウ球菌で起こる）(40-42)。
　微生物は宿主に侵入する能力を高めたり、宿主内で障害を起こしたり、感染した宿主の組織の中で生存したりするための、いろいろな物質や毒素を含有あるいは産生してＳＳＩの発現を促進する。
例えば、多くのグラム陰性細菌はエンドトキシンを産生し、サイトカイン産生を刺激する。次には、サイトカインが時には多臓器不全をもたらすＳＩＲＳ（systemic inflammatory responce syndrome）を惹き起こすかもしれない(43-45)。
ある種の細菌の表面の構成物（特に多糖類カプセル）は、食作用(48)や細菌汚染に対する大切な最初の宿主防御反応を抑制する。
クロストリジウム属のある種のものや連鎖球菌は、細胞膜を破壊したり細胞代謝を変化させる強力な細胞外毒素を産生する(49)。
表皮ブドウ球菌のようなグラム陽性菌を含む様々な微生物は、物理的に食作用から菌を守ったり、抗菌薬が接触あるいは貫通するのを抑制する(56)糖皮（glycocalyx)、いわゆる「スライム」(50-55)と呼ばれる付随物を産生する。
これらのことや他の毒性因子もよく分かって来ているが、ＳＳＩの進展との因果関係は十分にはわかっていない。
　多くのＳＳＩで、病原体のもとは患者の皮膚、粘膜や中空の臓器などの内因性細菌叢である(57)。
粘膜や皮膚が切開されると、組織は内因性細菌叢の汚染の危険にさらされる(57)。
これらの微生物は通常好気性グラム陽性球菌である（例えば、ブドウ球菌）が、切開が会陰や鼠径に近いと便の細菌叢（例えば、嫌気性菌やグラム陰性好気性菌）を含むかもしれない。
手術中消化管が損傷され病原体の発生源となると、グラム陰性桿菌（大腸菌など）、グラム陽性菌（腸球菌など）や時には嫌気性菌（Bacillus fragilis など）が典型的にＳＳＩから分離される。
表４に手術とそれに関係するＳＳＩ病原菌を提示した。
離れた病巣からの細菌の播種はＳＳＩ病原体のもう一つの供給源でありうる(59-68)し、特に手術中、人工器官が埋め込められる患者では特に重大である。
これらの器具が、細菌が付着する病巣を提供する(50,69-73)。
ＳＳＩの病原体の外因性の起源は、手術室の環境や病院職員（特に手術チーム構成員）(74-78)、手術室環境（空気を含む）、そして手術中に滅菌野に運ばれた全ての道具、器具、物である。（「術中の問題」の項参照）

表４－手術およびＳＳＩで可能性のある病原体と予防的抗菌薬の使い方の文献

手術	可能性のある病原体†‡	文献
全てのグラフト、人工物、インプラントの移植	黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌	269,282-284,290
心臓	黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌	251-253,462,463
脳神経外科	黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌	241,249,258,259,261,464,465
胸壁	黄色ブドウ球菌、連鎖球菌、グラム陰性桿菌	242,248
眼科（データが限られているが硝子体手術､ﾊﾞｯｸﾘﾝｸﾞなどで）	黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌	466
整形外科（関節全置換、人工物や骨移植を行う骨接合、外傷など）	黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌、グラム陰性桿菌	60,243-246,254,255,467-473
胸部（開胸肺手術、心臓でない胸骨切開）	黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌、肺炎球菌、グラム陰性桿菌	240,247,474,475
血管	黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌	250,463,476,477
虫垂切除	グラム陰性桿菌、嫌気性菌	263,452,478
胆道	グラム陰性桿菌、嫌気性菌	260,262,479-484
結腸直腸	グラム陰性桿菌、嫌気性菌	200,239,256,287,289,485-490
胃十二指腸	グラム陰性桿菌、連鎖球菌、口腔内嫌気性菌	256,257,491-493
頭部・首（口咽頭粘膜までの）	黄色ブドウ球菌、連鎖球菌、口腔内嫌気性菌	494-497
婦人科産科	グラム陰性桿菌、腸球菌、Ｂ群連鎖球菌、嫌気性菌	270-280,435
泌尿器（もし尿が無菌であれば必要ない）	グラム陰性桿菌	267

"Antimicrobial prophylaxis in surgery" The Medical Letter 1997 (266) による。

†内因性、外因性、両方の可能性のあるもの

‡ブドウ球菌は全ての種類の手術後ＳＳＩに合併する

――

内因性および外因性の真菌はＳＳＩの原因としては稀であるし、それらの病原性はよく分かっていない(79)。

Ｅ．危険性と予防

疫学において「危険因子（risk factor）」という言葉は特別の意味を持っている。ＳＳＩの病態生理と予防という文脈において、危険因子とは正確にはＳＳＩの進展に重要な意味を持つと共に、独立した変数を意味する。

危険因子は疫学的に多変量解析によって確定される。

表５：ＳＳＩ発生に影響する患者および手術の特性(25,37)

患者：

年齢、
栄養状態、
糖尿病、
喫煙、
肥満、
離れた体の部位に感染が存在、
微生物の保菌、
免疫反応の変化、
術前入院期間

手術：

手術時手洗いの長さ、
皮膚消毒法、
術前剃毛、
術前皮膚処置、
手術時間、
予防的抗菌薬投与、
器具の滅菌不十分、
手術部位の異物、
ドレーン、
外科手術手技（止血のまずさ、死腔の残存、組織損傷）

ＳＳＩの危険因子（表５）は二つの点で有用である。

（１）手術の階層化が可能になって、調査データがより分かりやすくなる。

（２）危険因子を術前に知ることにより予防が可能となる。

例えば、患者が離れた部位の感染症を起こしている場合には、手術チームは感染が治るまで予定手術を延期してＳＳＩの危険を減少させようとするかもしれない。

ＳＳＩの予防法とは、医療従事者が意図的にＳＳＩの危険因子を減少させるような行為、またはまとまった複数の行為と定義される。

続いて述べられる技術の多くは、患者の組織や滅菌した手術器具が微生物で汚染される機会を減少させることを含んでいる。

その他の技術として、抗菌薬の予防的投与や不必要な外傷性の組織切開を避けるといったような補助的なものである。

ＳＳＩ防止策を最適に応用するためには、さまざまな患者および手術の特性を注意深く考慮する必要がある。

１．患者特性

ある種類の手術で、ＳＳＩの危険性を増すことに関連すると思われる患者の特質には、同時に存在する離れた部位の感染(59-68)や保菌(81-83)、糖尿病(84-87)、喫煙(85,88-92)、ステロイドの全身投与(84,87,93)、肥満（理想体重の２０％以上）(85-87､94-97)、極端な年齢（訳者注：高齢や未熟児）(92,98-102)、低栄養状態（85,94,98,103-105）、そして周術期のある種の血液製剤の投与(106-109)があげられる。

ａ．糖尿病

糖尿病がＳＳＩの危険性に対し独立にどの程度関与しているか、いくつかの潜在的な要因の弁別をしっかり行って評価した例がないため、糖尿病の関与の程度については議論の余地がある(84-86,98,110)。

最近の予備的な冠動脈バイパス術患者での研究で、ＨｂA1cとＳＳＩの危険性について評価がなされ、ＨｂA1cの増加とＳＳＩの発生頻度に有意の相関が認められている(111)。

また、（４８時間以内の）術直後の血糖が（２００mg/dl以上）高いとＳＳＩ の危険性が増加した(112.113)。

追加処置としての周術期の血糖コントロールの有効性の評価にはさらなる研究が必要である。

ｂ．ニコチンの使用

ニコチンを使用すると創の一次治癒が遅れるため、ＳＳＩの危険性が増すかもしれない(85)。

大きな前方向の研究で、最近の喫煙が心臓外科術後の胸骨と縦隔のＳＳＩに対して独立した危険因子であった(85)。

他の複数の研究でも喫煙がＳＳＩの重要な危険因子であることを確証している (88-92)。

しかしながら、これらの研究の限界は"最近の喫煙"や"活動性の喫煙者"なる用語が常には正確に定義されていないことである。

喫煙がＳＳＩの危険性に寄与することを適切に決定するには、「喫煙歴の標準化された定義」が、区別の困難なさまざまな変数をコントロールするために計画された研究に適応され、使用されなければならない。

ｃ．ステロイドの使用

ステロイドや他の免疫抑制剤を術前に投与されている患者もまたＳＳＩに進展しやすいかもしれない(84,87)が、この関係を支持しているデータには矛盾がある。

クローン病でのステロイドの長期使用の研究では、術前にステロイドを使用していない患者のＳＳＩ発生が６．７%だったのに対し、ステロイドを使用した患者では１２．５%と有意に多かった(93)。

対照的に他の研究者はステロイドの使用とＳＳＩの危険性の間に関係を見いだしていない(98,114,115)。

ｄ．栄養不良

いくつかの手術で、重度の蛋白・熱量栄養不良は高率に術後の院内感染を合併し、創傷治癒機転の障害、または死をもたらす(116-124)。

The National Academy of Sciences/National Research Council (NAS/NRC)(94),Study on the Efficacy of Infection Control (SENIC)(125)とＮＮＩＳ(126)のＳＳＩの危険の層分類計画では、はっきりとは予測因子として栄養状態を受け入れていないが、後の二つでは間接的に述べている。

よく引用される１９８７年の４０４例の高リスクの一般外科手術患者での研究で、Christouらは ＳＳＩの可能性のある因子として、年齢、手術時間、血清アルブミン値、遅延過敏反応試験スコアと、もともとの傷の汚染レベルを最終的にあげている(117)。

この指標は４０４例のその後の患者のＳＳＩの危険を予測するのに十分であったし、ＳＳＩの危険の層分類に非常に役立ったと一般に受け入れられてはいるが、ＳＳＩサーベイランスのデータ解析や、手術感染研究、分析疫学には広く利用されていない。

重度の術前栄養不良が切開部および臓器／体腔ＳＳＩの両方のリスクを増加させるというこ

とを、論理的に主張することはできる。
しかし、全ての外科系下位専門分野に対し、切開部ＳＳＩと栄養不良の疫学的関連を一貫して示すことは困難である(118-120,124,127-131)。
多変量解析では、術前蛋白・熱量栄養不良は心バイパス手術後の縦隔炎の独立した予測因子ではなかったことが示されている(85,132)。
近代において、完全静脈栄養（ＴＰＮ）と完全腸管栄養（ＴＥＡ）は外科医と集中治療専門家によって熱烈に受け入れられてきた(118,133-137)。
しかし、ＳＳＩの危険を減らすため、栄養不良患者に対し術前の栄養の充実がよかったという証明はなされていない。
二つの臨床的無作為抽出試験で、術前の「栄養療法」は切開部および臓器／体腔ＳＳＩの危険を減らさなかった(138-141)。
最近の担癌の高リスクの膵臓切除術患者での研究で、術前のＴＰＮ処置はＳＳＩの危険に対しなんら有効ではなかった(142)。
３９５名の一般及び胸部外科手術患者での前方向無作為抽出試験で、栄養不良患者で術前７～１５日間ＴＰＮを受けていた例と普通の病院食をとっていた例の比較が行われた。
全ての患者が術後９０日間追跡調査された。
ＴＰＮ投与が切開部または臓器／体腔ＳＳＩの発生に利益があるということは見出せなかった(143)。
ＴＰＮおよびＴＥＡは多くの状態で適用されるであろうが、臓器／体腔または切開部ＳＳＩの危険の予防処置としては重要とは受け取られない。
非常に重篤な栄養状態の患者が大きな予定手術を受ける場合は、経験のある外科医は数多くの重篤な合併症を伴う疾病－その唯一のものが臓器／体腔ＳＳＩである－も考慮しながら、しばしば術前・術後に栄養療法を行う(118,124,130,133,137,138,144-149)。
さらに術後栄養療法は、ある種の大きな癌の手術(135,136)や、大きな外傷患者の多くの手術の後、または食事が妨げられたり代謝過多状態になりやすい、さまざまな破局的な外科的合併症の患者に重要である。
栄養療法がある特殊な患者-手術関連で、ＳＳＩの危険を変化させるかどうか見極めるには、臨床的な無作為抽出試験が必要であろう。

ｅ．長い術前入院期間

術前入院期間が長いと患者のＳＳＩ　の危険性が増加するとしばしば示唆されてきた。
しかし、患者の術前入院期間が長いのは、病気の重症度と合併症のために術前に治療が必要なことを示しているようである(16,26,65,85,94,100,150,151)。

ｆ．黄色ブドウ球菌の術前鼻腔保菌状態

黄色ブドウ球菌はよくＳＳＩから分離される。
この病原菌は健康人の２０～３０％の鼻腔に存在する(81)。
長い間、黄色ブドウ球菌によるＳＳＩの発生は、手術患者が病原菌を術前に鼻腔に持つことと明確に関連すると信じられてきた(81)。
最近の多変量解析で、このような保菌は心臓胸部手術に引き続くＳＳＩの最も重要な独立の危険因子であることが示された(82)。
ムピロシン軟膏（バクトロバン(R)）は保菌患者または医療従事者の鼻腔から黄色ブドウ球菌を除去する局所薬として効果的である。
Kluytmansらの最近の報告では、保菌状態の有無に関らず、術前にムピロシンを鼻腔に投与することで、心臓胸部手術の患者におけるＳＳＩの危険は低下した(152)。
この研究では７５２例のムピロシン治療患者のＳＳＩ頻度が、以前の９２８例のムピロシン

非治療の履歴上の対象患者のそれと比較され、重要なＳＳＩの頻度の減少は、ムピロシン治療によるためとした。
この二つの患者グループの同等性に関心がもたれている(153)。
さらに、治療期間が短い時には稀であるとしても、ムピロシンの耐性が問題になってきている(81)。
心臓手術で黄色ブドウ球菌の除去がＳＳＩの予防に効果的であるかは、前方向無作為抽出試験が必要であろう。
この種の試みは最近アイオワ州で３，９０９名の患者で行われた(83)。
二つの施設で５種類の手術が観察された。
予備的な解析で、黄色ブドウ球菌の鼻腔保菌と引き続くＳＳＩの発生に重要な相関が見られている。
ＳＳＩの危険を減らすムピロシンの効果についての結論はまだ出ていない。

ｇ．周術期輸血

白血球を含む同種血液成分の周術期輸血は、ＳＳＩを含む術後細菌感染発生のはっきりとした危険因子である(106)。
予定の癌のための結腸切除術を受ける患者における、５つの無作為抽出試験のうち３つで、ＳＳＩの危険は輸血を受けると少なくとも二倍になった(107-109)。
しかし、疫学的に詳細に再検討したところ、１２ほどの区別の困難な変数が報告の中に影響しており、ＳＳＩの危険における輸血の効果は小さいか存在していなかった(106)。
輸血時期を含め、標準化されていないＳＳＩの診断基準の使用など方法論の問題から、利用できるデータの解釈に限界がある。
公表されている研究のメタ解析が、論争の解決におそらく必要であろう(154)。
今のところ、切開部および臓器／体腔ＳＳＩの危険を減らすために手術患者に血液製剤を差し控える必要性を示す科学的根拠はない。

２．手術特性：術前の問題点

ａ．術前の消毒剤によるシャワー

術前の消毒剤によるシャワーや入浴は、患者の皮膚の細菌のコロニー数を減少させるだろう。
術前、消毒薬によるシャワーを受けた７００人以上の患者での研究では、クロルヘキシジンがコロニー数を２．８（×１０の２乗）から０．３へと９分の１に減少させ、ポビドンヨードとトリクロルカーボンを加えた石鹸ではそれぞれ１．３と１．９分の１に減少させた(155)。
他の研究でもこれらの結果を支持している(156,157)。
グルコン酸クロルヘキシジン含有製品は最大の抗菌効果を得るまでに数回の使用を必要とするため、通常くり返しの消毒剤によるシャワーが必要である(158)。
術前のシャワーが皮膚の細菌のコロニー数を減少する事実にもかかわらず、ＳＳＩの頻度を減少させる事は明確には示されていない(159-165)。

ｂ．術前の除毛

手術前夜の手術部位の剃毛はＳＳＩの危険性を有意に増加させる。
この危険性は脱毛剤を用いたり除毛しない群より大きい(16,100,166-169)。
ある研究ではＳＳＩ頻度は安全かみそりで剃毛した患者が５．６％だったのに対して脱毛剤で除毛するか除毛をしない群では０．６％であった(166)。
剃毛によるＳＳＩの危険性の増加は皮膚の顕微鏡的な切創のためで後にこれが感染巣にな

る。
手術直前での剃毛は２４時間および２４時間以上前の剃毛と比較すると、ＳＳＩ 発生頻度は低い（それぞれ３．１%、７．１%、２０%）(166)。
手術直前に毛を刈るのは、手術前夜に剃毛または刈る場合よりもＳＳＩ発生の頻度は低い（１．８%と４．０%）(170-173)。
脱毛剤の使用は剃毛や刈るよりＳＳＩ の危険性は低い(166､167)が、脱毛剤は時に過敏症を起こすことがある(166)。
他の研究でも術前の剃毛は、ＳＳＩ の発生頻度を増加させるため、剃毛はしない方が良いとされている(100,174,175)。

c．手術室での患者の皮膚の準備

皮膚の切開部に対してさまざまな消毒薬が使用可能である。（表６）
ヨードホール（以下ポビドンヨード、訳者注：イソジン(R)）、アルコール含有剤、グルコン酸クロルヘキシジン（ヒビテン(R)）が最もよく用いられる製剤である。
ＳＳＩの危険性に関してこれらの術前の消毒薬の効果を正確な方法で比較した研究はない。
ＦＤＡによってアルコールとは以下の活性成分の一つを持つものと定義されている：容量で６０～９０%のエチルアルコール水溶液か、５０．３～９１．３%のイソプロピルアルコールを含むもの(12)。
アルコールはすぐに入手できて安価であり今でも最も効果的で即効性のある皮膚消毒薬である(176)。
７０～９２%アルコール溶液は細菌、真菌、ウィルスに対して殺菌力を持つが、芽胞は抵抗力を持つ(176,177)。
手術室でのアルコール使用で最大の欠点はその可燃性である(176-178)。
　グルコン酸クロルヘキシジンとポビドンヨードは両方とも広い抗菌力を持っている(177,17-181)。
術前の手術時手洗いにおいて、両者の比較ではポビドンヨードよりグルコン酸クロルヘキシジンが皮膚の細菌数を減少させ、さらに１回使用後の残存効果も強かった(182-184)。
さらにグルコン酸クロルヘキシジンは血液や血清の蛋白で不活性化されない(176,179,185,186)。
ポビドンヨードは血液や血清の蛋白で不活化されたが、皮膚にある間は静菌作用を示した(178,179)。
　患者の皮膚の準備を始める前に皮膚の（汚れや土、その他の残渣などの）大きな汚染物を除去しなければならない(187)。
患者皮膚の準備は消毒薬を切開予定部から始めて同心円状に（外側に）円を描くように塗ってゆく。
準備する範囲は、必要なら切開を広げたり、別の新しい切開やドレーン挿入部を作る場合にも十分に越えるように広くなければならない(1,177,187)。
皮膚の準備は（熱傷など）皮膚の状態によって、または（顔面など）場所によって修正する必要があるかもしれない。
　術前皮膚準備の修正には（1）消毒薬塗布後の除去、乾燥、ふき取り（2）消毒薬を染み込ませた粘着性ドレープの使用（3）伝統的な手洗いの代わりに消毒薬を皮膚に塗る（4）滅菌に対して清潔な外科皮膚用消毒キットを使うなどがある(188-191)。
しかし、これらの修正法はいずれも有効であると示されてはいない。

表６－術前の皮膚処置と手術消毒に一般的に使用される消毒剤の作用機序と作用範囲

薬剤	作用機序	グラム陽性菌	グラム陰性菌	結核菌	真菌	ウィルス	作用発現	残存効果	毒性	使用目的
ｱﾙｺｰﾙ	蛋白変性	E	E	G	G	G	最早	なし	乾燥、可燃性	SP,SS
ｸﾛﾙﾍｷｼｼﾞﾝ	細胞壁破壊	E	G	P	F	G	中等度	E	聴神経毒、角膜炎	SP,SS
ヨウ素・ヨｰﾄﾞﾎｰﾙ	酸化ﾌﾘｰヨウ素による置換	E	G	G	G	G	中等度	最小	毒性の危険のある皮膚からの吸収、皮膚刺激	SP,SS
PCMX**	細胞壁破壊	G	F*	F	F	F	中等度	良好	データ不足	SS
ﾄﾘｸﾛｻﾝ	細胞壁破壊	G	G	G	P	U	中等度	E	データ不足	SS

略語：E--excellent. G--good. F--fair. P--poor. U--unknown、
SP--皮膚処置、SS--手術時手洗い
*緑膿菌以外に良好;EDTA などのｷﾚｰﾄなどで活性が上がる
**PCMX-Para-chloro-meta-xylenol、
Larson E.(176)

－－

d．手術前の手・前腕の消毒

滅菌の手術野や術野で使用される滅菌器械・医療用具に直接接触する手術チーム構成員は、滅菌ガウンと滅菌手袋を着用する直前に、伝統的ないわゆる手術時手洗の方法で手と前腕を洗う。

理想的には最適の消毒薬は広範囲の活性と速効性、持続性を持つべきである(1,192,193)。

合衆国で商品として使用できる消毒薬はアルコール、クロルヘキシジン、ヨード／ポビドンヨード、ＰＣＭＸ、トリクロサンが含まれる（表６）(176,177,179,194,195)。

アルコールはヨーロッパの諸国のいくつかでは手術時手洗いの標準（gold standard）と考えられている(196-199)。

アルコールを含んだ消毒薬は合衆国ではヨーロッパほどは使われていない。

これは可燃性と皮膚の刺激性によると思われる。

合衆国で手術チームによって最も頻繁に用いられているのはポビドンヨードとグルコン酸クロルヘキシジンである(177)。

しかしながら７．５％ポピドンヨードあるいは４％グルコン酸クロルヘキシジンをクロルヘキシジンアルコール（６０％イソプロピルアルコールと０．５％クロルヘキシジン加７０％イソプロピルアルコール）を比較するとクロルヘキシジンアルコールの方が抗菌活性の残存効果がより強力であった(200、201)。

すべての状況に理想的な薬剤は存在しない。

効能はさておき（受け入れられるかどうかの）最大の要因は、手術室の勤務者が反復使用しての満足度によっている。

残念なことに手術時手洗いの消毒薬の評価は手の細菌のコロニー数に焦点が当てられている。

ＳＳＩの危険性における、手指消毒薬選択の影響についての臨床的な試験は行われていない(195,202-206)。

消毒薬選択以外のさまざまな要因が手術時手洗いの有効性に影響する。
手洗いの技術や、手洗い時間、手の状態、手洗い後の乾燥法や手袋着用法がそのような要因の例である。
最近の研究では手の細菌のコロニー数を減少するためには伝統的に行われている１０分の手洗いとほぼ同様の効果が少なくとも２分間の手洗い時間で得られる(207-211)が、最適な手洗時間はわかっていない。
その日の最初の手洗いは、十分な爪床の下の清浄も含んだやり方にすべきである（大抵はブラシを使う）(180,194,212)。
一日を通して、その後の手洗いに同じような清浄が必要かどうかははっきりしていない。
手術時手洗いの後、手を身体から離し（肘を曲げた状態）、水が指先から肘に滴るように、挙上しておく。
滅菌タオルを使って滅菌ガウンと手袋を着用する前に手指・前腕を乾燥させる(212)。
つけ爪をつけている外科チームの一員は適切な手洗い後ですら手の細菌や真菌のコロニー数が増加しているかもしれない(212,213)。
手におけるグラム陰性細菌の運搬は、つけ爪をつけたほうが多いことが示されている(213)。
心臓血管外科の患者の間でセラチアによるＳＳＩのアウトブレイクが、つけ爪をつけた看護婦に関係していた事例報告がある(214)。
爪の長さとＳＳＩの危険の間の関係は知られていないが、つけ爪であれ生爪であれ長い爪は手袋を破ってしまうだろう(177,180,212)。
手術室のスタッフの爪のマニキュアや宝石によるＳＳＩの危険性の影響については、適切な研究はされていない(194,212,215-217)。

ｅ．感染症を持ったり保菌している手術関係職員の扱い

ある種の微生物の感染や保菌をしている手術関係職員は、ＳＳＩのアウトブレイクや群生に関係づけられてきた(33,34,76,218-237)。
このように病院が、職員から患者への微生物の伝播を防ぐ方針を実行させることは重要である。
これらの方針には、職業関連疾患の扱い、職業に関連した被爆後の予防処置、そして必要なら病気の職員を一時休ませたり、患者と接触させない仕事に配置替えすることが含まれるべきである。
勤務の禁止の方針を実行すべきであるし、当局による病気の職員の就業制限の指示があったとしても、職員には病状や被爆の状況の報告をするよう促し、賃金、利益や地位を奪うような個人的な罰則を科してはならない。

ｆ．抗菌薬の予防的投与

手術時予防的抗菌薬投与（antimicrobial prophylaxis,以下ＡＭＰ）はまさに手術が始まる直前に開始される抗菌薬の短期間投与のことである(239-265)。
ＡＭＰは無菌の組織にしようというのではなく、宿主の防御機構が破綻されないレベルに手術中の細菌汚染を減らそうと厳格に時間を考慮して使用される。
ＡＭＰは術後の汚染によるＳＳＩの予防には関らない(265)。
静脈点滴が近代外科処置で最も普通のＡＭＰの投与経路である(20,26,242,266-281)。
本質的に、全ての確立されたＡＭＰの適応は、手術室で皮膚切開が閉じられる予定手術である。

ＡＭＰの利益を最大にするために以下の４つの原則を守るべきである：

- ●ＡＭＰ薬は、臨床的研究による事実に基づいてＳＳＩ頻度を減少させることがはっきりしている全ての手術、または切開部や臓器／体腔ＳＳＩが破局的になりそうな手術に使用される(266,268,269,282-284)。
- ●ＡＭＰ薬は安全であり、安価であり、手術中に可能性のあるほとんどの汚染菌に対しデータ上は殺菌的であるものを使用する。
- ●皮膚切開時までに血清および組織中の薬剤の殺菌性濃度が確立しているように、初回量の投与時間を決定する。
- ●薬剤の治療域濃度を術中ずっと、血清と組織の両方において維持し、また少なくとも手術室で創が閉じられてから２、３時間まで維持させる(179,266-268,282,284,286)。

全ての手術創に凝固血が存在するので、ＡＭＰ薬の治療血清濃度は、治療組織濃度とともに必然的に重要である。
フィブリン膜に付着した細菌は食作用や創の腔から広がる抗菌薬との接触に抵抗する。

表４は手術におけるＡＭＰの効果を確立するために行われた、手術・部位研究に従った典型的な病原体をまとめたものである。
ＡＭＰの適用を管理する簡単な方法は、術中の細菌汚染の程度を、術後に分類した症例表現であるいわゆる「手術創分類」(表７）を使用することが基本である。

表７：手術創分類

○クラスⅠ／清潔(Clean)：
感染していない手術創で炎症はないもの。
ただ、呼吸、消化管、生殖器、感染していない尿路は入れない。
さらに、清潔創が一期的に閉鎖されて、必要な場合には閉鎖ドレーンが入っている。
非貫通性（鈍的）外傷後の切開創も基準を満たせばここに含めるべき。

○クラスⅡ／準汚染(Clean-Contaminated)：
呼吸器、消化器、生殖器、尿路を含む、よく管理された状態で、異常な汚染がない手術創。
特に、胆道、虫垂、膣、口咽頭はここに含め、明らかな感染がなく、または手術で大きな損傷を起こしていないこと。

○クラスⅢ／汚染(Contaminated)：
開放性の、新鮮な、偶発的な傷。
加えて、滅菌操作を損なう操作（e.g.開胸心マッサージ）か、消化管からの大きな漏出や、急性の膿をもたない炎症のある創はここに含める。

○クラスⅣ／不潔・感染(Dirty-Infected)：
古い外傷性の傷で壊死組織が残っていたり、臨床的に感染が存在していたり、内蔵穿孔がある。
この定義は術後感染を起こす細菌が、手術前から術野に存在することを示唆している。

Garner JS (1) とSimmons BP(2)
（訳者注：ここでクラスⅡを”準汚染”と訳した。他で準清潔と訳す例もあるが、マイルズ氏手術もここに含めるという記載をみると、準汚染としたくなる。）

術者は行う手術の術前から手術創分類を予想してＡＭＰの使用を決定する。

ＡＭＰは、管理された状態でも管腔臓器への侵襲が明らかに加えられる全ての手術に適応される。

このような準汚染手術で最も頻度の高いＳＳＩ病原体を表４に示した。

予定結腸手術、直腸低位前方切除術や直腸腹会陰切除術などの、ある種の準汚染手術では、腸管の内容を空にし、生きている微生物の量を減らす、いわゆる「結腸の準備」といわれる術前の追加処置が必要である(200,239,256,268,284,287)。

この処置には、手術前日から非吸収性の抗菌薬の経口分割投与に引き続き、浣腸と下剤の投与が含まれる(200,288,289)。（訳者注：現在保険では認められていない）

ＡＭＰは時には、内臓への操作もなく、なんら炎症や感染のないことがはっきりしている正常な組織だけに対する切開手術時にも適応される。

これら清潔手術でのＡＭＰの適応で二つのことが良く理解されている：

（１）なんらかの人工血管や人工関節が埋めこまれる時。

（２）切開創ないし臓器／体腔ＳＳＩが破局的な危険となるような手術。

例えば、心臓ペースメーカー植え込み術を含む全ての心臓手術(290)、全ての部位での人工動脈移植や下肢の血行再建を含む血管手術、ほとんどの脳外科手術である（表４）。

何人かは胸部の全ての手術でＡＭＰの使用を勧めている(80,242,264)。

定義から、表７の汚染または不潔手術ではＡＭＰは適応されない。

これらの手術ではしばしば、患者は既に存在する感染に対し、周術的に治療のための抗菌薬を投与されている。

セファロスポリン（複数）は最もよく研究されたＡＭＰ薬である(284)。

これらは多くのグラム陽性およびグラム陰性の微生物に効果がある。

これらは安全であり、好ましい薬理動態で、正当な価格である(242)。

特に、セファゾリン（訳者注：セファメジン(R)）は広く使用されており、一般的に清潔手術の第一選択のＡＭＰ薬と見られている(266)。

もし患者がペニシリン・アレルギーのためセファロスポリンを使用できない場合は、グラム陽性菌をカバーする、クリンダマイシン（訳者注：リンコマイシンのダラシン(R)）またはバンコマイシンが代用とされる。

セファゾリンは多くの準汚染手術に適応されるが(268,291)、遠位腸管手術には嫌気性菌をカバーするセフォキシチン（訳者注：セファマイシンのマーキシン(R)）など（又は他の第２世代セファロスポリン)にすること。

もし患者がアレルギーのためセファロスポリンを安全に使用できない場合は、グラム陰性菌をカバーするものとしてアズトレオナム（訳者注：モノバクタムのアザクタム(R)）を代用する。

しかしながら、クリンダマイシンやメトロニダゾール（訳者注：フラジール(R)、ただし日本で静注薬はない）のような薬剤は、嫌気性菌のカバーを確実にするものにも含まれる。

アミノグリコシドは単独、混合としても、ＡＭＰとしての第一選択としては、滅多に勧められない(242,264)。

表４に引用された文献には、ＡＭＰ選択や用量、抗菌スペクトラムや適応に関する詳細や、他の臨床的な実用情報が提供されている。

ＡＭＰとしてバンコマイシンをルーチンに使用することはいかなる種類の手術でも勧められない(242,266,283,292)。

しかしながら、ＭＲＳＡ縦隔炎やメチシリン耐性の表皮ブドウ球菌による切開部ＳＳＩが多

数見つかるような場合などの、特殊な臨床の場ではバンコマイシンがＡＭＰの選択になるかもしれない。
どのような場合に、ＡＭＰとしてバンコマイシンを使うかの決定は、科学的にはっきりしているわけでない。
使用の決断は、局所で分離されるＭＲＳＡの頻度、特別な手術でのＳＳＩの頻度、感染対策の実行のコンプライアンスの再検討（訳者注：職員が実行しているか）、術者と感染症専門医の相談等を踏まえて行われるべきである。
菌の同定とＡＭＰ薬の感受性を決定するため、注意深いタイムリーなＳＳＩ分離菌の培養による効果的なＳＳＩサーベイランスを行うべきである(80)。
　ＡＭＰに使われるほとんどの薬剤（セファロスポリンなど）は、時間依存性殺菌作用を持つ。
これらの薬剤の治療効果は、そのレベルが試験管内での目標の病原体に対する最小殺菌濃度に大体近い域値を持続的に越えている時、おそらく最大である。
ＡＭＰ薬の治療レベルが維持できる時間を手術時間が越えていると考えられる場合は、ＡＭＰ薬の追加投与がなされるべきである。
セファゾリンのそれは３～４時間と考えられている。
一般に、２回目（ないし３回目）のＡＭＰ薬の投与時期は、以下の３つのパラメーターで評価する。
標準治療量での正常な患者での組織到達濃度、薬剤の大体の半減時間、予想されるＳＳＩ病原体の大体のＭＩＣ90の認識である。
表６の文献で、これらの詳細およびさまざまな特殊事情でＡＭＰとして使用される抗菌薬の重要な特性などを参照すべきである。
基本的な「親指の原則」方針でＡＭＰの量と時間を決める。
例えば、セファゾリンの十分な治療量（１～２ｇ）は成人患者では、皮膚切開前３０分以上前に投与すべきでない(242,285)。
この基本的指針にはわずかの例外がある。
投与量に関して、病的に肥満している患者で適切な効果を得るためには、より多くの量が必要であることが分かっている(293)。
時間に関して、ＡＭＰが適応である帝王切開術を受ける患者では例外がある：初回投与は臍帯がクランプされた後に直ちに投与する(266,272,273)。
バンコマイシンは、標準量では約一時間をかけて投与する。
はっきりしていることは、搬送が遅くなったり手術予定が変更されたりと、手術が開始される時には、組織および血清の濃度が適正以下になっている可能性があるため、いわゆる「オンコール」のＡＭＰ投与は簡単にだいなしになってしまう(242,294)。
ＡＭＰのタイミングと手落ちの責任についての簡単なプロトコールを、実際的にかつ効果的であるように各病院で作成すべきである。

３．手術特性：術中の問題

ａ．手術室環境

（１）換気

　手術室の空気には微生物の付いた埃、糸くず、皮膚表皮、呼吸飛沫を含んでいるかもしれない。
手術室内の空気の微生物レベルは室内で動く人数に直接的に比例する(295)。
このため、手術中に行き来する人数をできるかぎり最小にするように努力しなければならな

い。
Ａ群ベータ溶血性連鎖球菌によるＳＳＩのアウトブレイクが、保菌した手術室勤務者から患者への空気経路感染であることが追跡調査により発見されたことがある(233,237,296,297)。
これらのアウトブレイクで原因となった菌株は、手術室の空気中から回収された(237,296)。
運動や着替えが、膣や直腸の保菌ヶ所からＡ群連鎖球菌の空気撒布を惹き起こす可能性が明らかにされている(233,234,237,297)。
　手術室は廊下や隣接した部屋よりも気圧を高く維持しなければならない(298)。
陽圧は清潔度の低い部屋からより清潔な部屋に空気が流入することを防ぐ。
病院の全ての換気又は空調は手術室も含め、一つは３０％以上、もう一つは９０％以上の効率を持つ二つのフィルター層を一連で持つべきである(299)。
（訳者注：プレフィルターとして上流に粗塵除去、空調機の機能維持に用いられるものと、最終フィルターとして、細菌等を９０％以上除去するものとを直列に設置して空気清浄を行うこと）
手術室の換気系統は慣習的に一時間当たり最低１５回、濾過された空気によって空気を交換し、このうち３回（２０％）は新鮮な空気でなければならない(299､300)。
空気は天井から導入されて床の近くから排気されなければならない(300､301)。
手術室の換気に関しての詳細はアメリカ建築協会(American Institute of Architects)とU.S. Department of health and Human Serviceによって公表されている(299)。（表８）

表８　手術室の換気パラメーター
American Institute of Architects, 1996、(299)

室温：	２０～２３ ℃（６８～７３ °Ｆ）	普通の周辺温度による
相対湿度：	３０～６０％	
空気の動き：	清潔域からより清潔度の低い域に	
換気回数：	一時間あたり最低１５回の全空気交換	
	そのうち最低３回は外気を入れる	

層流と紫外線の使用はある種の手術室においてはＳＳＩの危険を減少させる追加処置として考えられてきた。
層流とは微粒子を含まない空気（いわゆるultraclean air；以下超清潔空気）が無菌手術野を一定の速度（ ０．３～０．５μm/sec ）で動いて通路内の微粒子を掃き出すように設計されている。
空気の流れは垂直又は水平の方向で、再流する空気は一般にＨＥＰＡ(high efficiency particular air)フィルターを通す(302､303)。
ＨＥＰＡフィルターは直径０．３μm以上の粒子を９９．９７％除去する(64､300､302､304)。
超清潔空気の効果を調べた研究のほとんどは整形外科手術しか含んでいない(298,305-311)。
CharnleyとEftaknan が垂直層流と換気排出着（訳者注：いわゆる手術室での宇宙服？）を研究し、ＳＳＩ頻度を９％から１％に減少させたとした(305)。

しかしながら他の変数（例えば術者の経験や技術）が同時に、換気方式としても変化していたので、この研究が学会を困惑させたと思われる。
Lidwellらは、股関節および膝関節の全置換術の８，０００例を越える多施設研究で、超清潔空気のみ、ＡＭＰ投与のみ、ＡＭＰ投与と超清潔空気の組み合わせの各々で深部ＳＳＩの頻度を比較した(307)。
超清潔空気単独使用でのＳＳＩ頻度は３．４％から１．６％に減少したが、一方、ＡＭＰ投与単独でも３．４％から０．８％に減少した。
また両方の使用でＳＳＩ頻度は３．４％から０．７％に減少した。
これらの結果から超清潔空気とＡＭＰは共に整形外科インプラント手術でＳＳＩ発生を減少させるが、ＡＭＰの方が超清潔空気より効果的であることを示している。
術中紫外線照射がＳＳＩの危険を全体的に減少させることは示されていない(94,312)。

（２）環境表面

合衆国内の手術室におけるＳＳＩの重要な原因として内装（例えばテーブルや床、壁、天井、ライト、などなど）の表面が関係づけられることはまれである。
しかしながら各手術後に内装面を型通りに掃除して清潔環境を回復することは重要である(180,212,300,302)。
汚染や目に見える汚れがない場合には、日常的に手術と手術の間に環境表面や備品を消毒することを支持するデータはない。
手術の間に表面や備品に見えるような汚れがある場合には、環境保護庁（Environmental Protection Agency 、以下ＥＰＡ ）が承認した病院用の消毒薬を使って、次の手術までに汚染された範囲の汚れを除去すべきである(180,212,300-302,313-315)。
これは全ての備品と環境表面が、血液や他の感染性のある物質に接触したら掃除と消毒をすべきという労働安全健康局（Occcupational Safety and Health Administration；以下ＯＳＨＡ）の要求に合致している(315)。
その日あるいは夜の最後の手術の後に、日常的にＥＰＡが承認した病院用消毒薬を用いてWet vacuuming（機械を使った湿式吸引清掃）を行う。
手術室内に残されている医療器具には覆いを掛けて、滅菌された装置や備品に掃除と消毒の間、溶液がかからないように注意する(316)。
汚染手術や不潔手術後に特別の掃除方法や手術室を閉鎖することを支持するデータはない(300,301)。

手術棟・室の入り口の外側に粘着性のマットをおいても靴やストレッチャーの車輪の細菌数を減少することは示されていなく、ＳＳＩの危険性を減少させることもない(1,179,295,301)。

（３）細菌学的サンプリング

手術室内の周辺の空気や環境表面の微生物レベルについての標準的なあるいは受け入れられたパラメータはないため、日常的な細菌学的サンプリングは正当化できない。
このような環境の資料採取は疫学的研究でのみ行うべきである。

（４）手術器具の伝統的な滅菌法

手術器具の滅菌が不適切だとＳＳＩのアウトブレイクを起こす(302､317､318)。
高圧蒸気、乾熱、エチレンオキサイドあるいはその他の承認された方法で手術器具の滅菌が可能である。
滅菌方法の質を日常的にモニターすることの重要性については確立している(1､180､212､299)。
蒸気オートクレーブの性能の微生物学的モニタリングは必要であり、生物学的インジケーを

用いて達成される(212､314､319)。
手術器具の滅菌の詳細な勧告が公表されている(212,314,320,321)。

（５）手術器具のハイスピード滅菌

「患者治療器具を即座に使用するために蒸気滅菌する過程」を医療器具推進協会（The Association for the Advancement of Medical Instrumentation；以下ＡＡＭＩ）はハイスピード滅菌（ flash sterilization)と定義している(321)。
（不注意に落とした器具を再処理するなど）いかなる手術でも緊急に器具を滅菌する必要が生じる可能性がある。
ハイスピード滅菌は手術器具や他の品目の緊急の滅菌に使うことを意図されており、追加の器具セットを買うかわりとか、一般的な時間の節約のために好都合だとして使ってはならない。
さらにハイスピード滅菌は重大な感染の危険が高いので埋めこまれる装置（＊）には推薦できない(314､320､321)。
（＊）ＦＤＡによれば埋めこまれる装置とは「手術的に作られたか、あるいはもともとある人体内の空間に、３０日以上残すことを目的に置かれる装置」と定義される(ＡＮＳＩ／Ａ　ＡＭＩ　ＳＴ３７－１９９６)。
ハイスピード滅菌が日常の滅菌に勧められない理由のいくつかには、適時に性能をモニターする生物学的な指針になるものがないことや、滅菌後に保護する包装がない、手術室への搬送時に汚染する可能性がある、使用するサイクルパラメータが少なすぎる（時間、温度、圧）ことがある(319)。
この事に関して幾つか追加するとして、多くの病院では手術室に極めて近くにハイスピード滅菌器を置き、１～３時間で結果がわかる新しい生物学的インジケーターが今ではハイスピード滅菌に利用できる(322-325)。
しかしながらハイスピード滅菌がＳＳＩの危険から見て、伝統的な滅菌法と同等であるとの研究がなされるまで、本来の目的のみに限定すべきである。
ハイスピード滅菌のための滅菌サイクルのパラメータを表９に示した。

表９－スピード滅菌工程のパラメーター（ＡＡＭＩ）(321)

重力置換方式	最少曝露時間と温度
穴の空いていない器具	１３２℃３分
穴の空いていないものと空いているもの	１３２℃１０分
事前真空方式	
穴の空いていない器具	１３２℃３分
穴の空いていないものと空いているもの	１３２℃４分

ｂ．手術時の服装（ surgical attire）と覆い布.

この節での「手術時の服装」という言葉は手術着、帽子とフード、靴カバー、マスク、手袋、ガウンを指す。
実験データで手術室の職員の髪や露出した皮膚や、粘膜面から生きた微生物が落下することが示されているが(75,181,326-330)、ＳＳＩの危険性と手術衣装使用の関係を評価した計画

された臨床研究は少ない。
しかしながら防護具の使用は、患者が手術チームや手術室勤務者の皮膚や粘膜や毛髪に暴露されるのを最小にするとともに、（ＨＩＶや肝炎ビールスのような）患者血液中の感染源から手術室勤務者を防護すると思われる。

（1）手術衣 scrub suit

手術チーム構成員はたいていいわゆる「手術衣」と呼ばれるズボンとシャツからなるユニフォームを着ている。
手術衣の洗濯、着用、包装、交換の手順は非常にさまざまである。
ある施設では手術衣は、病院でのみ洗濯されるのに対し、病院の勤務者に洗濯をさせているところもある。
病院での洗濯と自宅での洗濯とでＳＳＩの危険性について評価した、適切に計画された研究はない(331)。
ある施設では手術衣は手術室でのみ着用するように要求されているが、他の施設では手術室を離れるときに手術衣の上にガウンを着ることを許しているところもある。
手術室看護職員協会(The Association of Operating Room Nurses；以下ＡＯＲＮ)は、手術衣に汚れを見つけたら着替え、許可され管理されている洗濯施設で洗うよう勧告している(212)。
さらにＯＳＨＡは、「衣服に血液や他の感染物質が染み込んだら、直ちにあるいは可能な限り速く、脱ぐ」ように求めている(315)。

（2）マスク

切開部位の可能性のある細菌汚染を予防するために手術中外科用マスクを着けることは、長い間の手術の伝統である。
しかしながら、ＳＳＩの危険を減らすための外科用マスクの効果対費用利益に関して、いくつかの疑問があげられている(328,332-338)。
しかし、マスクは（飛散）血液や体液の不意の暴露から着用者の鼻と口を守る。
ＯＳＨＡは血液や他の強力に感染性のある物質の跳ね掛かりや、しぶき、飛沫があって、それが目や鼻や口を汚染することが合理的に予想される場合には常にマスクと一緒にゴーグルや頑丈に保護する眼鏡や顎まで被う顔面シールドを着用するように求めている(315)。
さらに労働安全健康国際機関 (National Institute for Occupational Safty and Health)によって証明されたＮ９５またはそれ以上のレスピレーターが、患者が感染性の結核を持っているかその疑いのある時は必要としている(339)。
（訳者注：いわゆるＮ９５マスクはＮ９５レスピレーターという）

（3）手術帽子／フード、靴カバー

手術帽子／フードは安価で髪の毛と頭皮の微生物の落下による微生物から術野の汚染を減少させる。
手術中に帽子を着用して手術衣を着ていても、稀にＳＳＩのアウトブレイクが、毛髪や頭皮から分離された微生物によることが突き止められることがある（ 黄色ブドウ球菌、A群連鎖球菌 ）(75,76)。
靴のカバーはＳＳＩの危険性や床の細菌数を減少しないことが示されている(340､341)。
しかし靴カバーは医療従事者が、手術中血液や体液に触れるのを防ぐかもしれない。
ＯＳＨＡは（整形外科手術や穿通外傷症例など）大きな汚染が合理的に予想される場合には手術帽とフードそして靴カバーまたは長靴を着用すべきと規定している(315)。

（４）滅菌手袋

滅菌ガウンを着用してから滅菌手袋をはめる。

手術チームの手洗いをする全員が滅菌手袋を着用することには強い理論的合理性がある。

滅菌手袋は手術室勤務者の手から患者に細菌が伝播するのを最小にし、勤務者の手が患者の血液や体液で汚染されるのを防ぐ。

手袋が（針刺しなどで）破損したらできるだけ早く交換すべきである(315､342､343)。

手袋を２枚重ねて着用すること（二重手袋）は、一重に比べ患者の血液・体液で手が汚れることを少なくする(344､345)。

（５）ガウンと覆い布

手術切開部位と細菌の感染源となる可能性のある部位の無菌操作のために、滅菌ガウンと覆い布を用いてきた。

ガウンは手術時手洗いを行う手術チーム構成員全員が着用し、覆い布は患者にかけられる。

手術ガウンと覆い布がＳＳＩの危険性を減少するという効果を実証した資料は限られている。

研究結果と研究デザインは非常にさまざまであるため、得られたデータの解釈は困難である(329､346-350)。

ガウンと覆い布は（１回使用の）使い捨て製品と（多数回使用の）再生品に分類される。

製造されたガウンと覆い布の材料にかかわらず、これらの用品は液体とウィルスに対して不浸透性でなけらばならない(351､352)。

一般に薄膜や、上塗り、膜で補強されたガウンのみがアメリカ品質検査学会(American Society for Testing and Material；以下ＡＳＴＭ)によって開発された基準を満たす(351-353)。

しかしこれらの「防水ガウン」は、着用者の体からの汗の蒸発や熱の発散を妨げるため快適ではない。

ガウンを選択するときにはこれらの要因を考慮すべきである(353､354)。

血液由来病原体の伝播の防止におけるガウンと覆い布の基準の討議はこの文章の守備範囲を超えている(355)。

ｃ．無菌手技と手術手技

（１）無菌手技

手術時手洗いを行う職員全員による、無菌手技の原則の正確な厳守はＳＳＩ防止の基本である。

覆い布での隔壁で隔てられているだけの麻酔関係職員などの、滅菌野に密接して働く他の職員もこれらの原則を厳格に守るべきである。

麻酔関係者が起源となる病原菌によるＳＳＩが起こっている(34,231,234,356-358)。

麻酔科医と麻酔看護士は、静脈内留置針の確保や気管内挿管、静脈内薬剤・溶液投与のようなさまざまな侵襲的な処置を行う。

注射器の使い回し(360,361)や汚染された注入ポンプ(359,362-364)、更なる処置のために器具を組み立てたり薬液を準備したり(316,360)という、これらの処置の間に無菌の原則を順守しないことが、ＳＳＩを含めて術後感染のアウトブレイクに関係してきた。

麻酔科学領域における感染防止の勧告はすでに公表されている(212,365-367)。

（２）手術手技

華麗な手術は、ＳＳＩの危険を減少させることができると広く信じられている(26,49,179,180,368,369)。

これらの技術としては、適当な血液供給を維持しつつ効果的な止血を行ない、低体温を防止し、やさしく組織を扱い、臓器内へ不用意に手を入れ損傷させることを避けながら（壊死組織や黒焦げになったような）生命活動のない組織を除去し、ドレーンや縫合材料を適切に使い、死腔を作らず、適切な術後創の管理などである。

縫合材料や人工器官、ドレーンを含むいかなる異物も手術部位の炎症を促進し(94)、組織汚染がたいしたことがないレベルでもＳＳＩの可能性を増加する。
縫合材料の差異によるＳＳＩの危険性との関係について調べた文献はたくさんある(370-379)。
一般に単繊維（ monofilament ）の縫合糸が感染の助長効果がもっとも低い(3､94､179､180)。
ドレーンの設置に関する決定は当文献の守備範囲を越えているとはいえ、一般的なポイントを簡潔に記す。
手術切開創を通って設置されたドレーンはＳＳＩの危険性を増加する(380)。
多くの研究者はドレーンのための切開は手術切開創とは離しておくことを提唱している(283､381)。
閉鎖吸引ドレーンを置くと開放ドレーンよりもＳＳＩの危険性が減少することが示されている(174)。
閉鎖吸引ドレーンは術後血腫、血清腫、化膿した物質の排泄に有効であるが、抜去時期も重要である。
ドレーンの設置時間が長いほど、当初滅菌であったドレーンの細菌の付着が多くなる(382)。
手術患者における低体温とは、深部温で３６℃以下と定義され、全身麻酔や寒冷にさらされたり、心筋や中枢神経の保護のための心臓外科の処置のような意図的な冷却のためである(302,383,384)。
大腸直腸手術を行った患者の研究で、低体温がＳＳＩの危険性を増加させた(385)。
中等度低体温は血管収縮、創部への酸素供給の低下と引き続き起こる（白血球などの）食細胞の機能障害などでＳＳＩの危険が増加する(391)。
最近のヒトでの研究で、電気による包帯での切開部の局所加温により組織の酸素化の改善が示された(392)。
これらの処置が創部の腔の酸素化を改善しＳＳＩの危険を減少させることができるかはっきりさせるために、無作為臨床試験が必要である。

４．手術特質：術後の問題

ａ．創部処置

切開層が一期的に閉鎖されるか（皮膚断端が手術終了時に再び接触している）、後で閉鎖されるために開放するか、つまり２次的に処置するべく開放されるかで、術後の創管理の細部が決まる。
ほとんどの場合そうであるが、一期的に閉鎖された場合、切開部は通常２４～４８時間滅菌ドレッシングで被われる(393,394)。
４８時間以降については、切開創をドレッシングしておくべきかどうか、あるいはシャワーや入浴が有害かどうかについてははっきりしていない。
手術創が後に閉鎖するまで２、３日開放された場合には（delayed primary closere）、創は汚染されており、患者の状態が（創部の浮腫など）一期的閉鎖を妨げると外科医は断定し

てきた。
そのような場合、創部は滅菌ドレッシングで包み込まれる。
２次的に処置すべく手術創が開放されていた場合、創部は濡れた滅菌ガーゼで覆い、滅菌ドレッシングで包んでおく。
アメリカ外科大学やＣＤＣその他でも、どんな種類の手術創でも、包帯交換は滅菌した手袋や備品を使うように記載している(180､395-387)。

ｂ．退院計画

今日、多くの患者は手術後非常に速く、手術創が完全に癒える前に退院させられる(398)。
家庭での創管理の適切なプロトコールは存在しないため、家庭で患者本人や家族、訪問看護要員によって行われることの多くは、個別に行われざるをえない。
退院計画の目的は、創の治癒の統合性を維持するために感染の徴候と症状を患者に教育して、何らかの問題が生じたときに誰に連絡をすればよいかを知らせることである。

Ｆ．ＳＳＩサーベイランス

ＳＳＩのサーベイランスを行い、適切なデータを外科医にフィードバックすることが、ＳＳＩの危険性を減らす上で重要であることが示されている(16､399､400)。
サーベイランスを成功させるには、疫学的に意味のある感染の定義（表１、２）、有効な調査方法、およびＳＳＩ進展に関連する危険因子に基づくＳＳＩ発生率の等級別分類とデータのフィードバックが肝要である(25)。

１．ＳＳＩの危険性の等級別分類

ａ．概念

ＳＳＩに関連することが判明した因子のうち、以下の３群の変数が良い予測因子になることが分かった。

(1) 手術部位の細菌汚染の程度そのものを予測する変数、
(2) 手術時間を示す変数、
(3) 宿主の感受性の目安となる変数(25)。

手術部位の細菌汚染の程度そのものを評価するための方式として広く認められているものとしては、１９６４年にNational Academy of SienceとNationalResearch Council（ＮＡＳ／ＮＲＣ）共同で作成されたものがあり、これは１９８２年にＣＤＣによってＳＳＩ調査用に改変された（表７）(2,94)。
この方式では、外科チームが手術終了時に患者の創部を評価する。
簡単で、広く適用できるため、この創部評価法はＳＳＩの危険性を予測するために使われてきた(16､94､126､401-405)。
ある研究者達は、外科医が清潔創のＳＳＩ頻度を他の外科医のそれと比較することを提案した(16､399)。
しかし、ＣＤＣの２つの研究－院内感染の有効性に関する研究：ＳＥＮＩＣ、およびＮＮＩＳ方式－ではＳＳＩの危険性の指標として他の予測変数を導入した。
これらの研究によれば、清潔創に分類されるものの中でもＳＳＩの危険性は各々、１．１％から１５．８％（ＳＥＮＩＣ）、および１．０％から５．４％（ＮＮＩＳ）とばらついていることが示されている(125,126)。
さらに、切開創は手術時に評価されていなかったり、外科チームによって評価されていなかったりしており、この方式の信頼性が疑問になった。

このため、創部評価のみによってＳＳＩ発生率を等級別に分類して報告することは推奨できない。

ＳＥＮＩＣ計画で集められた１０個の変数に関するデータは、多変量解析モデルによって解析され、単純な相加的なＳＳＩの危険性の指標が導かれた(125)。

これらのうちの以下の４つは、各々独立してＳＳＩの危険性に関与していることが判明した：

（１）腹部手術、
（２）２時間以上の手術、
（３）創部分類で汚染または不潔・感染に分類された創部、
（４）退院時に３つ以上の診断名を持つ患者に対して行われた手術。

これらの因子は等しい重みを持ち、該当すれば各１点を加え、このため危険性の指標は０から４点の値を取る。

これの因子を使うことにより、ＳＥＮＩＣ指標では従来の創部分類要綱単独使用に比較して２倍もＳＳＩの危険性を予測することができた。

ＮＮＩＳ危険指標は手術特異的であり、前方向調査で集められたデータに対して適用された。

指標は０から３点の値を取り、３つの独立した等しい重みを持つ因子から決められる。

手術患者は以下のどれかがあれば１点加算される：

（１）アメリカ麻酔学会（ＡＳＡ）分類で３以上（表１０）。
（２）創分類が汚染または不潔・感染（表７）。
（３）手術時間がＴ時間を越える、ただしＴは行われた特定の手術につき手術時間分布の７５パーセンタイルに相当する時間(126)。

患者の重症度（宿主の感受性）(406､407) を見積もるため、ＳＥＮＩＣ危険指数の退院時診断の代りにＡＳＡ分類が用いられており、これは患者が入院中でもカルテから容易に得ることができる（表１０）。

ＳＥＮＩＣの固定した２時間という変化点の代わりに、手術特異的変化点を使用することにより、ＮＮＩＳ危険指数の判別能力が増すことが示された(126)。

（訳者注：ここでの標準手術時間Ｔは、既にＮＮＩＳのサーベイランスで使用されており、その一覧を表１１として、巻末に示した。このガイドラインの中にはもともとはなかったものである。）

表１０－アメリカ麻酔学会（ＡＳＡ） Physical Status分類(406)

分類	患者の術前状態
１	一般的に健康な患者
２	中等度の全身疾患
３	重症の全身疾患があるが日常生活は可能
４	常に生命を脅かすような重症の全身疾患がある
５	手術の有無にかかわらず２４時間以内に死亡すると思われる
６	脳死患者で移植のドナーとして

（訳者注：１９９９年３月時点で、脳死患者で移植のドナーとしての麻酔を行う場合、分類６とすることと定められている。）

---

b．問題点

術者あるいは病院間でのＳＳＩの頻度をしっかり比較するには、頻度の評価を混乱させていると分かっている変数の調整が不可欠である(408)。

前述したような、危険の等級的分類は目的の為に有効である分かっている、しかしこれは一貫して正確にデータを発見、記録するサーベイランス実施者の能力に依存している。

ＮＮＩＳ危険指数に使われている３変数に関していえば、これらの変数が如何に正確に記録されているかに焦点を当てた研究はたった一つである。

Cardoらによると、手術チームの構成員が行った一般および外傷外科手術の創部分類評価の正確度は８８％（９５％信頼区間：８２％－９４％）である(409)。

しかし、Cardoらの結果の再現性に関する懸念に請け合うには、創部分類定義そのものにかなりの曖昧さがある。

手術時間（つまり、皮膚切開から皮膚縫合までの時間）の記録、およびＡＳＡ分類の正確さに関しては研究されていない。

ＮＮＩＳシステムからの未公表の報告では、幾つかの病院では高いＡＳＡ分類であったと過剰に報告している事実があった。

危険指数の変数の記録の信頼性の、さらなる確認が必要である。

さらに、ＮＮＩＳ危険指数は全ての種類の手術に対して、そのＳＳＩの危険を適切に識別しているわけではない(27,410)。

ある手術を受ける患者に特徴的な危険因子の組み合わせのほうが、より予測に便利に思える。

処置に特徴的な危険指数を見つける幾つかの研究が行われており(218,411-414)、この分野の研究はＣＤＣのＮＮＩＳシステムの中で続けられている。

２．ＳＳＩサーベイランスの方法

ＳＥＮＩＣ計画およびＮＮＩＳシステムの両者で使用されているＳＳＩサーベイランスの方法は、急性期病院の入院患者を調べるために作られた。

過去１０年間で、入院から外来（いわゆる外来とか日帰り手術）へと外科的処置の移行は劇的であった。

アメリカ合衆国では２０００年までに全ての手術の７５％が日帰り手術で行われると予想されている(4)。

入院と外来の患者に対して共通のＳＳＩの定義を使用することが適切かもしれないが(415)、監視する手術の種類、評価する危険因子や症例検出法は異なるかも知れない。

新たな予測変数が、日帰り手術患者のＳＳＩの分析から現れるかもしれず、これらの患者に対しては、ＳＳＩの危険の評価は違った方法となるかもしれない。

どの手術を監視するかは、術者と感染対策担当者が共同で決定すべきである。

ほとんどの病院では全ての手術患者を常時監視する余力は持っていないし、危険性の低い幾つかの処置に関しては同じような監視は必要でも無い。

代わりに病院はサーベイランス努力を危険性の高い処置に向けるべきである(416)。

ａ．入院患者のＳＳＩサーベイランス

以下の二つの方法が、単独あるいは一緒に、ＳＳＩを有する入院患者を同定するために使用されてきた：

（１）術者、訓練された看護婦サーベイヤー、または感染対策担当者による手術部位の直接観察(16,97,399,402,409,417-420)

（２）検査結果、カルテ、主治医達との議論等で感染対策担当者が調べる間接的な方法 (15,84,399,402,404,409,418,421-427)。

外科系の文献によると、手術部位の直接観察がＳＳＩ検出の最も正確な方法であるが、感度のデータが欠如している(16,399,402,417,418)。
感染対策の文献に報告されているＳＳＩデータの多くは、間接的な症例検出法に基づいているが(125,126,422,425,426,428-430)、幾つかの直接的な方法を用いた研究も行われている(97､409)。
幾つかの研究では両方の検出法を用いている(84,409,424,427,431)。
間接的方法によるＳＳＩ検出の感度と特異度に単に焦点を当てた研究では、
８３．８％（９５％信頼区間：７５．７％－９１．９％）の感度と９９．８％（９５％信頼区間：９９％－１００％）の特異度が見出されている(409)。
他の研究では、帝王切開後の患者に対して抗菌薬の指示をコンピュータで検索して、カルテの調査を行ったところ、子宮内膜炎検出の感度は８９％であった(432)。
　間接的なＳＳＩの検出は感染対策担当者が調査回診中に容易に行うことができる。
作業には、該当する手術を受けた患者の人口学（訳者注：民族・性別などなど）、感染、手術および検査結果のデータを集めることが含まれる(433)。
これらのデータは、細菌学および病理組織学、検査、薬局データの記載のある患者のカルテおよび放射線科報告、手術記録から得ることができる。
さらに、入院、救急外来および外来受診の記録は、再入院又は経過観察中の退院患者のデータの源である。
　いずれの方法でも、ＳＳＩ症例発見のための最適な頻度は知られておらず、毎日から週３回以下までさまざまであり、患者が退院するまで続けられる。
入院期間がしばしば非常に短いため、正確なＳＳＩ頻度を求めるためには退院後のＳＳＩサーベイランスがますます重要になっている（「退院後のＳＳＩサーベイランス」の項を参照）。
　意味のあるＳＳＩ頻度を計算するためには、該当する手術を受ける患者（すなわち危険性のある人々）全員のデータを収集する必要がある。
目的の一つが危険性の等級的分類のための方法論を確立することであったので、ＮＮＩＳシステムは、全ての手術患者の調査で以下のデータを収集した：
手術日； ＮＮＩＳ手術法分類(434)；術者ＩＤ；患者ＩＤ；年齢と性別；手術時間；創部分類；全身麻酔；ＡＳＡ分類；緊急；外傷；複数個所処置；内視鏡下処置；退院日。
退院日を除けば、これらのデータは手術室記録から手作業で集めるか、またはサーベイランス用のソフトに電子的にダウンロードされ、後者の場合は手作業による書き換えやデータ入力のエラーを大幅に減らすことができる(433)。
危険性で分類されたＳＳＩ頻度の必要性は、感染対策、手術および品質保証に関る人によって違うので、全てのデータ項目があらゆる種類の手術に必要とされるわけではない。
しかし、最低でもＳＳＩの危険性増加の予測変数であることがわかっているものに関してはデータを集める必要がある（「ＳＳＩの危険性の等級的分類」の項を参照）。

ｂ．退院後ＳＳＩサーベイランス

　退院後１２％～８４％のＳＳＩが検出されている(98,337,402,428,435-454)。
少なくとも２つの研究で、手術後２１日以内にほとんどのＳＳＩが明らかになるとされている(446,447)。
手術後の病院滞在日数も引き続き短くなってきているので、多くのＳＳＩは退院後数週間は発見されず、また手術した病院への再入院の要求もないのかもしれない。
入院患者に限った症例発見では、ある手術ではＳＳＩ頻度は低く見積もられる
（例えば、ＣＡＢＧ）（ＣＤＣ／ＮＮＩＳシステムでの未公表データ、１９９８年）。

ＳＳＩ頻度のどんな比較でも、症例発見が退院後に見つかったＳＳＩを含めていたとしても計算に入れるべきである。
比較が正しくあるためには、たとえ同じ施設で時間が経っていたとしても、退院後サーベイランスは同じ方法でなされるべきである。
退院後サーベイランスの方法は、病院によって異なる方法で使用され、成功例から失敗例までさまざまである。
その中には：

（１）患者が、外科または内科診療所への経過観察のため見えた時に直接傷を調べる(150,399,402,404,430,436,440,441,447,452,455)。
（２）外科診療所の患者カルテを再検討する(404,430,439)。
（３）患者への手紙または電話での調査(435,437,438,441,442,444,445,448,449,455-457)。
（４）外科医への手紙または電話での調査(98,428,430,437-439,443,444,446,448,450,451,455)。

（訳者注：３と４について、アメリカではコミュニティホスピタルが多いので、患者はもちろん、術者も病院には常時いない）
ある研究で、患者は自身の傷の感染の評価が困難であることがわかっているので（５２％の特異性、２６％の陽性予測値）(458)、患者への質問によるデータは実際のＳＳＩ頻度を正確に表していないと思われる。
最近 Sandsらは最もＳＳＩを識別するデータベースを決定するため、３種類をコンピュータ検索した。
外来で行われた診断、検査、治療コードの記録；特別な抗菌薬の処方の薬局記録；そして再入院または救急外来訪問の入院記録である(446)。
この研究では、一般に軟部組織感染の治療に使用される抗菌薬の投与を受けていた患者の薬局記録が、高い感度（５０％）と陽性予測値（１９％）を示したが、この方法だけではあまり効果的ではないことも示された。
統合された健康情報システムが進むと、治療の全ての過程を通しての手術患者の追跡が便利に、実際的に、効果的に行われるようになるだろう。
今のところ、退院後サーベイランスの方法でどれが最も感度が良く、特徴をつかみ、実際的であるかの合意はない。
方法の選択は、手術、人的資源と必要とするデータに基づき、病院の特徴を反映させる必要があるだろう。

ｃ．外来患者ＳＳＩサーベイランス

外来患者手術に合併するＳＳＩ検出に、直接および間接的方法の両方が使われてきた。
地区看護婦の家庭訪問では、８年間にわたるヘルニアと静脈瘤手術の研究成果が、ＳＳＩ認識のために術後２週間目の診療所訪問で術者によってなされた調査結果とともに使用されてきた(459)。
正確性が本質的に１００％なのであるが、この方法は広く実行するには困難である。
術者への手紙での質問票の高い回収率が得られている（７２％→９０％）(443,444,446,455,459-461)。
患者への電話での質問への回答頻度はさまざまである（３８％(444)、８１％(457)、８５％(455)）。
患者への手紙での質問票への回答はかなり低い（１５％(455)、３３％(446)）。
今のところ、一つだけではどの方法も推奨できない。

利用できる資源や必要とされるデータによって、どの方法を使うか、どの手術に的を絞るか決める必要がある。
どの検索方法を使うにせよ、外来患者でもＣＤＣ／ＮＮＩＳのＳＳＩの定義（表１と表２）をなんら変更を加えることなく使用することが勧告される。

Ｇ．ガイドラインの評価方法

ＨＩＣＰＡＣのガイドラインの価値は、それらを使う人によって決められる。
その価値を求める手助けとして、ＨＩＣＰＡＣは、どのようにガイドラインを使用者の期待に合わせるか、またどのようにいつガイドラインが広め実行されるべきかを学習する為の評価手段を開発している。

第２部 手術部位感染防止のための勧告

(Recommendations for the Prevention of Surgical Site Infections)

Ａ．理論的根拠

１９９９年の手術部位感染防止のためのガイドラインは、手術部位感染の危険の削減に関する勧告を提供している。
各々の勧告は、存在する科学的データ、理論的根拠、および適応性に基づき分類されている。
しかしながら、勧告を分類するため、以前のＣＤＣのシステムを若干変更してきている。
カテゴリーＩ勧告はＩＡとＩＢを含み、ＨＩＣＰＡＣおよび外科、感染症、および感染制御の各々の分野の専門家により、効果があると見なされているものである。
カテゴリーＩＡとＩＢの勧告は共に、全ての健康管理関係の施設（病院）に適応され、採用されるべきである。
ＩＡとＩＢ勧告の違いは支持する科学的根拠の強さのみである。
カテゴリーⅡ勧告は、カテゴリーＩ勧告よりも支持する科学的データが少ないもの。
これは特殊な院内問題や、特殊な患者集団に対して適応できる。
推薦しないは、効果に関して合意が得られていなかったり、採用を支持するには得られる科学的根拠が十分でないため、提案できないもの。
この様な未解決の問題のために、実践者はそれぞれの組織の中で、これらの行為を採用するかどうか判断すべきである。
連邦政府の規定に則っている勧告は、星印（＊のマーク）が付けてある。

Ｂ．格付け

カテゴリーＩＡ：強く実行することを勧められ、適切に計画された実験的、臨床的、あるいは疫学的な研究に支持されているもの。（以下ＩＡ）
カテゴリーＩＢ：強く実行することを勧められ、幾つかの実験的、臨床的、あるいは疫学的な研究に支持され、そして強力な理論的合理性がある。（以下ＩＢ）
カテゴリーⅡ：実行することが提案されており、示唆に富む臨床的あるいは疫学的な研究または理論的合理性で支持されているもの。（以下Ⅱ）
推薦しない、未解決の問題(unsolved issue)：不十分な証拠しかなく、効果に関する意見の一致がない方策。（以下ＵＩ）
連邦政府の規定で必要とされる行為には星印（＊のマーク）が付けてある。

C．勧告

1．術前

a．術前の患者準備

①いつでも可能なら、予定手術の前に手術創に広がる全ての感染を明らかにしそして治療する。
感染が治るまで遠隔部に感染のある患者の手術は延期する。（ＩＡ）

②手術前の除毛は、切開部あるいは周辺の毛が手術の邪魔にならないかぎり行わない。（ＩＡ）

③除毛する場合には、できれば電気クリッパー（バリカン）を使用して手術直前に除毛する。（ＩＡ）

④全ての糖尿病患者で適切な血清血糖値の管理を行ない、特に過血糖を周術中避ける。（ＩＢ）

⑤常に禁煙をすすめる。
少なくとも予定手術の３０日前からたばこ、葉巻、パイプ、他のたばこの消費（噛み煙草や嗅ぎ煙草のような）を中止するように教育する。（ＩＢ）

⑥ＳＳＩの予防として、手術患者への必要な血液製剤の投与を差し控えることはしない。（ＩＢ）

⑦少なくとも手術前夜に、消毒薬によるシャワーあるいは入浴を指示する。（ＩＢ）

⑧皮膚消毒する前に、切開部位および周辺を十分に洗浄清浄化して大きな汚れを除く。（ＩＢ）

⑨皮膚消毒には基準に合った消毒薬を用いる（表６）。（ＩＢ）

⑩術前の皮膚消毒は中心から同心円を描くように次第に外に広げて行く。
必要な時に切開創を広げたり新しくしたり、ドレーンを入れても十分なように消毒範囲を広くとる。（Ⅱ）

⑪患者の術前処置が許す限り、術前の入院期間は可能なかぎり短縮する。（Ⅱ）

⑫予定手術前のステロイドの漸減や中止（もし医学的に許容されれば）は勧告しない。（ＵＩ）

⑬ただＳＳＩの予防のために、手術患者に栄養療法を許可することは勧告しない。（ＵＩ）

⑭ＳＳＩを予防するために術前、鼻腔にムピロシンを使うことは勧告しない。（ＵＩ）

⑮ＳＳＩを予防するために創部腔の酸素化を強化する方策をとることは勧告しない。（ＵＩ）

b．手術チーム構成員による手指・腕の消毒

①爪を短く、付け爪はしない。（ＩＢ）

②適切な消毒薬（表６）を用いて少なくとも２～５分間の手術時手洗いを行う。
手洗いは肘までの手および前腕まで行う。（ＩＢ）

③手洗いを行った後は、水が指から肘に滴るように、手を身体から離し（肘を曲げた状態）、挙上しておく。
滅菌タオルで手指を乾燥させ、滅菌ガウンと手袋を着用する。（ＩＢ）

④その日の最初の手術時手洗いの前に、全ての爪床の下を清潔にする。（Ⅱ）

⑤手または腕に装飾具を付けない。（Ⅱ）

⑥マニキュアに関する勧告はない。（ＵＩ）

c．感染または保菌している手術関係者の管理

①感染性の感染症の症状や症候が出ている手術関係者は、上司や健康管理職員に正確に報告を出すことを教育し奨励する。（ＩＢ）

②職員が感染性のある状態であるなら、患者処置の責任に関する明確に定義された方針を行う。

これらの方針は以下のことを管理する：

（a）治療を受け、病状を報告する職員の責任

（b）就業制限

（c）就業制限の必要な病気後の、仕事復帰のための解除処置

この方針は職員を義務から外す権限のある人がだれであるかもはっきりさせておく。（ＩＢ）

③義務ではないが、皮膚の損傷から浸出液がある手術関係者から、感染症が除外されるか、適切な治療で感染症が治癒するまで、適切に細菌培養を行う。（ＩＢ）

④もし患者管理区域において疫学的に病原体の飛散と関係しているとされない限り、黄色ブドウ球菌（鼻、手や他の身体部位）やA群連鎖球菌のような病原体を保菌している手術関係職員を、日常的に排除してはならない。（ＩＢ）

d．抗菌薬の予防投与

①抗菌薬の予防投与は必要な場合にのみ行ない、特別な手術にはその最も一般的なＳＳＩの原因となる菌(表４）に対して効果的な、または出版されている推薦(266,268,269,282-284)に基づいて薬剤を選択する（表６）。（ＩＡ）

②初回の抗菌薬の予防投与は静注し、切開が行われる時に血清および組織に薬剤の殺菌濃度が確立している時間とすること。

手術中を通じおよび、少なくとも手術室で傷が閉じられてから２、３時間後まで血清および組織の薬剤の治療濃度を維持すること。（ＩＡ）

③予定の大腸・直腸の手術の前には、上記のｄ２に加え、浣腸や下剤を使用して機械的に結腸の準備を行なうこと。

非吸収性の経口抗菌薬を手術の前日に分割投与する。（ＩＡ）

④高リスクの帝王切開では、臍帯がクランプされた直後に予防的抗菌薬を投与する。（ＩＡ）

⑤バンコマイシンを予防的抗菌薬として日常的に使用してはならない。（ＩＢ）

２．術中

a．換気

①手術室から廊下や隣接区域に向かう換気を陽圧に維持する。（ＩＢ）

②少なくとも１時間に最低１５回の換気を行い、そのうち最低３回は新鮮な空気とする。（ＩＢ）

③アメリカ建築協会(American Institute of Architects)で勧告されているフィルターを使って、全ての空気（再環流空気、新鮮空気とも）をろ過する。（ＩＢ）

④全ての空気は、天井送気し、床に近いところから排気する。（ＩＢ）

⑤ＳＳＩを予防する目的で、紫外線を手術室内で使用しない。（ＩＢ）

⑥器械や、職員や、患者の出入りなど必要時以外、手術室ドアは閉めておく。（ＩＢ）

⑦整形外科手術でインプラントが入るものでは超清潔空気の手術室での施行を考慮する。（Ⅱ）

⑧手術室に入る人数を必要人数だけに制限する。（Ⅱ）

b．環境表面の清掃と消毒

①表面や器械に目に見える血液や、体液による汚れや汚染がある場合、ＥＰＡが承認した病院消毒剤を用いて汚染部を次の手術の前に清掃する。（ＩＢ＊）

②準汚染または汚染手術後でも、特別な清掃や消毒は行わない。（ＩＢ）

③感染制御のために手術棟および個々の手術室の入り口に粘着マットを使用することはしない。（ＩＢ）

④湿式吸引清掃での手術室の床の清掃は、ＥＰＡが承認した病院消毒剤で、その日または夜の最後の手術終了後に行う。（Ⅱ）

⑤表面や器械に目に見える汚染がなければ、手術と手術との間で手術室を消毒することは勧告されていない。（ＵＩ）

c．細菌学的検体採取

①手術室の日常的な環境検体採取は行わない。疫学的調査の一部として環境表面や、空気の細菌学的検体採取を行うようにする。（ＩＢ）

d．手術器械の消毒

①全ての手術器械を出版されている指針に従って滅菌する(212,299,314,321)。（ＩＢ）

②ハイスピード滅菌は緊急に治療用具必要になった時にのみ行うこと（例えば、不用意に落した道具の再処理など）。
ハイスピード滅菌を、便利だから、追加の器具セットを買うかわりとか、時間の節約のために使ってはならない。（ＩＢ）

e．手術着および覆い布

①手術が始まる直前やすでに手術が始まっていたり、滅菌器械が展開されていた場合は、手術室入室時、完全に口と鼻を覆うマスクを着用する。
手術の間中、マスクは着けている。（ＩＢ＊）

②手術部に入るときは、頭部および顔面の髪を完全に覆うように帽子かフードをつける。（ＩＢ＊）

③ＳＳＩの防止のためにシューズカバーをつけるのではない。（ＩＢ＊）

④手術時手洗いを行う手術チーム構成員は滅菌手袋を着用する。
手袋は滅菌ガウンを着た後に着用する。（ＩＢ＊）

⑤滅菌ガウンや滅菌覆い布には、濡れてもバリアー効果のある材質ものを用いる（つまり防水のもの）。（ＩＢ）

⑥手術着が目に見えて汚れたり、血液や感染性の物質で汚染、染み込んだ場合は交換する。（ＩＢ＊）

⑦手術着(scrub suits)をどのようにどこで洗濯するか、着用を手術部のみに限定するか、手術室の外に出るときに白衣を着るかについての勧告はない。（ＵＩ）

f．無菌法と手術手技

①血管内用具留置時（例えば、中心静脈カテーテル）、脊椎麻酔時、硬膜外カテーテル挿入時、また静脈内投与薬剤の準備と投与の時は無菌法の原則を順守する。（ＩＡ）

②滅菌器具や滅菌液体は使う直前に開ける。（Ⅱ）

③組織を丁寧に取り扱い、効果的な止血を維持し、死滅組織や異物（糸、焦げた組織、壊死組織片など）を最小限に止め、手術部位の死腔をなくす。（ＩＢ）
④もし術者が手術部位が極度に汚染していると考えた場合（汚染創または不潔・感染創）、一次縫合を遅らせるかまたは開放創として、二次的に閉鎖する。（ＩＢ）
⑤ドレナージが必要と考えられる時は、閉鎖式吸引ドレーンを用いる。
ドレンは手術切開創からではなく、離れたところに切開し挿入する。
ドレーンはできるだけ速やかに抜去する。（ＩＢ）

３．手術後の創処置

ａ．一期的に閉鎖した切開創は、術後２４－４８時間は滅菌ドレッシング材で保護する。（ＩＢ）
ｂ．包交や手術部位に接触する前後には手洗いを行う。（ＩＢ）
ｃ．創部のドレッシングを交換する時は、滅菌テクニックを用いる。（Ⅱ）
ｄ．適切な切開創処置の行い方、ＳＳＩの徴候、これらの徴候の報告する必要性について、患者と家族に教育を行う。（Ⅱ）
ｅ．一期的に閉鎖した切開創を、４８時間以降覆うべきかどうか、また被覆なしでシャワー・入浴を行う適切な時期についての勧告はない。（ＵＩ）

４．サーベイランス

ａ．入院患者でも外来患者でもＳＳＩの診断のために、ＣＤＣのＳＳＩの定義（表１）を変更することなく用いること。（ＩＢ）
ｂ．入院患者症例発見のために（再入院も含める）、入院中の直接的前向性観察検出、間接的前向性観察検出、あるいはその両者を入院の期間中ずっと用いること。（ＩＢ）
ｃ．ある種の手術（例えば、ＣＡＢＧなど）に引き続くＳＳＩの発見のための退院後サーベイランスが行われる時には、利用できる資源と必要とするデータに見合った方法をとること。（Ⅱ）
ｄ．外来患者感染症例の発見に、利用できる資源と必要とするデータに見合った方法をとること。（ＩＢ）
ｅ．手術終了時、手術チームの構成員が手術創分類を決める。（Ⅱ）
ｆ．サーベイランスの対象となった手術を受けるそれぞれの症例に対し、ＳＳＩの危険の増加に関する変数(例えば、手術創分類、ＡＳＡ分類、手術時間など）を記録する。（ＩＢ）
ｇ．ＳＳＩの危険の増加に関係すると分かっている変数（例えば，ＮＮＩＳ危険指数）により、定期的に手術別特異的ＳＳＩ頻度の階層分類を計算する。（ＩＢ）
ｈ．適宜、手術チーム構成員に階層分類した手術特異的ＳＳＩ頻度を報告する。
これらの頻度計算の適切な回数と形式は、階層化される症例数（これで主に決る）や目的、持続的に改善しようとするイニシャチブによって決められる。（ＩＢ）
ｉ．感染対策委員会が外科医別資料を利用できるようにするべきという勧告はない（ＵＩ）

表１１－ＮＮＩＳ術式別の手術のＴ時間

術式	Ｔ値（時間）
ＣＡＢＧ	5
心臓外科	5
その他の心血管系	2
胸部	3
他の呼吸器系	1
虫垂切除	1
胆管・肝・膵臓	4
胆嚢摘出	2
結腸手術	3
胃手術	3
小腸手術	3
開腹術	2
他の消化器官	3
四肢切断	1
脊椎固定	3
骨折の手術固定	2
人工関節	3
他の筋骨格系	2
帝王切開	1
開腹子宮摘出	2
経腟的子宮摘出	2
他の婦人科手術	1
腎摘	3
前立腺摘出	4
他の性腺泌尿器科系	2
頭部・頚部手術	4
他の耳、鼻、口、咽頭	3
開頭術	4
脳室シャント	2
他の神経系	2
ヘルニア手術	2
乳房切除	2
臓器移植	7
皮膚移植	2
脾摘	2
血管手術	3
他の内分泌系	2
他の目	2
他の血管・リンパ系	2
他の皮膚関係	2

編集協力

１．感染対策実行委員会

市川高夫（麻酔科）
太田宏信（消化器内科）
田崎和之（腎臓内科）
田村雄助（循環器内科）
寺下美恵子（看護部副部長）
本間美菜子
鈴木綾子
斎藤まり子
皆川ユリ
田村晶子（薬剤部）

２．リンクナース

大湊愛子
松岡長子
星　義弘
鈴木まゆみ
天木　薫
田辺　綾
清水千香子
影山美和
高橋知子
平松和美
高橋美絵
西巻奈美
中野ともみ
長谷川紋子
深沢和子
渡辺紀和子
小竹アサ子
阿部みゆき
吉沢弘子
早福久美子

３．その他

小出　勝（検査科）

＊所属のない方は看護婦です

Guideline for Prevention of Surgical Site Infection, 1999

Alicia J. Mangram, MD
Teresa C. Horan, MPH, CIC
Michele L. Pearson, MD
Leah Christine Silver, BS
William R. Jarvis, MD
The Hospital Infection Control Practices Advisory Committee

Sections

Abstract

EXECUTIVE SUMMARY
The "Guideline for Prevention of Surgical Site Infection, 1999"presents the Centers for Disease Control and Prevention (CDC)'s recommendations for the prevention of surgical site infections (SSIs), formerly called surgical wound infections.
This two-part guideline updates and replaces previous guidelines.1,2
Part I, "Surgical Site Infection: An Overview,"describes the epidemiology, definitions, microbiology, pathogenesis, and surveillance of SSIs. Included is a detailed discussion of the pre-, intra-, and postoperative issues relevant to SSI genesis.
Part II, "Recommendations for Prevention of Surgical Site Infection,"represents the consensus of the Hospital Infection Control Practices Advisory Committee(HICPAC) regarding strategies for the prevention of SSIs.3
Whenever possible, the recommendations in Part II are based on data from well-designed scientific studies.
However, there are a limited number of studies that clearly validate risk factors and prevention measures for SSI. By necessity, available studies have often been conducted in narrowly defined patient populations or for specific kinds of operations, making generalization of their findings to all specialties and types of operations potentially problematic.
This is especially true regarding the implementation of SSI prevention measures. Finally, some of the infection control practices routinely used by surgical teams cannot be rigorously studied for ethical or logistical reasons (e.g., wearing vs not wearing gloves).
Thus, some of the recommendations in Part II are based on a strong theoretical rationale and suggestive evidence in the absence of confirmatory scientific knowledge.
It has been estimated that approximately 75% of all operations in the United States will be performed in "ambulatory,""same-day,"or "outpatient"operating rooms by the turn of the century.4 In recommending various SSI prevention methods, this document makes no distinction between surgical care delivered in such settings and that provided in conventional inpatient operating rooms.
This document is primarily intended for use by surgeons, operating room nurses, postoperative inpatient and clinic nurses, infection control professionals, anesthesiologists, healthcare epidemiologists, and other personnel directly responsible for the prevention of nosocomial infections.
This document does not:
Specifically address issues unique to burns, trauma, transplant procedures, or transmission of bloodborne pathogens from healthcare worker to patient, nor does it specifically address details of SSI prevention in pediatric surgical practice.
It has been recently shown in a multicenter study of pediatric surgical patients that characteristics related to the operations are more important than those related to the physiologic status of the patients.5
In general, all SSI prevention measures effective in adult surgical care are indicated in pediatric surgical care.
Specifically address procedures performed outside of the operating room (e.g., endoscopic procedures), nor does it provide guidance for infection prevention for invasive procedures such as cardiac catheterization or interventional radiology. Nonetheless, it is likely that many SSI prevention strategies also could be applied or adapted to reduce infectious complications associated with these procedures.
Specifically recommend SSI prevention methods unique to minimally invasive operations (i.e., laparoscopic surgery).
Available SSI surveillance data indicate that laparoscopic operations generally have a lower or comparable SSI risk when contrasted to open operations.6-11 SSI prevention measures applicable in open operations (e.g., open cholecystectomy) are indicated for their laparoscopic counterparts (e.g., laparoscopic cholecystectomy).
Recommend specific antiseptic agents for patient preoperative skin preparations or for healthcare worker hand/forearm antisepsis. Hospitals should choose from products recommended for these activities in the latest Food and Drug Administration (FDA) monograph.12

I. Surgical Site Infection (SSI): An Overview

A. INTRODUCTION

Before the mid-19th century, surgical patients commonly developed postoperative "irritative fever,"followed by purulent drainage from their incisions,overwhelming sepsis, and often death. It was not until the late 1860s, after Joseph Lister introduced the principles of antisepsis, that postoperative infectious morbidity decreased substantially.
Lister•fs work radically changed surgery from an activity associated with infection and death to a discipline that could eliminate suffering and prolong life.
Currently, in the United States alone, an estimated 27 million surgical procedures are performed each year.13
The CDC•fs National Nosocomial Infections Surveillance (NNIS) system, established in 1970, monitors reported trends in nosocomial infections in U.S. acute-care hospitals.
Based on NNIS system reports, SSIs are the third most frequently reported nosocomial infection, accounting for 14% to 16% of all nosocomial infections among hospitalized patients.14 During 1986 to 1996, hospitals conducting SSI surveillance in the NNIS system reported 15,523 SSIs following 593,344 operations (CDC, unpublished data). Among surgical patients,
SSIs were the most common nosocomial infection, accounting for 38% of all such infections.
Of these SSIs, two thirds were confined to the incision, and one third involved organs or spaces accessed during the operation.
When surgical patients with nosocomial SSI died, 77% of the deaths were reported to be related to the infection, and the majority (93%) were serious infections involving organs or spaces accessed during the operation.
In 1980, Cruse estimated that an SSI increased a patient•fs hospital stay by approximately 10 days and cost an additional $2,000.15,16
A 1992 analysis showed that each SSI resulted in 7.3 additional postoperative hospital days, adding $3,152 in extra charges.17 Other studies corroborate that increased length of hospital stay and cost are associated with SSIs.18,19
Deep SSIs involving organs or spaces, as compared to SSIs confined to the incision, are associated with even greater increases in hospital stays and costs.20,21
Advances in infection control practices include improved operating room ventilation, sterilization methods, barriers, surgical technique, and availability of antimicrobial prophylaxis.
Despite these activities, SSIs remain a substantial cause of morbidity and mortality among hospitalized patients.
This may be partially explained by the emergence of antimicrobial-resistant pathogens and the increased numbers of surgical patients who are elderly and/or have a wide variety of chronic, debilitating, or immunocompromising underlying diseases. There also are increased numbers of prosthetic implant and organ transplant operations performed.
Thus, to reduce the risk of SSI, a systematic but realistic approach must be applied with the awareness that this risk is influenced by characteristics of the patient, operation, personnel, and hospital.

B. KEY TERMS USED IN THE GUIDELINE

1. Criteria for defining SSIs

The identification of SSI involves interpretation of clinical and laboratory findings, and it is crucial that a surveillance program use definitions that are consistent and standardized; otherwise, inaccurate or uninterpretable SSI rates will be computed and reported.
The CDC•fs NNIS system has developed standardized surveillance criteria for defining SSIs (Table 1).22

Table 1. Criteria for Defining a Surgical Site Infection (SSI)*

Superficial Incisional SSI
Infection occurs within 30 days after the operation and infection involves only skin or subcutaneous tissue of the incision and at least one of the following:
1. Purulent drainage, with or without

laboratory confirmation, from the superficial incision.

2. Organisms isolated from an aseptically obtained culture of fluid or tissue from the superficial incision.

3. At least one of the following signs or symptoms of infection: pain or tenderness, localized swelling, redness, or heat and superficial incision is deliberately opened by surgeon, unless incision is culture-negative.

4. Diagnosis of superficial incisional SSI by the surgeon or attending physician.

Do not report the following conditions as SSI:

1. Stitch abscess (minimal inflammation and discharge confined to the points of suture penetration).

2. Infection of an episiotomy or newborn circumcision site.

3. Infected burn wound.

4. Incisional SSI that extends into the fascial and muscle layers (see deep incisional SSI).

Note: Specific criteria are used for identifying infected episiotomy and circumcision sites and burn wounds.433

Deep incisional SSI

Infection occurs within 30 days after the operation if no implant•õ is left in place or within 1 year if implant is in place and the infection appears to be related to the operation and infection involves deep soft tissues (e.g., fascial and muscle layers) of the incision and at least one of the following:

1. Purulent drainage from the deep incision but not from the organ/space component of the surgical site.

2. A deep incision spontaneously dehisces or is deliberately opened by a surgeon when the patient has at least one of the following signs or symptoms: fever (>38•‹C), localized pain, or tenderness, unless site is culture-negative.

3. An abscess or other evidence of infection involving the deep incision is found on direct examination, during reoperation, or by histopathologic or radiologic examination.

4. Diagnosis of a deep incisional SSI by a surgeon or attending physician.

Notes:

1. Report infection that involves both superficial and deep incision sites as deep incisional SSI.

2. Report an organ/space SSI that drains through the incision as a deep incisional SSI.

Organ/space SSI

Infection occurs within 30 days after the operation if no implant•õ is left in place or within 1 year if implant is in place and the infection appears to be related to the operation and infection involves any part of the anatomy (e.g., organs or spaces), other than the incision, which was opened or manipulated during an operation and at least one of the following:

1. Purulent drainage from a drain that is placed through a stab wound•ö into the organ/space.

2. Organisms isolated from an aseptically obtained culture of fluid or tissue in the organ/space.

3. An abscess or other evidence of infection involving the organ/space that is found on direct examination, during reoperation, or by histopathologic or radiologic examination.

4. Diagnosis of an organ/space SSI by a surgeon or attending physician.

* Horan TC et al. 22

•õNational Nosocomial Infection Surveillance definition: a nonhuman-derived implantable foreign body (e.g., prosthetic heart valve, nonhuman vascular graft, mechanical heart, or hip prosthesis) that is permanently placed in a patient during surgery.

•öIf the area around a stab wound becomes infected, it is not an SSI.

It is considered a skin or soft tissue infection, depending on its depth.

By these criteria, SSIs are classified as being either incisional or organ/space. Incisional SSIs are further divided into those involving only skin and subcutaneous tissue (superficial incisional SSI) and those involving deeper soft tissues of the incision (deep incisional SSI).

Organ/space SSIs involve any part of the anatomy (e.g.,organ or space) other than incised body wall layers, that was opened or manipulated during an operation (Figure).

Figure. Cross-section of abdominal wall depicting

CDC classifications of surgical site infection.22

Table 2 lists site-specific classifications used to differentiate organ/space SSIs.

For example, in a patient who had an appendectomy and subsequently developed an intra-abdominal abscess not draining through the incision, the infection would bereported as an organ/space SSI at the intra-abdominal site.

Failure to use objective criteria to define SSIs has been shown to substantially affect reported SSI rates.23,24

The CDC NNIS definitions of SSIs have been applied consistently by surveillance and surgical personnel in many settings and currently are a de facto national standard.22,25

2. Operating suite

A physically separate area that comprises operating rooms and their interconnecting hallways and ancillary work areas such as scrub sink rooms.

No distinction is made between operating suites located in conventional inpatient hospitals and those used for "same-day"surgical care, whether in a hospital or a free-standing facility.

3. Operating room

A room in an operating suite where operations are performed.

4. Surgical personnel

Any healthcare worker who provides care to surgical patients during the pre-, intra-, or postoperative periods.

5. Surgical team member

Any healthcare worker in an operating room during the operation who has a surgical care role. Members of the surgical team may be "scrubbed"or not; scrubbed members have direct contact with the sterile operating field or sterile instruments or supplies used in the field (refer to "Preoperative Hand/Forearm Antisepsis"section).

C. MICROBIOLOGY

According to data from the NNIS system, the distribution of pathogens isolated from SSIs has not changed markedly during the last decade (Table 3).26,27

Table 3. Distribution of Pathogens Isolated*
From Surgical Site Infections, National
Nosocomial Infections Surveillance System, 1986
to 1996

Staphylococcus aureus, coagulase-negative staphylococci, Enterococcus spp., and Escherichia coli remain the most frequently isolated pathogens.

An increasing proportion of SSIs are caused by antimicrobial-resistant pathogens, such as methicillin-resistant S. aureus (MRSA),28,29 or by Candida albicans.30

From 1991 to1995, the incidence of fungal SSIs among patients at NNIS hospitals increased from 0.1 to 0.3 per 1,000 discharges.30

The increased proportion of SSIs caused by resistant pathogens and Candida spp. may reflect increasing numbers of severely ill and immunocompromised surgical patients and the impact of widespread use of broad-spectrum antimicrobial agents.

Outbreaks or clusters of SSIs have also been caused by unusual pathogens, such as Rhizopus oryzae, Clostridium perfringens, Rhodococcus bronchialis, Nocardia farcinica, Legionella pneumophila and Legionella dumoffii, and Pseudomonas multivorans.

These rare outbreaks have been traced to contaminated adhesive dressings,31 elastic bandages,32 colonized surgical personnel,33,34 tap water,35 or contaminated disinfectant solutions.36

When a cluster of SSIs involves an unusual organism, a formal epidemiologic investigation should be conducted.

D. PATHOGENESIS

Microbial contamination of the surgical site is a necessary precursor of SSI.

The risk of SSI can be conceptualized according to the following relationship37,38:

Quantitatively, it has been shown that if a surgical site is contaminated with >105 microorganisms per gram of tissue, the risk of SSI is markedly increased.39

However, the dose of contaminating microorganisms required to produce infection may be much lower when foreign material is present at the site (i.e., 100 staphylococci per gram of tissue introduced on silk sutures).40-42

Microorganisms may contain or produce toxins and other substances that increase their ability to invade a host, produce damage within the host, or survive on or in host tissue.

For example, many gram-negative bacteria produce endotoxin, which stimulates cytokine production.

In turn, cytokines can trigger the systemic inflammatory response syndrome that sometimes leads to multiple system organ failure.43-45
One of the most common causes of multiple system organ failure in
modern surgical care is intra-abdominal infection.46,47
Some bacterial surface components, notably polysaccharide capsules, inhibit phagocytosis,48 a critical and early host defense response to microbial contamination.
Certain strains of clostridia and streptococci produce potent exotoxins that disrupt cell membranes or alter cellular metabolism.49
A variety of microorganisms, including gram-positive bacteria such as coagulase-negative staphylococci, produce glycocalyx and an associated component called "slime,"50-55 which physically shields bacteria from phagocytes or inhibits the binding or penetration of antimicrobial agents.56
Although these and other virulence factors are well defined, their mechanistic relationship to SSI development has not been fully determined.

For most SSIs, the source of pathogens is the endogenous flora of the patient•fs skin, mucous membranes, or hollow viscera.57
When mucous membranes or skin is incised, the exposed tissues are at risk for contamination with endogenous flora.58
These organisms are usually aerobic gram-positive cocci (e.g., staphylococci), but may include fecal flora (e.g., anaerobic bacteria and gram-negative aerobes) when incisions are made near the perineum or groin.
When a gastrointestinal organ is opened during an operation and is the source of pathogens, gram-negative bacilli (e.g., E. coli), gram-positive organisms (e.g., enterococci), and sometimes anaerobes (e.g., Bacillus fragilis) are the typical SSI isolates.
Table 4 lists operations and the likely SSI pathogens associated with them.

Table 4. Operations, Likely Surgical Site Infection (SSI) Pathogens, and References on Usage of Antimicrobial Prophylaxis*

Seeding of the operative site from a distant focus of infection can be another source of SSI pathogens,59-68 particularly in patients who have a prosthesis or other implant placed during the operation. Such devices provide a nidus for attachment of the organism.50,69-73

Exogenous sources of SSI pathogens include surgical personnel (especially members of the surgical team),74-78 the operating room environment (including air), and all tools, instruments, and materials brought to the sterile field during an operation (refer to "Intraoperative Issues"section).
Exogenous flora are primarily aerobes, especially gram-positive organisms (e.g., staphylococci and streptococci).
Fungi from endogenous and exogenous sources rarely cause SSIs, and their pathogenesis is
not well understood.79

E. RISK AND PREVENTION

The term risk factor has a particular meaning in epidemiology and, in the context of SSI pathophysiology and prevention, strictly refers to a variable that has a significant, independent association with the development of SSI after a specific operation.
Risk factors are identified by multivariate analyses in epidemiologic studies.
Unfortunately, the term risk factor often is used in the surgical literature in a broad sense to include patient or operation features which, although associated with SSI development in univariate analysis, are not necessarily independent predictors.80
The literature cited in the sections that follow includes risk factors identified by both univariate and multivariate analyses.

Table 5 lists patient and operation characteristics that may influence the risk of SSI development.

Table 5. Patient and Operation Characteristics That May Influence the Risk of Surgical Site Infection Development

These characteristics are useful in two ways: (1) they allow stratification of operations, making surveillance data more comprehensible; and, (2) knowledge of risk factors before certain operations may allow for targeted prevention measures.
For example, if it is known that a patient has a remote site infection, the surgical team may reduce SSI risk by scheduling an operation after the infection has resolved.

An SSI prevention measure can be defined as an action or set of actions intentionally taken to reduce the risk of an SSI.
Many such techniques are directed at reducing opportunities for microbial contamination of the patient•fs tissues or sterile surgical instruments; others are adjunctive, such as using antimicrobial prophylaxis or avoiding unnecessary traumatic tissue dissection.
Optimum application of SSI prevention measures requires that a variety of patient and operation characteristics be carefully considered.

1. Patient characteristics

In certain kinds of operations, patient characteristics possibly associated with an increased risk of an SSI include coincident remote site infections 59-68 or colonization,81-83 diabetes,84-87 cigarette smoking,85,88-92 systemic steroid use,84,87,93 obesity (>20% ideal body weight),85-87,94-97 extremes of age,92,98-102 poor nutritional status,85,94,98,103-105 and perioperative transfusion of certain blood products.106-109

a. Diabetes

The contribution of diabetes to SSI risk is controversial,84-86,98,110 because the independent contribution of diabetes to SSI risk has not typically been assessed after controlling for potential confounding factors.
Recent preliminary findings from a study of patients who underwent coronary artery bypass graft showed a significant relationship between increasing levels of HgA1c and SSI rates.111
Also, increased glucose levels (>200 mg/dL) in the immediate postoperative period (48 hours) were associated with increased SSI risk.112,113
More studies are needed to assess the efficacy of perioperative blood glucose control as a prevention measure.

b. Nicotine use

Nicotine use delays primary wound healing and may increase the risk of SSI.85
In a large prospective study, current cigarette smoking was an independent risk factorfor sternal and/or mediastinal SSI following cardiac surgery.85
Other studies have corroborated cigarette smoking as an important SSI risk factor.88-92
The limitation of these studies, however, is that terms like current cigarette smoking and active smokers are not always defined.
To appropriately determine the contribution of tobacco use to SSI risk, standardized definitions of smoking history must be adopted and used in studies designed to control for confounding variables.

c. Steroid use

Patients who are receiving steroids or other immunosuppressive drugs preoperatively may be predisposed to developing SSI,84,87 but the data supporting this relationship are contradictory.
In a study of long-term steroid use in patients with Crohn•fs disease, SSI developed significantly more often in patients receiving preoperative steroids (12.5%) than in patients without steroid use (6.7%).93
In contrast, other investigations have not found a relationship between steroid use and SSI risk.98,114,115

d. Malnutrition

For some types of operations, severe protein-calorie malnutrition is crudely associated with postoperative nosocomial infections, impaired wound healing dynamics, or death.116-124
The National Academy of Sciences/National Research Council (NAS/NRC),94 Study on the Efficacy of Infection Control (SENIC),125 and NNIS126 schemes for SSI risk stratification do not explicitly incorporate nutritional status as a predictor variable, although it may be represented indirectly in the latter two.
In a widely quoted 1987 study of 404 high-risk general surgery operations, Christou and coworkers derived an SSI probability index in which final predictor variables were patient age, operation duration, serum albumin level, delayed hypersensitivity test score, and intrinsic wound contamination level.117
Although this index predicted SSI risk satisfactorily for 404 subsequent patients and was generally received as a significant advance in SSI risk stratification, it is not widely used in SSI surveillance data analysis, surgical infection research, or analytic epidemiology.

Theoretical arguments can be made for a belief that severe preoperative malnutrition should increase the risk of both incisional and organ/space SSI.
However, an epidemiologic association between incisional SSI and malnutrition is difficult to demonstrate consistently for

all surgical subspecialties.118-120,124,127-131
Multivariate logistic regression modeling has shown that preoperative protein-calorie malnutrition is not an independent predictor of mediastinitis after cardiac bypass operations.85,132

In the modern era, total parenteral nutrition (TPN) and total enteral alimentation (TEA) have enthusiastic acceptance by surgeons and critical care specialists.118,133-137
However, the benefits of preoperative nutritional repletion of malnourished patients in reducing SSI risk are unproven.
In two randomized clinical trials, preoperative "nutritional therapy"did not reduce incisional and organ/space SSI risk.138-141
In a recent study of high-risk pancreatectomy patients with cancer, the provision of TPN preoperatively had no beneficial effect on SSI risk.142
A randomized prospective trial involving 395 general and thoracic surgery patients compared outcomes for malnourished patients preoperatively receiving either a 7- to 15-day TPN regimen or a regular preoperative hospital diet.
Allpatients were followed for 90 days postoperatively.
There was no detectable benefit of TPN administration on the incidence of incisional or organ/space SSI.143
Administering TPN or TEA may be indicated in a number of circumstances, but such repletion cannot be viewed narrowly as a prevention measure for organ/space or incisional SSI risk.
When a major elective operation is necessary in a severely malnourished patient, experienced surgeons often use both pre- and postoperative nutritional support in consideration of the major morbidity associated with numerous potential complications, only one of which is organ/space SSI.118,124,130,133,137,138,144-149
In addition, postoperative nutritional support is important for certain major oncologic operations,135,136 after many operations on major trauma victims,134 or in patients suffering a variety of catastrophic surgical complications that preclude eating or that trigger a hypermetabolic state.
Randomized clinical trials will be necessary to determine if nutritional support alters SSI risk in specific patient-operation combinations.

e. Prolonged preoperative hospital stay
Prolonged preoperative hospital stay is frequently suggested as a patient characteristic associated with increased SSI risk.
However, length of preoperative stay is likely a surrogate for severity of illness and co-morbid conditions requiring inpatient work-up and/or therapy before the operation.16,26,65,85,94,100,150,151

f. Preoperative nares colonization with Staphylococcus aureus
S. aureus is a frequent SSI isolate.
This pathogen is carried in the nares of 20% to 30% of healthy humans.81 It has been known for years that the development of SSI involving S. aureus is definitely associated with preoperative nares carriage of the organism in surgical patients.81
A recent multivariate analysis demonstrated that such carriage was the most powerful independent risk factor for SSI following cardiothoracic operations.82

Mupirocin ointment is effective as a topical agent for eradicating S. aureus from the nares of colonized patients or healthcare workers.
A recent report by Kluytmans and coworkers suggested that SSI risk was reduced in patients who had cardiothoracic operations when mupirocin was applied preoperatively to their nares, regardless of carrier status.152
In this study, SSI rates for 752 mupirocin-treated patients were compared with those previously observed for an untreated group of 928 historical control patients, and the significant SSI rate reduction was attributed to the mupirocin treatment.
Concerns have been raised regarding the comparability of the two patient groups.153 Additionally, there is concern that mupirocin resistance may emerge, although this seems unlikely when treatment courses are brief.81
A prospective, randomized clinical trial will be necessary to establish definitively that eradication of nasal carriage of S. aureus is an effective SSI prevention method in cardiac surgery.
Such a trial has recently been completed on 3,909 patients in Iowa.83
Five types of operations in two facilities were observed.
Preliminary analysis showed a significant association between nasal carriage of S. aureus and subsequent SSI development.
The effect of mupirocin on reducing SSI risk is yet to be determined.

g. Perioperative transfusion
It has been reported that perioperative transfusion of leukocyte-containing allogeneic blood components is an apparent risk factor for the development of postoperative bacterial infections, including SSI.106
In three of five randomized trials conducted in patients undergoing elective colon resection for cancer, the risk of SSI was at least doubled in patients receiving blood transfusions.107-109
However, on the basis of detailed epidemiologic reconsiderations, as many as 12 confounding variables may have influenced the reported association, and any effect of transfusion on SSI risk may be either small or nonexistent.106
Because of methodologic problems, including the timing of transfusion, and use of nonstandardized SSI definitions, interpretation of the available data is limited.
A meta-analysis of published trials will probably be required for resolution of the controversy.154
There is currently no scientific basis for withholding necessary blood products from surgical patients as a means of either incisional or organ/space SSI risk reduction.

2. Operative characteristics: Preoperative issues

a. Preoperative antiseptic showering
A preoperative antiseptic shower or bath decreases skin microbial colony counts. In a study of >700 patients who received two preoperative antiseptic showers, chlorhexidine reduced bacterial colony counts ninefold (2.8•~102 to 0.3), while povidone-iodine or triclocarbanmedicated soap reduced colony counts by 1.3- and 1.9-fold, respectively.155
Other studies corroborate these findings.156,157
Chlorhexidine gluconate-containing products require several applications to attain maximum antimicrobial benefit, so repeated antiseptic showers are usually indicated.158
Even though preoperative showers reduce the skin•fs microbial colony counts, they have not definitively been shown to reduce SSI rates.159-165

b. Preoperative hair removal
Preoperative shaving of the surgical site the night before an operation is associated with a significantly higher SSI risk than either the use of depilatory agents or no hair removal.16,100,166-169
In one study, SSI rates were 5.6% in patients who had hair removed by razor shave compared to a 0.6% rate among those who had hair removed by depilatory or who had no hair removed.166
The increased SSI risk associated with shaving has been attributed to microscopic cuts in the skin that later serve as foci for bacterial multiplication. Shaving immediately before the operation compared to shaving within 24 hours preoperatively was associated with decreased SSI rates (3.1% vs 7.1%); if shaving was performed >24 hours prior to operation, the SSI rate exceeded 20%.166
Clipping hair immediately before an operation also has been associated with a lower risk of SSI than shaving or clipping the night before an operation (SSI rates immediately before = 1.8% vs night before = 4.0%).170-173
Although the use of depilatories has been associated with a lower SSI risk than shaving or clipping,166,167 depilatories sometimes produce hypersensitivity reactions.166
Other studies showed that preoperative hair removal by any means was associated with increased SSI rates and suggested that no hair be removed.100,174,175

c. Patient skin preparation in the operating room
Several antiseptic agents are available for preoperative preparation of skin at the incision site (Table 6).

Table 6. Mechanism and Spectrum of Activity of Antiseptic Agents Commonly Used for Preoperative Skin Preparation and Surgical Scrubs

The iodophors (e.g., povidone-iodine), alcohol-containing products, and chlorhexidine gluconate are the most commonly used agents. No studies have adequately assessed the comparative effects of these preoperative skin antiseptics on SSI risk in well-controlled, operation-specific studies.

Alcohol is defined by the FDA as having one of the following active ingredients: ethyl alcohol, 60% to 95% by volume in an aqueous solution, or isopropyl alcohol, 50% to 91.3% by volume in an aqueous solution.12
Alcohol is readily available, inexpensive, and remains the most effective and rapid-acting skin antiseptic.176

Aqueous 70% to 92% alcohol solutions have germicidal activity against bacteria, fungi, and viruses, but spores can be resistant.176,177 One potential disadvantage of the use of alcohol in the operating room is its flammability.176-178

Both chlorhexidine gluconate and iodophors have broad spectra of antimicrobial activity.177,179-181 In some comparisons of the two antiseptics when used as preoperative hand scrubs, chlorhexidine gluconate achieved greater reductions in skin microflora than did povidone-iodine and also had greater residual activity after a single application.182-184

Further, chlorhexidine gluconate is not inactivated by blood or serum proteins.176,179,185,186 Iodophors may be inactivated by blood or serum proteins, but exert a bacteriostatic effect as long as they are present on the skin.178,179

Before the skin preparation of a patient is initiated, the skin should be free of gross contamination (i.e., dirt, soil, or any other debris).187

The patient•fs skin is prepared by applying an antiseptic in concentric circles, beginning in the area of the proposed incision.

The prepared area should be large enough to extend the incision or create new incisions or drain sites, if necessary.1,177,187

The application of the skin preparation may need to be modified, depending on the condition of the skin (e.g., burns) or location of the incision site (e.g., face).

There are reports of modifications to the procedure for preoperative skin preparation which include: (1) removing or wiping off the skin preparation antiseptic agent after application, (2) using an antiseptic-impregnated adhesive drape, (3) merely painting the skin with an antiseptic in lieu of the skin preparation procedure described above, or (4) using a "clean"versus a "sterile"surgical skin preparation kit.188-191

However, none of these modifications has been shown to represent an advantage.

d. Preoperative hand/forearm antisepsis

Members of the surgical team who have direct contact with the sterile operating field or sterile instruments or supplies used in the field wash their hands and forearms by performing a traditional procedure known as scrubbing (or the surgical scrub) immediately before donning sterile gowns and gloves.

Ideally, the optimum antiseptic used for the scrub should have a broad spectrum of activity, be fast-acting, and have a persistent effect.1,192,193

Antiseptic agents commercially available in the United States for this purpose contain alcohol, chlorhexidine, iodine/iodophors, para-chloro-meta-xylenol, or triclosan (Table 6).176,177,179,194,195

Alcohol is considered the gold standard for surgical hand preparation in several European countries.196-199 Alcohol-containing products are used less frequently in the United States than in Europe, possibly because of concerns about flammability and skin irritation.

Povidone-iodine and chlorhexidine gluconate are the current agents of choice for most U.S. surgical team members.177

However, when 7.5% povidone-iodine or 4% chlorhexidine gluconate was compared to alcoholic chlorhexidine (60% isopropanol and 0.5% chlorhexidine gluconate in 70% isopropanol), alcoholic chlorhexidine was found to have greater residual antimicrobial activity.200,201

No agent is ideal for every situation, and a major factor, aside from the efficacy of any product, is its acceptability by operating room personnel after repeated use. Unfortunately, most studies evaluating surgical scrub antiseptics have focused on measuring hand bacterial colony counts.

No clinical trials have evaluated the impact of scrub agent choice on SSI risk.195,202-206

Factors other than the choice of antiseptic agent influence the effectiveness of the surgical scrub. Scrubbing technique, the duration of the scrub, the condition of the hands, or the techniques used for drying and gloving are examples of such factors. Recent studies suggest that scrubbing for at least 2 minutes is as effective as the traditional 10-minute scrub in reducing hand bacterial colony counts,207-211 but the optimum duration of scrubbing is not known.

The first scrub of the day should include a thorough cleaning underneath fingernails (usually with a brush).180,194,212

It is not clear that such cleaning is a necessary part of subsequent scrubs during the day.

After performing the surgical scrub, hands should be kept up and away from the body (elbows in flexed position) so that water runs from the tips of the fingers toward the elbows.

Sterile towels should be used for drying the hands and forearms before the donning of a sterile gown and gloves.212

A surgical team member who wears artificial nails may have increased bacterial and fungal colonization of the hands despite performing an adequate hand scrub.212,213

Hand carriage of gram-negative organisms has been shown to be greater among wearers of artificial nails than among non-wearers.213

An outbreak of Serratia marcescens SSIs in cardiovascular surgery patients was found to be associated with a surgical nurse who wore artificial nails.214

While the relationship between nail length and SSI risk is unknown, long nails?artificial or natural?may be associated with tears in surgical gloves.177,180,212

The relationship between thewearing of nail polish or jewelry by surgical team members and SSI risk has not been adequately studied.194,212,215-217

e. Management of infected or colonized surgical personnel

Surgical personnel who have active infections or are colonized with certain microorganisms have been linked to outbreaks or clusters of SSIs.33,34,76,218-237 Thus, it is important that healthcare organizations implement policies to prevent transmission of microorganisms from personnel to patients.

These policies should address management of job-related illnesses, provision of postexposure prophylaxis after job-related exposures and, when necessary, exclusion of ill personnel from work or patient contact.

While work exclusion policies should be enforceable and include a statement of authority to exclude ill personnel, they should also be designed to encourage personnel to report their illnesses and exposures and not penalize personnel with loss of wages, benefits, or job status.238

f. Antimicrobial prophylaxis

Surgical antimicrobial prophylaxis (AMP) refers to a very brief course of an antimicrobial agent initiated just before an operation begins.239-265

AMP is not an attempt to sterilize tissues, but a critically timed adjunct used to reduce the microbial burden of intraoperative contamination to a level that cannot overwhelm host defenses.

AMP does not pertain to prevention of SSI caused by postoperative contamination.265 Intravenous infusion is the mode of AMP delivery used most often in modern surgical practice.20,26,242,266-281

Essentially all confirmed AMP indications pertain to elective operations in which skin incisions are closed in the operating room.

Four principles must be followed to maximize the benefits of AMP:

Use an AMP agent for all operations or classes of operations in which its use has been shown to reduce SSI rates based on evidence from clinical trials or for those operations after which incisional or organ/space SSI would represent a catastrophe.266,268,269,282-284

Use an AMP agent that is safe, inexpensive, and bactericidal with an in vitro spectrum that covers the most probable intraoperative contaminants for the operation.

Time the infusion of the initial dose of antimicrobial agent so that a bactericidal concentration of the drug is established in serum and tissues by the time the skin is incised.285

Maintain therapeutic levels of the antimicrobial agent in both serum and tissues throughout the operation and until, at most, a few hours after the incision is closed in the operating room.179,266-268,282,284,286

Because clotted blood is present in all surgical wounds, therapeutic serum levels of AMP agents are logically important in addition to therapeutic tissue levels.

Fibrin-enmeshed bacteria may be resistant to phagocytosis or to contact with antimicrobial agents that diffuse from the wound space.

Table 4 summarizes typical SSI pathogens according to operation type and cites studies that establish AMP efficacy for these operations.

A simple way to organize AMP indications is based on using the surgical wound classification scheme shown in Table 7, which employs descriptive case features to postoperatively grade the degree of intraoperative microbial contamination.

Table 7. Surgical Wound Classification

Class I/Clean: An uninfected operative wound in which no inflammation is encountered and the respiratory, alimentary, genital, or uninfected urinary tract is not entered. In addition, clean wounds are primarily closed and, if necessary, drained with closed drainage. Operative

incisional wounds that follow nonpenetrating (blunt) trauma should be included in this category if they meet the criteria.

Class II/Clean-Contaminated: An operative wound in which the respiratory, alimentary, genital, or urinary tracts are entered under controlled conditions and without unusual contamination.

Specifically, operations involving the biliary tract, appendix, vagina, and oropharynx are included in this category, provided no evidence of infection or major break in technique is encountered.

Class III/Contaminated: Open, fresh, accidental wounds.

In addition, operations with major breaks in sterile technique (e.g., open cardiac massage) or gross spillage from the gastrointestinal tract, and incisions in which acute, nonpurulent inflammation is encountered are included in this category.

Class IV/Dirty-Infected: Old traumatic wounds with retained devitalized tissue and those that involve existing clinical infection or perforated viscera.

This definition suggests that the organisms causing postoperative infection were present in the operative field before the operation.

Garner JS1 and Simmons BP.2

A surgeon makes the decision to use AMP by anticipating preoperatively the surgical wound class for a given operation.

AMP is indicated for all operations that entail entry into a hollow viscus under controlled conditions.

The most frequent SSI pathogens for such clean-contaminated operations are listed in Table 4 .

Certain clean-contaminated operations, such as elective colon resection, low anterior resection of the rectum, and abdominoperineal resection of the rectum, also require an additional preoperative protective maneuver called "preparation of the colon,"to empty the bowel of its contents and to reduce the levels of live microorganisms.200,239,256,268,284,287

This maneuver includes the administration of enemas and cathartic agents followed by the oral administration of nonabsorbable antimicrobial agents in divided doses the day before the operation.200,288,289

AMP is sometimes indicated for operations that entail incisions through normal tissue and in which no viscus is entered and no inflammation or infection is encountered. Two well-recognized AMP indications for such clean operations are: (1) when any intravascular prosthetic material or a prosthetic joint will be inserted, and (2) for any operation in which an incisional or organ/space SSI would pose catastrophic risk.

Examples are all cardiac operations, including cardiac pacemaker placement, 290 vascular operations involving prosthetic arterial graft placement at any site or the revascularization of the lower extremity, and most neurosurgical operations (Table 4).

Some have advocated use of AMP during all operations on the breast.80,242,264

By definition, AMP is not indicated for an operation classified in Table 7 as contaminated or dirty.

In such operations, patients are frequently receiving therapeutic antimicrobial agents perioperatively for established infections.

Cephalosporins are the most thoroughly studied AMP agents.284

These drugs are effective against many gram-positive and gram-negative microorganisms.

They also share the features of demonstrated safety, acceptable pharmacokinetics, and a reasonable cost per dose.242

In particular, cefazolin is widely used and generally viewed as the AMP agent of first choice for clean operations.266

If a patient is unable to receive a cephalosporin because of penicillin allergy, an alternative for gram-positive bacterial coverage is either clindamycin or vancomycin.

Cefazolin provides adequate coverage for many clean-contaminated operations, 268,291 but AMP for operations on the distal intestinal tract mandates use of an agent such as cefoxitin (or some other second-generation cephalosporin) that provides anaerobic coverage.

If a patient cannot safely receive a cephalosporin because of allergy, a reasonable alternative for gram-negative coverage is aztreonam. However, an agent such as clindamycin or metronidazole should also be included to ensure anaerobic coverage.

The aminoglycosides are seldom recommended as first choices for AMP, either as single drugs or as components of combination regimens.242,264

References cited in Table 4 provide many details regarding AMP choices and dosages, antimicrobial spectra and properties, and other practical clinical information.

The routine use of vancomycin in AMP is not recommended for any kind of operation.242,266,283,292

However, vancomycin may be the AMP agent of choice in certain clinical circumstances, such as when a cluster of MRSA mediastinitis or incisional SSI due to methicillin-resistant coagulase-negative staphylococci has been detected.

A threshold has not been scientifically defined that can support the decision to use vancomycin in AMP.

The decision should involve consideration of local frequencies of MRSA isolates, SSI rates for particular operations, review of infection prevention practices for compliance, and consultation between surgeons and infectious disease experts.

An effective SSI surveillance program must be operational, with careful and timely culturing of SSI isolates to determine species and AMP agent susceptibilities.80

Agents most commonly used for AMP (i.e., cephalosporins) exhibit time-dependent bactericidal action.

The therapeutic effects of such agents are probably maximized when their levels continuously exceed a threshold value best approximated by the minimal bactericidal concentration value observed for the target pathogens in vitro.

When the duration of an operation is expected to exceed the time in which therapeutic levels of the AMP agent can be maintained, additional AMP agent should be infused.

That time point for cefazolin is estimated as 3 to 4 hours.

In general, the timing of a second (or third, etc.) dose of any AMP drug is estimated from three parameters: tissue levels achieved in normal patients by a standard therapeutic dose, the approximate serum half-life of the drug, and awareness of approximate MIC90 values for anticipated SSI pathogens.

References in Table 6 should be consulted for these details and important properties of antimicrobial agents used for AMP in various specialties.

Basic "rules of thumb"guide decisions about AMP dose sizes and timing.

For example, it is believed that a full therapeutic dose of cefazolin (1-2 g) should be given to adult patients no more than 30 minutes before the skin is incised.242,285 There are a few exceptions to this basic guide.

With respect to dosing, it has been demonstrated that larger doses of AMP agents are necessary to achieve optimum effect in morbidly obese patients.293 With respect to timing, an exception occurs for patients undergoing cesarean section in whom AMP is indicated: the initial dose is administered immediately after the umbilical cord is clamped.266,272,273

If vancomycin is used, an infusion period of approximately 1 hour is required for a typical dose.

Clearly, the concept of "on-call"infusion of AMP is flawed simply because delays in transport or schedule changes can mean that suboptimal tissue and serum levels may be present when the operation starts.242,294

Simple protocols of AMP timing and oversight responsibility should be locally designed to be practical and effective.

3. Operative characteristics: Intraoperative issues

a. Operating room environment

(1) Ventilation

Operating room air may contain microbial-laden dust, lint, skin squames, or respiratory droplets. The microbial level in operating room air is directly proportional to the number of people moving about in the room.295

Therefore, efforts should be made to minimize personnel traffic during operations.

Outbreaks of SSIs caused by group A beta-hemolytic streptococci have been traced to airborne transmission of the organism from colonized operating room personnel to patients.233,237,296,297

In these outbreaks, the strain causing the outbreak was recovered from the air in the operating room.237,296 It has been demonstrated that exercising and changing of clothing can lead to airborne dissemination of group A streptococci from vaginal or rectal carriage.233,234,237,297

Operating rooms should be maintained at positive pressure with respect to corridors and adjacent areas.298

Positive pressure prevents airflow from less clean areas into more clean areas. All ventilation or air conditioning systems in hospitals, including those in operating rooms, should have two filter beds in series, with the efficiency of the first filter bed being 30% and that of the second filter bed being 90%.299

Conventional operating room ventilation systems produce a minimum of about 15 air changes of filtered air per hour, three

(20%) of which must be fresh air.299,300 Air should be introduced at the ceiling and exhausted near the floor.300,301 Detailed ventilation parameters for operating rooms have been published by the American Institute of Architects in collaboration with the U.S.Department of Health and Human Services (Table 8).299

Table 8. Parameters for Operating Room Ventilation, American Institute of Architects, 1996

Laminar airflow and use of UV radiation have been suggested as additional measures to reduce SSI risk for certain operations.
Laminar airflow is designed to move particle-free air (called "ultraclean air") over the aseptic operating field at a uniform velocity (0.3 to 0.5 um/sec), sweeping away particles in its path. Laminar airflow can be directed vertically or horizontally, and recirculated air is usually passed through a high efficiency particulate air (HEPA) filter.302,303
HEPA filters remove particles 0.3um in diameter with an efficiency of 99.97%.64,300,302,304
Most of the studies examining the efficacy of ultraclean air involve only orthopedic operations.298,305-311
Charnley and Eftaknan studied vertical laminar airflow systems and exhaust-ventilated clothing and found that their use decreased the SSI rate from 9% to 1%.305
However, other variables (i.e., surgeon experience and surgical technique) changed at the same time as the type of ventilation, which may have confounded the associations.
In a multicenter study examining 8,000 total hip and knee replacements, Lidwell et al. compared the effects of ultraclean air alone, antimicrobial prophylaxis alone, and ultraclean air in combination with antimicrobial prophylaxis on the rate of deep SSIs.307
The SSI rate following operations in which ultraclean air alone was used decreased from 3.4% to 1.6%, whereas the rate for those who received only antimicrobial prophylaxis decreased from 3.4% to 0.8%.
When both interventions were used in combination, the SSI rate decreased from 3.4% to 0.7%. These findings suggest that both ultraclean air and antimicrobial prophylaxis can reduce the incidence of SSI following orthopedic implant operations, but antimicrobial prophylaxis is more beneficial than ultraclean air.
Intraoperative UV radiation has not been shown to decrease overall SSI risk.94,312

(2) Environmental surfaces
Environmental surfaces in U.S. operating rooms (e.g., tables, floors, walls, ceilings, lights) are rarely implicated as the sources of pathogens important in the development of SSIs.
Nevertheless, it is important to perform routine cleaning of these surfaces to reestablish a clean environment after each operation.180,212,300,302
There are no data to support routine disinfecting of environmental surfaces or equipment between operations in the absence of contamination or visible soiling.
When visible soiling of surfaces or equipment occurs during an operation, an Environmental Protection Agency (EPA)-approved hospital disinfectant should be used to decontaminate the affected areas before the next operation.180,212,300-302,313-315
This is in keeping with the Occupational Safety and Health Administration (OSHA) requirement that all equipment and environmental surfaces be cleaned and decontaminated after contact with blood or other potentially infectious materials.315
Wet-vacuuming of the floor with an EPA-approved hospital disinfectant is performed routinely after the last operation of the day or night.
Care should be taken to ensure that medical equipment left in the operating room be covered so that solutions used during cleaning and disinfecting do not contact sterile devices or equipment.316
There are no data to support special cleaning procedures or closing of an operating room after a contaminated or dirty operation has been performed.300,301
Tacky mats placed outside the entrance to an operating room/suite have not been shown to reduce the number of organisms on shoes or stretcher wheels, nor do they reduce the risk of SSI.1,179,295,301

(3) Microbiologic sampling
Because there are no standardized parameters by which to compare microbial levels obtained from cultures of ambient air or environmental surfaces in the operatingroom, routine microbiologic sampling cannot be justified.
Such environmental sampling should only be performed as part of an epidemiologic investigation.

(4) Conventional sterilization of surgical instruments
Inadequate sterilization of surgical instruments has resulted in SSI outbreaks.302,317,318
Surgical instruments can be sterilized by steam under pressure, dry heat,ethylene oxide, or other approved methods.
The importance of routinely monitoring the quality of sterilization procedures has been established.1,180,212,299
Microbial monitoring of steam autoclave performance is necessary and can be accomplished by use of a biological indicator.212,314,319
Detailed recommendations for sterilization of surgical instruments have been published.212,314,320,321

(5) Flash sterilization of surgical instruments
The Association for the Advancement of Medical Instrumentation defines flash sterilization as "the process designated for the steam sterilization of patient care items for immediate use."321
During any operation, the need for emergency sterilization of equipment may arise (e.g., to reprocess an inadvertently dropped instrument).
However, flash sterilization is not intended to be used for either reasons of convenience or as an alternative to purchasing additional instrument sets or to save time.
Also, flash sterilization is not recommended for implantable devices because of the potential for serious infections.314,320,321
Flash sterilization is not recommended as a routine sterilization method because of the lack of timely biologic indicators to monitor performance, absence of protective packaging following sterilization, possibility for contamination of processed items during transportation to operating rooms, and use of minimal sterilization cycle parameters (i.e., time, temperature, pressure).319
To address some of these concerns, many hospitals have placed equipment for flash sterilization in close proximity to operating rooms and new biologic indicators that provide results in 1 to 3 hours are now available for flash-sterilized items.322-325
Nevertheless, flash sterilization should be restricted to its intended purpose until studies are performed that can demonstrate comparability with conventional sterilization methods regarding risk of SSI.
Sterilization cycle parameters for flash sterilization are shown in Table 9.

Table 9. Parameters for Flash Sterilization Cycles, Association for the Advancement of Medical Instrumentation

b. Surgical attire and drapes
In this section the term surgical attire refers to scrub suits, caps/hoods, shoe covers, masks, gloves, and gowns.
Although experimental data show that live microorganisms are shed from hair, exposed skin, and mucous membranes of operating room personnel,75,181,326-330 few controlled clinical studies have evaluated the relationship between the use of surgical attire and SSI risk.
Nevertheless, the use of barriers seems prudent to minimize a patient•fs exposure to the skin, mucous membranes, or hair of surgical team members, as well as to protect surgical team members from exposure to blood and bloodborne pathogens (e.g., human immunodeficiency virus and hepatitis viruses).

(1) Scrub suits
Surgical team members often wear a uniform called a "scrub suit"that consists of pants and a shirt.
Policies for laundering, wearing, covering, and changing scrub suits vary greatly.
Some policies restrict the laundering of scrub suits to the facility, while other facilities have policies that allow laundering by employees.
There are no well-controlled studies evaluating scrub suit laundering as an SSI risk factor.331 Some facilities have policies that restrict the wearing of scrub suits to the operating suite, while other facilities allow the wearing of cover gowns over scrub suits when personnel leave the suite.
The Association of Operating Room Nurses recommends that scrub suits be changed after they become visibly soiled and that they be laundered only in an approved and monitored laundry facil-

ity.212
Additionally, OSHA regulations require that "if a garment(s) is penetrated by blood or other potentially infectious materials, the garment(s) shall be removed immediately or as soon as feasible."315

(2) Masks
The wearing of surgical masks during operations to prevent potential microbial contamination of incisions is a longstanding surgical tradition.
However, some studies have raised questions about the efficacy and cost-benefit of surgical masks in reducing SSI risk.328,332-338
Nevertheless, wearing a mask can be beneficial since it protects the wearer•fs nose and mouth from inadvertent exposures (i.e., splashes) to blood and other body fluids.
OSHA regulations require that masks in combination with protective eyewear, such as goggles or glasses with solid shields, or chin-length face shields be worn whenever splashes, spray, spatter, or droplets of blood or other potentially infectious material may be generated and eye, nose, or mouth contamination can be reasonably anticipated.315 In addition, a respirator certified by the National Institute for Occupational Safety and Health with protection factor N95 or higher is required when the patient has or is suspected of having infectious tuberculosis.339

(3) Surgical caps/hoods and shoe covers
Surgical caps/hoods are inexpensive and reduce contamination of the surgical field by organisms shed from the hair and scalp.
SSI outbreaks have occasionally been traced to organisms isolated from the hair or scalp (S. aureus and group A Streptococcus),75,76 even when caps were worn by personnel during the operation and in the operating suites.

The use of shoe covers has never been shown to decrease SSI risk or to decrease bacteria counts on the operating room floor.340,341
Shoe covers may, however, protect surgical team members from exposure to blood and other body fluids during an operation.
OSHA regulations require that surgical caps or hoods and shoe covers or boots be worn in situations when gross contamination can reasonably be anticipated (e.g., orthopedic operations, penetrating trauma cases).315

(4) Sterile gloves
Sterile gloves are put on after donning sterile gowns.
A strong theoretical rationale supports the wearing of sterile gloves by all scrubbed members of the surgical team.
Sterile gloves are worn to minimize transmission of microorganisms from the hands of team members to patients and to prevent contamination of team members•fhands with patients•fblood and body fluids.
If the integrity of a glove is compromised (e.g., punctured), it should be changed as promptly as safety permits.315,342,343
Wearing two pairs of gloves (double-gloving) has been shown to reduce hand contact with patients•f blood and body fluids when compared to wearing only a single pair.344,345

(5) Gowns and drapes
Sterile surgical gowns and drapes are used to create a barrier between the surgical field and potential sources of bacteria.
Gowns are worn by all scrubbed surgical team members and drapes are placed over the patient.
There are limited data that can be used to understand the relationship of gown or drape characteristics with SSI risk.
The wide variation in the products and study designs make interpretation of the literature difficult.329,346-350

Gowns and drapes are classified as disposable (single use) or reusable (multiple use).
Regardless of the material used to manufacture gowns and drapes, these items should be impermeable to liquids and viruses.351,352
In general, only gowns reinforced with films, coatings, or membranes appear to meet standards developed by the American Society for Testing and Materials.351-353
However, such "liquid-proof"gowns may be uncomfortable because they also inhibit heat loss and the evaporation of sweat from the wearer•fs body.
These factors should be considered when selecting gowns.353,354
A discussion of the role of gowns and drapes inpreventing the transmission of bloodborne pathogens is beyond the scope of this document.355

c. Asepsis and surgical technique

(1) Asepsis
Rigorous adherence to the principles of asepsis by all scrubbed personnel is the foundation of surgical site infection prevention.
Others who work in close proximity to the sterile surgical field, such as anesthesia personnel who are separated from the field only by a drape barrier, also must abide by these principles.
SSIs have occurred in which anesthesia personnel were implicated as the source of the pathogen.34,231,234,356-358
Anesthesiologists and nurse anesthetists perform a variety of invasive procedures such as placement of intravascular devices and endotracheal tubes, and administration of intravenous drugs and solutions.
Lack of adherence to the principles of asepsis during such procedures,359 including use of common syringes360,361 and contaminated infusion pumps,359,362-364 and the assembly of equipment and solutions in advance of procedures,316,360 have been associated with outbreaks of postoperative infections, including SSI.
Recommendations for infection control practices in anesthesiology have been published.212,365-367

(2) Surgical technique
Excellent surgical technique is widely believed to reduce the risk of SSI.26,49,179,180,368,369
Such techniques include maintaining effective hemostasis while preserving adequate blood supply, preventing hypothermia, gently handling tissues, avoiding inadvertent entries into a hollow viscus, removing devitalized (e.g., necrotic or charred) tissues, using drains and suture material appropriately, eradicating dead space, and appropriately managing the postoperative incision.

Any foreign body, including suture material, a prosthesis, or drain, may promote inflammation at the surgical site94 and may increase the probability of SSI after otherwise benign levels of tissue contamination.
Extensive research compares different types of suture material and their presumed relationships to SSI risk.370-379
In general, monofilament sutures appear to have the lowest infection-promoting effects.3,94,179,180

A discussion of appropriate surgical drain use and details of drain placement exceed the scope of this document, but general points should be briefly noted.
Drains placed through an operative incision increase incisional SSI risk.380
Many authorities suggest placing drains through a separate incision distant from the operative incision.283,381 It appears that SSI risk also decreases when closed suction drains are used rather than open drains.174
Closed suction drains can effectively evacuate postoperative hematomas or seromas, but timing of drain removal is important.
Bacterial colonization of initially sterile drain tracts increases with the duration of time the drain is left in place.382

Hypothermia in surgical patients, defined as a core body temperature below 36•‹C, may result from general anesthesia, exposure to cold, or intentional coolingsuch as is done to protect the myocardium and central nervous system during cardiac operations.302,383,384
In one study of patients undergoing colorectal operations, hypothermia was associated with an increased SSI risk.385
Mild hypothermia appears to increase incisional SSI risk by causing vasoconstriction, decreased delivery of oxygen to the wound space, and subsequent impairment of function of phagocytic leukocytes (i.e., neutrophils).386-390
In animal models, supplemental oxygen administration has been shown to reverse the dysfunction of phagocytes in fresh incisions.391
In recent human experiments, controlled local heating of incisions with an electrically powered bandage has been shown to improve tissue oxygenation.392
Randomized clinical trials are needed to establish that measures which improve wound space oxygenation can reduce SSI risk.

4. Operative characteristics: Postoperative issues

a. Incision care
The type of postoperative incision care is determined by whether the incision is closed primarily (i.e., the skin edges are re-approximated at the end of the operation), left open to be closed later, or left open to heal by second intention.
When a surgical incision is closed primarily, as most are, the incision is usually covered with a sterile dressing for 24 to 48 hours.393,394
Beyond 48 hours, it is unclear whether an incision must be covered by a dressing or

whether showering or bathing is detrimental to healing.
When a surgical incision is left open at the skin level for a few days before it is closed (delayed primary closure), a surgeon has determined that it is likely to be contaminated or that the patient•fs condition prevents primary closure (e.g., edema at the site).
When such is the case, the incision is packed with a sterile dressing.
When a surgical incision is left open to heal by second intention, it is also packed with sterile moist gauze and covered with a sterile dressing.
The American College of Surgeons, CDC, and others have recommended using sterile gloves and equipment (sterile technique) when changing dressings on any type of surgical incision.180,395-397

b. Discharge planning
In current practice, many patients are discharged very soon after their operation, before surgical incisions have fully healed.398
The lack of optimum protocols for home incision care dictates that much of what is done at home by the patient, family, or home care agency practitioners must be individualized.
The intent of discharge planning is to maintain integrity of the healing incision, educate the patient about the signs and symptoms of infection, and advise the patient about whom to contact to report any problems.

F. SSI SURVEILLANCE
Surveillance of SSI with feedback of appropriate data to surgeons has been shown to be an important component of strategies to reduce SSI risk.16,399,400
A successful surveillance program includes the use of epidemiologically sound infection definitions (Tables 1 and 2) and effective surveillance methods,
stratification of SSI rates according to risk factors associated with SSI development, and data feedback.25

1. SSI risk stratification
a. Concepts
Three categories of variables have proven to be reliable predictors of SSI risk: (1) those that estimate the intrinsic degree of microbial contamination of the surgical site, (2) those that measure the duration of an operation, and (3) those that serve as markers for host susceptibility.25
A widely accepted scheme for classifying the degree of intrinsic microbial contamination of a surgical site was developed by the 1964 NAS/NRC Cooperative Research Study and modified in 1982 by CDC for use in SSI surveillance (Table 7).2,94
In this scheme, a member of the surgical team classifies the patient•fs wound at the completion of the operation.
Because of its ease of use and wide availability, the surgical wound classification has been used to predict SSI risk.16,94,126,401-405
Some researchers have suggested that surgeons compare clean wound SSI rates with those of other surgeons.16,399
However, two CDC efforts (the SENIC Project and the NNIS system) incorporated other predictor variables into SSI risk indices.
These showed that even within the category of clean wounds, the SSI risk varied by risk category from 1.1% to 15.8% (SENIC) and from 1.0% to 5.4% (NNIS).125,126
In addition, sometimes an incision is incorrectly classified by a surgical team member or not classified at all, calling into question the reliability of the classification.
Therefore, reporting SSI rates stratified by wound class alone is not recommended.

Data on 10 variables collected in the SENIC Project were analyzed by using logistic regression modeling to develop a simple additive SSI risk index.125
Four of these were found to be independently associated with SSI risk: (1) an abdominal operation, (2) an operation lasting >2 hours, (3) a surgical site with a wound classification of either contaminated or dirty/infected, and 4) an operation performed on a patient having 3 discharge diagnoses.
Each of these equally weighted factors contributes a point when present, such that the risk index values range from 0 to 4.
By using these factors, the SENIC index predicted SSI risk twice as well as the traditional wound classification scheme alone.

The NNIS risk index is operation-specific and applied to prospectively collected surveillance data.
The index values range from 0 to 3 points and are defined by three independent and equally weighted variables.
One point is scored for each of the following when present: (1) American Society of Anesthesiologists (ASA) Physical Status Classification of >2 (Table 10), (2) either contaminated or dirty/infected wound classification (Table 7), and (3) length of operation >T hours, where T is the approximate 75th percentile of the duration of the specific operation being performed.126

able 10. Physical Status Classification, American Society of Anesthesiologists*
Society of Anesthesiolo-gists has revised their classification system; the most recent version is available at http://www.asahq.org/profinfo/physicalstatus.html.

The ASA class replaced discharge diagnoses of the SENIC risk index as a surrogate for the patient•fs underlying severity of illness (host susceptibility)406,407 and has the advantage of being readily available in the chart during the patient•fs hospital stay.
Unlike SENIC•fs constant 2-hour cut-point for duration of operation, the operation-specific cut-points used in the NNIS risk index increase its discriminatory power compared to the SENIC index.126

b. Issues
Adjustment for variables known to confound rate estimates is critical if valid comparisons of SSI rates are to be made between surgeons or hospitals.408
Risk stratification, as described above, has proven useful for this purpose, but relies on the ability of surveillance personnel to find and record data consistently and correctly.
For the three variables used in the NNIS risk index, only one study has focused on how accurately any of them are recorded.
Cardo et al. found that surgical team members•f accuracy in assessing wound classification for general and trauma surgery was 88% (95% CI: 82%-94%).409
However, there are sufficient ambiguities in the wound class definitions themselves to warrant concern about the reproducibility of Cardo•fs results.
The accuracy of recording the duration of operation (i.e., time from skin incision to skin closure) and the ASA class has not been studied.
In an unpublished report from the NNIS system, there was evidence that overreporting of high ASA class existed in some hospitals.
Further validation of the reliability of the recorded risk index variables is needed.

Additionally, the NNIS risk index does not adequately discriminate the SSI risk for all types of operations.27,410
It seems likely that a combination of risk factors specific to patients undergoing an operation will be more predictive.
A few studies have been performed to develop procedure-specific risk indices218,411-414 and research in this area continues within CDC•fs NNIS system.

2. SSI surveillance methods
SSI surveillance methods used in both the SENIC Project and the NNIS system were designed for monitoring inpatients at acute-care hospitals.
Over the past decade, the shift from inpatient to outpatient surgical care (also called ambulatory or day surgery) has been dramatic.
It has been estimated that 75% of all operations in the United States will be performed in outpatient settings by the year 2000.4
While it may be appropriate to use common definitions of SSI for inpatients and outpatients,415 the types of operations monitored, the risk factors assessed, and the case-finding methods used may differ.
New predictor variables may emerge from analyses of SSIs among outpatient surgery patients, which may lead to different ways of estimating SSI risk in this population.

The choice of which operations to monitor should be made jointly by surgeons and infection control personnel.
Most hospitals do not have the resources to monitor all surgical patients all the time, nor is it likely that the same intensity of surveillance is necessary for certain low-risk procedures.
Instead, hospitals should target surveillance efforts toward high-risk procedures.416

a. Inpatient SSI surveillance
Two methods, alone or together, have been used to identify inpatients with SSIs: (1) direct observation of the surgical site by the surgeon, trained nurse surveyor, or infection control personnel16,97,399,402,409,417-420 and (2) indirect detection by infection control personnel through review of laboratory reports, patient records, and discussions with primary care providers.15,84,399,402,404,409,418,421-427
The surgical literature suggests that direct observation of surgical sites is the most

accurate method to detect SSIs, although sensitivity data are lacking.16,399,402,417,418
Much of the SSI data reported in the infection control literature has been generated by indirect case-finding methods,125,126,422,425,426,428-430 but some studies of direct methods also have been conducted.97,409 Some studies use both methods of detection.84,409,424,427,431
A study that focused solely on the sensitivity and specificity of SSIs detected by indirect methods found a sensitivity of 83.8% (95% CI: 75.7%-91.9%) and a specificity of 99.8% (95% CI: 99%-100%).409
Another study showed that chart review triggered by a computer-generated report of antibiotic orders for post-cesarean section patients had a sensitivity of 89% for detecting endometritis.432

Indirect SSI detection can readily be performed by infection control personnel during surveillance rounds.
The work includes gathering demographic, infection, surgical, and laboratory data on patients who have undergone operations of interest.433
These data can be obtained from patients•f medical records, including microbiology, histopathology, laboratory, and pharmacy data; radiology reports; and records from the operating room.
Additionally, inpatient admissions, emergency room, and clinic visit records are sources of data for those postdischarge surgical patients who are readmitted or seek follow-up care.

The optimum frequency of SSI case-finding by either method is unknown and varies from daily to 3 times per week, continuing until the patient is dischargedfrom the hospital. Because duration of hospitalization is often very short, postdischarge SSI surveillance has become increasingly important to obtain accurate SSI rates (refer to "Postdischarge SSI Surveillance"section).

To calculate meaningful SSI rates, data must be collected on all patients undergoing the operations of interest (i.e., the population at risk).
Because one of its purposes is to develop strategies for risk stratification, the NNIS system collects the following data on all surgical patients surveyed: operation date; NNIS operative procedure category;434 surgeon identifier; patient identifier; age and sex; duration of operation; wound class; use of general anesthesia; ASA class; emergency; trauma; multiple procedures; endoscopic approach; and discharge date.433 With the exception of discharge date, these data can be obtained manually from operating room logs or be electronically downloaded into surveillance software, thereby substantially reducing manual transcription and data entry errors.433
Depending on the needs for risk-stratified SSI rates by personnel in infection control, surgery, and quality assurance, not all data elements may be pertinent for every type of operation.
At minimum, however, variables found to be predictive of increased SSI risk should be collected (refer to "SSI Risk Stratification"section).

b. Postdischarge SSI surveillance

Between 12% and 84% of SSIs are detected after patients are discharged from the hospital.98,337,402,428,435-454
At least two studies have shown that most SSIs become evident within 21 days after operation.446,447
Since the length of postoperative hospitalization continues to decrease, many SSIs may not be detected for several weeks after discharge and may not require readmission to the operating hospital.
Dependence solely on inpatient case-finding will result in underestimates of
SSI rates for some operations (e.g., coronary artery bypass graft) (CDC/NNIS system, unpublished data, 1998).
Any comparison of SSI rates must take into account whether case-finding included SSIs detected after discharge.
For comparisons to be valid, even in the same institution over time, the postdischarge surveillance methods must be the same.

Postdischarge surveillance methods have been used with varying degrees of success for different procedures and among hospitals and include (1) direct examination of patients•f wounds during follow-up visits to either surgery clinics or physicians•f offices,150,399,402,404,430,436,440,441,447,452,455 (2) review of medical records of surgery clinic patients,404,430,439 (3) patient surveys by mail or telephone,435,437,438,441,442,444,445,448,449,455-457 or (4) surgeon surveys by mail or telephone.98,428,430,437-439,443,444,446,448,450,451,455
One study found that patients have difficulty assessing their own wounds for infection (52% specificity, 26% positive predictive value),458 suggesting that data obtained by patient questionnaire may inaccurately represent actual SSI rates.

Recently, Sands et al. performed a computerized search of three databases to determine which best identified SSIs: ambulatory encounter records for diagnostic, testing, and treatment codes; pharmacy records for specific antimicrobial prescriptions; and administrative records for rehospitalizations and emergency room visits.446 This study found that pharmacy records indicating a patient had received antimicrobial agents commonly used to treat soft tissue infections had the highest sensitivity (50%) and positive predictive value (19%), although even this approach alone was not very effective.

As integrated health information systems expand, tracking surgical patients through the entire course of care may become more feasible, practical, and effective.
At this time, no consensus exists on which postdischarge surveillance methods are the most sensitive, specific, and practical.
Methods chosen will necessarily reflect the hospital•fs unique mix of operations, personnel resources, and data needs.

c. Outpatient SSI surveillance

Both direct and indirect methods have been used to detect SSIs that complicate outpatient operations.
One 8-year study of operations for hernia and varicose veins used home visits by district health nurses combined with a survey completed by the surgeon at the patient•fs 2-week postoperative clinic visit to identify SSIs.459
While ascertainment was essentially 100%, this method is impractical for widespread implementation.
High response rates have been obtained from questionnaires mailed to surgeons (72%->90%).443,444,446,455,459-461
Response rates from telephone questionnaires administered to patients were more variable (38%,444 81%,457 and 85%455), and response rates from questionnaires mailed to patients were quite low (15%455 and 33%446).
At this time, no single detection method can be recommended. Available resources and data needs determine which method(s) should be used and which operations should be monitored.
Regardless of which detection method is used, it is recommended that the CDC NNIS definitions of SSI (Tables 1 and 2) be used without modification in the outpatient setting.

G. GUIDELINE EVALUATION PROCESS

The value of the HICPAC guidelines is determined by those who use them.
To help assess that value, HICPAC is developing an evaluation tool to learn how guidelines meet user expectations, and how and when these guidelines are disseminated and implemented.

II. Recommendations for prevention of surgical site infection

A. RATIONALE

The Guideline for Prevention of Surgical Site Infection, 1999, provides recommendations concerning reduction of surgical site infection risk.
Each recommendation is categorized on the basis of existing scientific data, theoretical rationale, and applicability.
However, the previous CDC system for categorizing recommendations has been modified slightly.

Category I recommendations, including IA and IB, are those recommendations that are viewed as effective by HICPAC and experts in the fields of surgery, infectious diseases, and infection control.
Both Category IA and IB recommendations are applicable for, and should be adopted by, all healthcare facilities; IA and IB recommendations differ only in the strength of the supporting scientific evidence.

Category II recommendations are supported by less scientific data than Category I recommendations; such recommendations may be appropriate for addressing specific nosocomial problems or specific patient populations.

No recommendation is offered for some practices, either because there is a lack of consensus regarding their efficacy or because the available scientific evidence is insufficient to support their adoption.
For such unresolved issues, practitioners should use judgement to determine a policy regarding these practices within their organization.
Recommendations that are based on federal regulation are denoted with an asterisk.

B. RANKINGS

Category IA.Strongly recommended for implementation and supported by well-

designed experimental, clinical, or epidemiological studies.

Category IB.Strongly recommended for implementation and supported by some experimental, clinical, or epidemiological studies and strong theoretical rationale.

Category II.Suggested for implementation and supported by suggestive clinical or epidemiological studies or theoretical rationale.

No recommendation; unresolved issue. Practices for which insufficient evidence or no consensus regarding efficacy exists.

Practices required by federal regulation are denoted with an asterisk (*).

C. RECOMMENDATIONS

1. Preoperative

a. Preparation of the patient

1.Whenever possible, identify and treat all infections remote to the surgical site before elective operation and postpone elective operations on patients with remote site infections until the infection has resolved. Category IA

2.Do not remove hair preoperatively unless the hair at or around the incision site will interfere with the operation. Category IA

3.If hair is removed, remove immediately before the operation, preferably with electric clippers. Category IA

4.Adequately control serum blood glucose levels in all diabetic patients and particularly avoid hyperglycemia perioperatively. Category IB

5.Encourage tobacco cessation. At minimum, instruct patients to abstain for at least 30 days before elective operation from smoking cigarettes, cigars, pipes, or any other form of tobacco consumption (e.g., chewing/dipping). Category IB

6.Do not withhold necessary blood products from surgical patients as a means to prevent SSI. Category IB

7.Require patients to shower or bathe with an antiseptic agent on at least the night before the operative day. Category IB

8.Thoroughly wash and clean at and around the incision site to remove gross contamination before performing antiseptic skin preparation. Category IB

9.Use an appropriate antiseptic agent for skin preparation (Table 6). Category IB

10.Apply preoperative antiseptic skin preparation in concentric circles moving toward the periphery. The prepared area must be large enough to extend the incision or create new incisions or drain sites, if necessary. Category II

11.Keep preoperative hospital stay as short as possible while allowing for adequate preoperative preparation of the patient. Category II

12.No recommendation to taper or discontinue systemic steroid use (when medically permissible) before elective operation. Unresolved issue

13.No recommendation to enhance nutritional support for surgical patients solely as a means to prevent SSI. Unresolved issue

14.No recommendation to preoperatively apply mupirocin to nares to prevent SSI. Unresolved issue

15.No recommendation to provide measures that enhance wound space oxygenation to prevent SSI. Unresolved issue

b. Hand/forearm antisepsis for surgical team members

1.Keep nails short and do not wear artificial nails. Category IB

2.Perform a preoperative surgical scrub for at least 2 to 5 minutes using an appropriate antiseptic (Table 6). Scrub the hands and forearms up to the elbows. Category IB

3.After performing the surgical scrub, keep hands up and away from the body (elbows in flexed position) so that water runs from the tips of the fingers toward the elbows.
Dry hands with a sterile towel and don a sterile gown and gloves. Category IB

4.Clean underneath each fingernail prior to performing the first surgical scrub of the day. Category II

5.Do not wear hand or arm jewelry. Category II

6.No recommendation on wearing nail polish. Unresolved Issue

c. Management of infected or colonized surgical personnel

1.Educate and encourage surgical personnel who have signs and symptoms of a transmissible infectious illness to report conditions promptly to their supervisory and occupational health service personnel. Category IB

2.Develop well-defined policies concerning patient-care responsibilities when personnel have potentially transmissible infectious conditions. These policies should govern (a) personnel responsibility in using the health service and reporting illness, (b) work restrictions, and (c) clearance to resume work after an illness that required work restriction.
The policies also should identify persons who have the authority to remove personnel from duty. Category IB

3.Obtain appropriate cultures from, and exclude from duty, surgical personnel who have draining skin lesions until infection has been ruled out or personnel have received adequate therapy and infection has resolved. Category IB

4.Do not routinely exclude surgical personnel who are colonized with organisms such as S. aureus (nose, hands, or other body site) or group A Streptococcus, unless such personnel have been linked epidemiologically to dissemination of the organism in the healthcare setting. Category IB

d. Antimicrobial prophylaxis

1.Administer a prophylactic antimicrobial agent only when indicated, and select it based on its efficacy against the most common pathogens causing SSI for a specific operation (Table 4) and published recommendations.266,268,269,282-284 Category IA

2.Administer by the intravenous route the initial dose of prophylactic antimicrobial agent, timed such that a bactericidal concentration of the drug is established in serum and tissues when the incision is made.
Maintain therapeutic levels of the agent in serum and tissues throughout the operation and until, at most, a few hours after the incision is closed in the operating room. Category IA

3.Before elective colorectal operations in addition to d2 above, mechanically prepare the colon by use of enemas and cathartic agents.
Administer nonabsorbable oral antimicrobial agents in divided doses on the day before the operation. Category IA

4.For high-risk cesarean section, administer the prophylactic antimicrobial agent immediately after the umbilical cord is clamped. Category IA

5.Do not routinely use vancomycin for antimicrobial prophylaxis. Category IB

2. Intraoperative

a. Ventilation

1.Maintain positive-pressure ventilation in the operating room with respect to the corridors and adjacent areas. Category IB

2.Maintain a minimum of 15 air changes per hour, of which at least 3 should be fresh air. Category IB

3.Filter all air, recirculated and fresh, through the appropriate filters per the American Institute of Architects•f recommendations.299 Category IB

4.Introduce all air at the ceiling, and exhaust near the floor. Category IB

5.Do not use UV radiation in the operating room to prevent SSI. Category IB

6.Keep operating room doors closed except as needed for passage of equipment, personnel, and the patient. Category IB

7.Consider performing orthopedic implant operations in operating rooms supplied with ultraclean air. Category II

8.Limit the number of personnel entering the operating room to necessary personnel. Category II

b. Cleaning and disinfection of environmental surfaces

1.When visible soiling or contamination with blood or other body fluids of surfaces or equipment occurs during an operation, use an EPA-approved hospital disinfectant to clean the affected areas before the next operation. Category IB*

2.Do not perform special cleaning or closing of operating rooms after contaminated or dirty operations. Category IB

3.Do not use tacky mats at the entrance to the operating room suite or individual operating rooms for infection control. Category IB

4.Wet vacuum the operating room floor after the last operation of the day or night with an EPA-approved hospital disinfectant. Category II

5.No recommendation on disinfecting environmental surfaces or equipment used in operating rooms between operations in the absence of visible soiling. Unresolved issue

c. Microbiologic sampling

1.Do not perform routine environmental sampling of the operating room.
Perform microbiologic sampling of operating room environmental surfaces or air only as part of an epidemiologic investigation. Category IB

d. Sterilization of surgical instruments

1.Sterilize all surgical instruments according to published guidelines.212,299,314,321 Category IB

2.Perform flash sterilization only for patient care items that will be used immediately (e.g., to reprocess an inadvertently dropped instrument).
Do not use flash sterilization for reasons

of convenience, as an alternative to purchasing additional instrument sets, or to save time. Category IB

e. Surgical attire and drapes

1.Wear a surgical mask that fully covers the mouth and nose when entering the operating room if an operation is about to begin or already under way, or if sterile instruments are exposed.
Wear the mask throughout the operation. Category IB*

2.Wear a cap or hood to fully cover hair on the head and face when entering the operating room. Category IB*

3.Do not wear shoe covers for the prevention of SSI. Category IB*

4.Wear sterile gloves if a scrubbed surgical team member. Put on gloves after donning a sterile gown. Category IB*

5.Use surgical gowns and drapes that are effective barriers when wet (i.e., materials that resist liquid penetration). Category IB

6.Change scrub suits that are visibly soiled, contaminated, and/or penetrated by blood or other potentially infectious materials. Category IB*

7.No recommendations on how or where to launder scrub suits, on restricting use of scrub suits to the operating suite, or for covering scrub suits when out of the operating suite. Unresolved issue

f. Asepsis and surgical technique

1.Adhere to principles of asepsis when placing intravascular devices (e.g., central venous catheters), spinal or epidural anesthesia catheters, or when dispensing and administering intravenous drugs. Category IA

2.Assemble sterile equipment and solutions immediately prior to use. Category II

3.Handle tissue gently, maintain effective hemostasis, minimize devitalized tissue and foreign bodies (i.e., sutures, charred tissues, necrotic debris), and eradicate dead space at the surgical site. Category IB

4.Use delayed primary skin closure or leave an incision open to heal by second intention if the surgeon considers the surgical site to be heavily contaminated (e.g., Class III and Class IV). Category IB

5.If drainage is necessary, use a closed suction drain.
Place a drain through a separate incision distant from the operative incision.
Remove the drain as soon as possible. Category IB

3. Postoperative incision care

a.Protect with a sterile dressing for 24 to 48 hours postoperatively an incision that has been closed primarily. Category IB

b.Wash hands before and after dressing changes and any contact with the surgical site. Category IB

c.When an incision dressing must be changed, use sterile technique. Category II

d.Educate the patient and family regarding proper incision care, symptoms of SSI, and the need to report such symptoms. Category II

e.No recommendation to cover an incision closed primarily beyond 48 hours, nor on the appropriate time to shower or bathe with an uncovered incision. Unresolved Issue

4. Surveillance

a.Use CDC definitions of SSI (Table 1) without modification for identifying SSI among surgical inpatients and outpatients. Category IB

b.For inpatient case-finding (including readmissions), use direct prospective observation, indirect prospective detection, or a combination of both direct and indirect methods for the duration of the patient•fs hospitalization. Category IB

c.When postdischarge surveillance is performed for detecting SSI following certain operations (e.g., coronary artery bypass graft), use a method that accommodates available resources and data needs. Category II

d.For outpatient case-finding, use a method that accommodates available resources and data needs. Category IB

e.Assign the surgical wound classification upon completion of an operation.
A surgical team member should make the assignment. Category II

f.For each patient undergoing an operation chosen for surveillance, record those variables shown to be associated with increased SSI risk (e.g., surgical wound class, ASA class, and duration of operation). Category IB

g.Periodically calculate operation-specific SSI rates stratified by variables shown to be associated with increased SSI risk (e.g., NNIS risk index). Category IB

h.Report appropriately stratified, operation-specific SSI rates to surgical team members.
The optimum frequency and format for such rate computations will be determined by stratified case-load sizes (denominators) and the objectives of local, continuous quality improvement initiatives. Category IB

i.No recommendation to make available to the infection control committee coded surgeon-specific data. Unresolved issue

The Hospital Infection Control Practices Committee thanks the following subject-matter experts for reviewing a preliminary draft of this guideline: Carol Applegeet,
RN, MSN, CNOR, CNAA, FAAN; Ona Baker, RN, MSHA; Philip Barie, MD, FACS; Arnold Berry, MD; Col. Nancy Bjerke, BSN, MPH, CIC; John Bohnen, MD,
FRCSC, FACS; Robert Condon, MS, MD, FACS; E. Patchen Dellinger, MD, FACS; Terrie Lee, RN, MS, MPH, CIC; Judith Mathias, RN; Anne Matlow, MD, MS,
FRCPC; C. Glen Mayhall, MD; Rita McCormick, RN, CIC; Ronald Nichols, MD, FACS; Barbara Pankratz, RN; William Rutala, PhD, MPH, CIC; Julie Wagner, RN;
Samuel Wilson, MD, FACS. The opinions of all the reviewers might not be reflected in all the recommendations contained in this document.

The authors thank Connie Alfred, Estella Cormier, Karen Friend, Charlene Gibson, and Geraldine Jones for providing invaluable assistance.

References

1. Garner JS. CDC guideline for prevention of surgical wound infections, 1985. Supercedes guideline for prevention of surgical wound infections published in 1982. (Originally published in 1995). Revised. Infect Control 1986;7(3):193-200.

2. Simmons BP. Guideline for prevention of surgical wound infections. Infect Control 1982;3:185-196.

3. Garner JS. The CDC Hospital Infection Control Practices Advisory Committee. Am J Infect Control 1993;21:160-2.

4. Hecht AD. Creating greater efficiency in ambulatory surgery. J Clin Anesth 1995;7:581-4.

5. Horwitz JR, Chwals WJ, Doski JJ, Suescun EA, Cheu HW, Lally KP. Pediatric wound infections: a prospective multicenter study. Ann Surg 1998;227:553-8.

6. Golub R, Siddiqui F, Pohl D. Laparoscopic versus open appendectomy: a metaanalysis. J Am Coll Surg 1998;186:545-53.

7. Mayol J, Garcia-Aguilar J, Ortiz-Oshiro E, De-Diego Carmona JA, Ferndandez-Represa JA. Risks of the minimal access approach for laparoscopic surgery: multivariate analysis of morbidity related to umbilical trocar insertion. World J Surg 1997;21:529-33.

8. Lacy AM, Garcia-Valdecasas JC, Delgado S, Grande L, Fuster J, Tabet J, et al. Postoperative complications of laparoscopic-assisted colectomy. Surg Endosc 1997;11:119-22.

9. Pagni S, Salloum EJ, Tobin GR, VanHimbergen DJ, Spence PA. Serious wound infections after minimally invasive coronary bypass procedures. Ann Thorac Surg 1998;66:92-4.

10. The Southern Surgeons Club. A prospective analysis of 1518 laparoscopic cholecystectomies. N Engl J Med 1991;324:1073-8.

11. Centers for Disease Control and Prevention. National Nosocomial Infections Surveillance (NNIS) report, data summary from October 1986-April 1997, issued May 1997. Am J Infect Control 1997;25:477-87.

12. Food and Drug Administration. Topical antimicrobial drug products for over-the-counter human use: tentative final monograph for health-care antiseptic drug products?proposed rule (21 CFR Parts 333 and 369). Federal Register 1994; 59:31441-52.

13. Centers for Disease Control and Prevention, National Center for Health Statistics. Vital and Health Statistics, Detailed Diagnoses and Procedures, National Hospital Discharge Survey, 1994. Vol 127. Hyattsville, Maryland: DHHS Publication; 1997.

14. Emori TG, Gaynes RP. An overview of nosocomial infections, including the role of the microbiology laboratory. Clin Microbiol Rev 1993;6(4):428-42.

15. Cruse P. Wound infection surveillance. Rev Infect Dis 1981;4(3):734-7.

16. Cruse PJ, Foord R. The epidemiology of wound infection: a 10-year prospective study of 62,939 wounds. Surg Clin North Am 1980;60(1):27-40.

17. Martone WJ, Jarvis WR, Culver

DH, Haley RW. Incidence and nature of endemic and epidemic nosocomial infections. In: Bennett JV, Brachman PS, eds. Hospital Infections. 3rd ed. Boston: Little, Brown and Co; 1992. p. 577-96.

18. Boyce JM, Potter-Bynoe G, Dziobek L. Hospital reimbursement patterns among patients with surgical wound infections following open heart surgery. Infect Control Hosp Epidemiol 1990;11(2):89-93.

19. Poulsen KB, Bremmelgaard A, Sorensen AI, Raahave D, Petersen JV. Estimated costs of postoperative wound infections. A case-control study of marginal hospital and social security costs. Epidemiol Infect 1994;113(2):283-95.

20. Vegas AA, Jodra VM, Garcia ML. Nosocomial infection in surgery wards: a controlled study of increased duration of hospital stays and direct cost of hospitalization. Eur J Epidemiol 1993;9(5):504-10.

21. Albers BA, Patka P, Haarman HJ, Kostense PJ. Cost effectiveness of preventive antibiotic administration for lowering risk of infection by 0.25%. [German]. Unfallchirurg 1994;97(12):625-8.

22. Horan TC, Gaynes RP, Martone WJ, Jarvis WR, Emori TG. CDC definitions of nosocomial surgical site infections, 1992: a modification of CDC definitions of surgical wound infections. Infect Control Hosp Epidemiol 1992;13(10):606-8.

23. Ehrenkranz NJ, Richter EI, Phillips PM, Shultz JM. An apparent excess of operative site infections: analyses to evaluate false-positive diagnoses. Infect Control Hosp Epidemiol 1995;16(12):712-6.

24. Taylor G, McKenzie M, Kirkland T, Wiens R. Effect of surgeon•fs diagnosis on surgical wound infection rates. Am J Infect Control 1990;18(5):295-9.

25. SHEA, APIC, CDC, SIS. Consensus paper on the surveillance of surgical wound infections. Infect Control Hosp Epidemiol 1992;13(10):599-605.

26. Nooyen SM, Overbeek BP, Brutel de la Riviere A, Storm AJ, Langemeyer JM. Prospective randomised comparison of single-dose versus multiple-dose cefuroxime for prophylaxis in coronary artery bypass grafting. Eur J Clin Microbiol Infect Dis 1994;13:1033-7.

27. Centers for Disease Control and Prevention. National Nosocomial Infections Surveillance (NNIS) report, data summary from October 1986-April 1996, issued May 1996. A report from the National Nosocomial Infections Surveillance (NNIS) System. Am J Infect Control 1996;24:380-8.

28. Schaberg DR. Resistant gram-positive organisms. Ann Emerg Med 1994;24(3):462-4.

29. Schaberg DR, Culver DH, Gaynes RP. Major trends in the microbial etiology of nosocomial infection. Am J Med 1991;91(3B):72S-5S.

30. Jarvis WR. Epidemiology of nosocomial fungal infections, with emphasis on Candida species. Clin Infect Dis 1995;20:1526-30.

31. Centers for Disease Control. Nosocomial outbreak of Rhizopus infections associated with Elastoplast wound dressings?Minnesota. MMWR 1978;27:33-4.

32. Pearson RD, Valenti WM, Steigbigel RT. Clostridium perfringens wound infections associated with elastic bandages. JAMA 1980;244:1128-30.

33. Richet HM, Craven PC, Brown JM, Lasker BA, Cox CD, McNeil MM, et al. A cluster of Rhodococcus (Gordona) bronchialis sternal-wound infections after coronary-artery bypass surgery. N Engl J Med 1991;324:104-9.

34. Wenger PN, Brown JM, McNeil MM, Jarvis WR. Nocardia farcinica sternotomy site infections in patients following open heart surgery. J Infect Dis 1998;178:1539-43.

35. Lowry PW, Blankenship RJ, Gridley W, Troup NJ, Tompkins LS. A cluster of Legionella sternal-wound infections due to postoperative topical exposure to

contaminated tap water. N Engl J Med 1991;324:109-13.

36. Bassett DC, Stokes KJ, Thomas WR. Wound infection with Pseudomonas multivorans: a water-borne contaminant of disinfectant solutions. Lancet

1970;1:1188-91.

37. Cruse PJ. Surgical wound infection. In: Wonsiewicz MJ, ed. Infectious Diseases. Philadelphia: W.B.Saunders Co; 1992. p. 758-64.

38. Altemeier WA, Culbertson WR. Surgical infection. In: Moyer CA, Rhoads JE, Allen JG, Harkins HN, eds. Surgery, principles and practice. 3rd ed.

Philadelphia: JB Lippincott; 1965. p. 51-77.

39. Krizek TJ, Robson MC. Evolution of quantitative bacteriology in wound management. Am J Surg 1975;130:579-84.

40. Elek SD, Conen PE. The virulence of Staphylococcus pyogenes for man: a study of problems with wound infection. Br J Exp Pathol 1957;38:573-86.

41. Noble WC. The production of subcutaneous staphylococcal skin lesions in mice. Br J Exp Pathol 1965;46:254-62.

42. James RC, MacLeod CJ. Induction of staphylococcal infections in mice with small inocula introduced on sutures. Br J Exp Pathol 1961;42:266-77.

43. Henderson B, Poole S, Wilson M. Microbial/host interactions in health and disease: who controls the cytokine network? Immunopharmacology

1996;35:1-21.

44. Morrison DC, Ryan JL. Endotoxins and disease mechanisms. Ann Rev Med 1987;38:417-32.

45. Demling R, LaLonde C, Saldinger P, Knox J. Multiple-organ dysfunction in the surgical patient: pathophysiology, prevention, and treatment. Curr Probl Surg 1993;30:345-414.

46. Eiseman B, Beart R, Norton L. Multiple organ failure. Surg Gynecol Obstet 1977;14:323-6.

47. Fry DE, Pearlstein L, Fulton RL, Polk HC, Jr. Multiple system organ failure: the role of uncontrolled infection. Arch Surg 1980;115:136-40.

48. Kasper DL. Bacterial capsule?old dogmas and new tricks. J Infect Dis 1986;153:407-15.

49. Dellinger EP. Surgical infections and choice of antibiotics. In: Sabiston DC, ed. Textbook of Surgery. The Biological Basis of Modern Surgical Practice. 15ed. Philadelphia: W.B.Saunders Co; 1997. p. 264-80.

50. Goeau-Brissonniere O, Leport C, Guidoin R, Lebrault C, Pechere JC, Bacourt F. Experimental colonization of an expanded polytetrafluoroethylene vascular graft with Staphylococcus aureus: a quantitative and morphologic study. J Vasc Surg 1987;5(5):743-8.

51. Bergamini TM, Corpus RA Jr., Brittian KR, Peyton JC, Cheadle WG. The natural history of bacterial biofilm graft infection. J Surg Res 1994;56:393-6.

52. Baddour LM, Christensen GD, Hester MG, Bisno AL. Production of experimental endocarditis by coagulase-negative staphylococci: variability in species virulence. J Infect Dis 1984;150:721-7.

53. Christensen GD, Baddour LM, Simpson WA. Phenotypic variation of Staphylococcus epidermidis slime production in vitro and in vivo. Infect Immun 1987;55:2870-7.

54. Mayberry-Carson KJ, Tober-Meyer B, Smith JK, Lambe DW Jr., Costerton JW. Bacterial adherence and glycocalyx formation in osteomyelitis experimentally induced with Staphylococcus aureus. Infect Immun 1984;43:825-33.

55. Mills J, Pulliam L, Dall L, Marzouk J, Wilson W, Costerton JW. Exopolysaccharide production by viridans streptococci in experimental endocarditis. Infect

Immun 1984;43:359-67.

56. Kaebnick HW, Bandyk DF, Bergamini TM, Towne JB. The microbiology of explanted vascular prostheses. Surgery 1987;102:756-61.

57. Altemeier WA, Culbertson WR, Hummel RP. Surgical considerations of endogenous infections?sources, types, and methods of control. Surg Clin North Am 1968;48:227-40.

58. Wiley AM, Ha•feri GB. Routes of infection: a study of using "tracer particles"in the orthopedic operating room. Clin Orthop 1979;139:150-5.

59. Slaughter L, Morris JE, Starr A. Prosthetic valvular endocarditis. A 12-year review. Circulation 1973;47:1319-26.

60. Carlsson AK, Lidgren L, Lindberg L. Prophylactic antibiotics against early and late deep infections after total hip replacements. Acta Orthop Scand

1977;48:405-10.

61. Hunter JG, Padilla M, Cooper-Vastola S. Late Clostridium perfringens breast implant infection after dental treatment. Ann Plast Surg 1996;36(3):309-12.

62. Stuesse DC, Robinson JH, Durzinsky DS. A late sternal wound infection caused by hematogenous spread of bacteria. Chest 1995;108(6):1742-3.

63. Howe CW. Experimental wound sepsis from transient Escherichia coli bacteremia. Surgery 1969;66:570-4.

64. Velasco E, Thuler LC, Martins CA, Dias LM, Conalves VM. Risk factors for infectious complications after abdominal surgery for malignant disease. Am J Infect Control 1996;24(1):1-6.

65. Bruun JN. Post-operative wound infection. Predisposing factors and the effect of a reduction in the dissemination of staphylococci. Acta Med Scand Suppl 1970;514(Suppl):3-89.

66. Simchen E, Rozin R, Wax Y. The Israeli Study of Surgical Infection of drains and the risk of wound infection in

operations for hernia. Surg Gynecol Obstet 1990;170:331-7.

67. Edwards LD. The epidemiology of 2056 remote site infections and 1966 surgical wound infections occurring in 1865 patients: a four year study of 40,923 operations at Rush-Presbyterian-St. Luke•fs Hospital, Chicago. Ann Surg 1976;184:758-66.

68. Valentine RJ, Weigelt JA, Dryer D, Rodgers C. Effect of remote infections on clean wound infection rates. Am J Infect Control 1986;14:64-7.

69. Cioffi GA, Terezhalmy GT, Taybos GM. Total joint replacement: a consideration for antimicrobial prophylaxis. Oral Surg Oral Med Oral Pathol 1988;66(1):124-9.

70. Heggeness MH, Esses SI, Errico T, Yuan HA. Late infection of spinal instrumentation by hematogenous seeding. Spine 1993;18(4):492-6.

71. Mont MA, Waldman B, Banerjee C, Pacheco IH, Hungerford DS. Multiple irrigation, debridement, and retention of components in infected total knee arthroplasty. J Arthroplasty 1997;12(4):426-33.

72. Ozuna RM, Delamarter RB. Pyogenic vertebral osteomyelitis and postsurgical disc space infections. Ortho Clin North Am 1996;27(1):87-94.

73. Schmalzried TP, Amstutz HC, Au MK, Dorey FJ. Etiology of deep sepsis in total hip arthroplasty. The significance of hematogenous and recurrent infections. Clin Orthop 1992;280:200-7.

74. Calia FM, Wolinsky E, Mortimer EA Jr., Abrams JS, Rammelkamp CH Jr. Importance of the carrier state as a source of Staphylococcus aureus in wound sepsis. J Hyg (Lond) 1969;67:49-57.

75. Dineen P, Drusin L. Epidemics of postoperative wound infections associated with hair carriers. Lancet 1973;2(7839):1157-9.

76. Mastro TD, Farley TA, Elliott JA, Facklam RR, Perks JR, Hadler JL, et al. An outbreak of surgical-wound infections due to group A streptococcus carried on the scalp. N Engl J Med 1990;323:968-72.

77. Ford CR, Peterson DE, Mitchell CR. An appraisal of the role of surgical face masks. Am J Surg 1967;113:787-90.

78. Letts RM, Doermer E. Conversation in the operating theater as a cause of airborne bacterial contamination. J Bone Joint Surg [Am] 1983;65:357-62.

79. Giamarellou H, Antoniadou A. Epidemiology, diagnosis, and therapy of fungal infections in surgery. Infect Control Hosp Epidemiol 1996;17(8):558-64.

80. Lee JT. Surgical wound infections: surveillance for quality improvement. In: Fry DE, ed. Surgical Infections. Boston: Little, Brown and Co; 1995. p.145-59.

81. Perl TM, Golub JE. New approaches to reduce Staphylococcus aureus nosocomial infection rates: treating S. aureus nasal carriage. Ann Pharmacother 1998;32:S7-S16.

82. Kluytmans JA, Mouton JW, Ijzerman EP, Vandenbroucke-Grauls CM, Maat AW, Wagenvoort JH, et al. Nasal carriage of Staphylococcus aureus as a major risk factor for wound infections after cardiac surgery. J Infect Dis 1995;171:216-9.

83. Perl TM, Cullen JJ, Pfaller MA, Wenzel RP, Herwaldt LA, The MARS Study Team. A randomized, double-blind, placebo-controlled clinical trial of intranasal mupirocin ointment (IM) for prevention of S. aureus surgical site infections (SSI) [abstract]. Abstracts of the IDSA 36th Annual Meeting 1998;91(88).

84. Gil-Egea MJ, Pi-Sunyer MT, Verdaguer A, Sanz F, Sitges-Serra A, Eleizegui LT. Surgical wound infections: prospective study of 4,486 clean wounds. Infect Control 1987;8(7):277-80.

85. Nagachinta T, Stephens M, Reitz B, Polk BF. Risk factors for surgical-wound infection following cardiac surgery. J Infect Dis 1987;156:967-73.

86. Lilienfeld DE, Vlahov D, Tenney JH, McLaughlin JS. Obesity and diabetes as risk factors for postoperative wound infections after cardiac surgery. Am J Infect Control 1988;16:3-6.

87. Slaughter MS, Olson MM, Lee JT Jr., Ward HB. A fifteen-year wound surveillance study after coronary artery bypass. Ann Thorac Surg 1993;56(5):1063-8.

88. Bryan AJ, Lamarra M, Angelini GD, West RR, Breckenridge IM. Median sternotomy wound dehiscence: a retrospective case control study of risk factors and outcome. J R Coll Surg Edinb 1992;37:305-8.

89. Jones JK, Triplett RG. The relationship of cigarette smoking to impaired intraoral wound healing: a review of evidence and implications for patient care. J Oral Maxillofac Surg 1992;50(3):237-9; discussion 239-40.

90. Vinton AL, Traverso LW, Jolly PC. Wound complications after modified radical mastectomy compared with tylectomy with axillary lymph node dissection. Am J Surg 1991;161(5):584-8.

91. Holley DT, Toursarkissian B, Vansconez HC, Wells MD, Kenady DE, Sloan DA. The ramifications of immediate reconstruction in the management of breast cancer. Am Surg 1995;61(1):60-5.

92. Beitsch P, Balch C. Operative morbidity and risk factor assessment in melanoma patients undergoing inguinal lymph node dissection. Am J Surg 1992;164(5):462-6; discussion 465-6.

93. Post S, Betzler M, vonDitfurth B, Schurmann G, Kuppers P, Herfarth C. Risks of intestinal anastomoses in Crohn•fs disease. Ann Surg 1991;213(1):37-42.

94. B•ferard F, Gandon J. Postoperative wound infections: the influence of ultraviolet irradiation of the operating room and of various other factors. Ann Surg 1964;160(Suppl 1):1-192.

95. Nystrom PO, Jonstam A, Hojer H, Ling L. Incisional infection after colorectal surgery in obese patients. Acta Chir Scand 1987;153:225-7.

96. He GW, Ryan WH, Acuff TE, Bowman RT, Douthit MB, Yang CQ, et al. Risk factors for operative mortality and sternal wound infection in bilateral internal mammary artery grafting. J Thorac Cardiovasc Surg 1994;107(1):196-202.

97. Barber GR, Miransky J, Brown AE, Coit DG, Lewis FM, Thaler HT, et al. Direct observations of surgical wound infections at a comprehensive cancer center. Arch Surg 1995;130(10):1042-7.

98. Cruse PJ, Foord R. A five-year prospective study of 23,649 surgical wounds. Arch Surg 1973;107:206-10.

99. Claesson BE, Holmlund DE. Predictors of intraoperative bacterial contamination and postoperative infection in elective colorectal surgery. J Hosp Infect 1988;11:127-35.

100. Mishriki SF, Law DJ, Jeffery PJ. Factors affecting the incidence of postoperative wound infection. J Hosp Infect 1990;16:223-30.

101. Doig CM, Wilkinson AW. Wound infection in a children•fs hospital. Br J Surg 1976;63:647-50.

102. Sharma LK, Sharma PK. Postoperative wound infection in a pediatric surgical service. J Pediatr Surg 1986;21:889-91.

103. Casey J, Flinn WR, Yao JS, Fahey V, Pawlowski J, Bergan JJ. Correlation of immune and nutritional status with wound complications in patients undergoing vascular operations. Surgery 1983;93(6):822-7.

104. Greene KA, Wilde AH, Stulberg BN. Preoperative nutritional status of total joint patients. Relationship to postoperative wound complications. J Arthroplasty 1991;6(4):321-5.

105. Weber TR. A prospective analysis of factors influencing outcome after fundoplication. J Pediatr Surg 1995;30(7):1061-3; discussion 1063-4.

106. Vamvakas EC, Carven JH. Transfusion of white-cell-containing allogeneic blood components and postoperative wound infection: effect of confounding factors. Transfus Med 1998;8:29-36.

107. Vamvakas EC, Carven JH, Hibberd PL. Blood transfusion and infection after colorectal cancer surgery. Transfusion 1996;36:1000-8.

108. Jensen LS, Kissmeyer-Nielsen P, Wolff B, Qvist N. Randomised comparison of leucocyte-depleted versus buffy-coat-poor blood transfusion and complications after colorectal surgery. Lancet 1996;348:841-5.

109. Heiss MM, Mempel W, Jauch KW, Delanoff C, Mayer G, Mempel M, et al. Beneficial effect of autologous blood transfusion on infectious complications after colorectal cancer surgery. Lancet 1993;342:1328-33.

110. Lidgren L. Postoperative orthopaedic infections in patients with diabetes mellitus. Acta Orthop Scand 1973;44:149-51.

111. Gordon SM, Serkey JM, Barr C, Cosgrove D, Potts W. The relationship between glycosylated hemoglobin (HgA1c) levels and postoperative infections in patients undergoing primary coronary artery bypass surgery (CABG) [abstract]. Infect Control Hosp Epidemiol 1997; 18(No. 5, Part 2):29(58).

112. Zerr KJ, Furnary AP, Grunkemeier GL, Bookin S, Kanhere V, Starr A. Glucose control lowers the risk of wound infection in diabetics after open heart operations. Ann Thorac Surg 97;63(2):356-61.

113. Terranova A. The effects of diabetes mellitus on wound healing. Plast Surg Nurs 1991;11(1):20-5.

114. Ziv Y, Church JM, Fazio VW, King TM, Lavery IC. Effect of systemic steroids on ileal pouch-anal anastomosis in patients with ulcerative colitis. Dis Co-

lon Rectum 1996;39(5):504-8.
115. Pons VG, Denlinger SL, Guglielmo BJ, Octavio J, Flaherty J, Derish PA, et al. Ceftizoxime versus vancomycin and gentamicin in neurosurgical prophylaxis: a randomized, prospective, blinded clinical study. Neurosurgery 1993;33(3):416-22; discussion 422-3.
116. Brown IW Jr, Moor GF, Hummel BW, Marshall WG Jr, Collins JP. Toward further reducing wound infections in cardiac operations. Ann Thorac Surg 1996;62(6):1783-9.
117. Christou NV, Nohr CW, Meakins JL. Assessing operative site infection in surgical patients. Arch Surg 1987;122:165-9.
118. Hu SS, Fontaine F, Kelly B, Bradford DS. Nutritional depletion in staged spinal reconstructive surgery. The effect of total parenteral nutrition. Spine 1998;23:1401-5.
119. Schackert HK, Betzler M, Zimmermann GF, Decker R, Geelhaar H, Edler L, et al. The predictive role of delayed cutaneous hypersensitivity testing in
postoperative complications. Surg Gynecol Obstet 1986;162:563-8.
120. Katelaris PH, Bennett GB, Smith RC. Prediction of postoperative complications by clinical and nutritional assessment. Aust N Z J Surg 1986;56:743-7.
121. Leite JF, Antunes CF, Monteiro JC, Pereira BT. Value of nutritional parameters in the prediction of postoperative complications in elective
gastrointestinal surgery. Br J Surg 1987;74:426-9.
122. Mullen JL, Gertner MH, Buzby GP, Goodhart GL, Rosato EF. Implications of malnutrition in the surgical patient. Arch Surg 1979;114:121-5.
123. Buzby GP, Mullen JL, Matthews DC, Hobbs CL, Rosato EF. Prognostic nutritional index in gastrointestinal surgery. Am J Surg 1980;139:160-7.
124. Ellis LM, Copeland EM 3rd, Souba WW. Perioperative nutritional support. Surg Clin North Am 1991;71:493-507.
125. Haley RW, Culver DH, Morgan WM, White JW, Emori TG, Hooton TM. Identifying patients at high risk of surgical wound infection. A simple multivariate index of patient susceptibility and wound contamination. Am J Epidemiol 1985;121:206-15.
126. Culver DH, Horan TC, Gaynes RP, Martone WJ, Jarvis WR, Emori TG, et al. Surgical wound infection rates by wound class, operative procedure, and patient risk index. National Nosocomial Infections Surveillance System. Am J Med 1991;91(Suppl 3B):152S-7S.
127. Windsor JA, Hill GL. Weight loss with physiologic impairment. A basic indicator of surgical risk. Ann Surg 1988;207:290-6.
128. Campos AC, Meguid MM. A critical appraisal of the usefulness of perioperative nutritional support. Am J Clin Nutr 1992;55:117-30.
129. McPhee IB, Williams RP, Swanson CE. Factors influencing wound healing after surgery for metastatic disease of the spine. Spine 1998;23:726-33; discussion 732-3.
130. Mullen JL, Buzby GP, Matthews DC, Smale BF, Rosato EF. Reduction of operative morbidity and mortality by combined preoperative and postoperative
nutritional support. Ann Surg 1980;192:604-13.
131. Windsor JA, Hill GL. Protein depletion and surgical risk. Aust N Z J Surg 1988;58:711-5.
132. Ulicny KS Jr, Hiratzka LF, Williams RB, Grunkemeier GL, Flege JB, Jr., Wright CB, et al. Sternotomy infection: poor prediction by acute phase response and delayed hypersensitivity. Ann Thorac Surg 1990;50:949-58.
133. Shukla HS, Rao RR, Banu N, Gupta RM, Yadav RC. Enteral hyperalimentation in malnourished surgical patients. Indian J Med Res 1984;80:339-46.
134. Moore EE, Jones TN. Benefits of immediate jejunostomy feeding after major abdominal trauma?a prospective, randomized study. J Trauma 1986;26:874-81.
135. Daly JM, Lieberman MD, Goldfine J, Shou J, Weintraub F, Rosato EF, et al. Enteral nutrition with supplemental arginine, RNA, and omega-3 fatty acids
in patients after operation: immunologic, metabolic, and clinical outcome. Surgery 1992;112:56-67.
136. Daly JM, Weintraub FN, Shou J, Rosato EF, Lucia M. Enteral nutrition during multimodality therapy in upper gastrointestinal cancer patients. Ann Surg 1995;221:327-38.
137. Moore FA, Feliciano DV, Andrassy RJ, McArdle AH, Booth FV, Morgenstein-Wagner TB, et al. Early enteral feeding, compared with parenteral, reduces postoperative septic complications. The results of a meta-analysis. Ann Surg 1992;216:172-83.
138. Starker PM, Lasala PA, Askanazi J, Gump FE, Forse RA, Kinney JM. The response to TPN: a form of nutritional assessment. Ann Surg 1983;198:720-4.
139. Muller JM, Brenner U, Dienst C, Pichlmaier H. Preoperative parenteral feeding in patients with gastrointestinal carcinoma. Lancet 1982;1:68-71.
140. Holter AR, Fischer JE. The effects of perioperative hyperalimentation on complications in patients with carcinoma and weight loss. J Surg Res 1977;23:31-4.
141. Thompson BR, Julian TB, Stremple JF. Perioperative total parenteral nutrition in patients with gastrointestinal cancer. J Surg Res 1981;30:497-500.
142. Brennan MF, Pisters PW, Posner M, Quesada O, Shike M. A prospective randomized trial of total parenteral nutrition after major pancreatic resection for malignancy. Ann Surg 1994;220:436-41; discussion 441-4.
143. The Veterans Affairs Total Parental Nutrition Cooperative Study Group. Perioperative total parenteral nutrition in surgical patients. N Engl J Med 1991;325:525-32.
144. Starker PM, LaSala PA, Askanazi J, Todd G, Hensle TW, Kinney JM. The influence of preoperative total parenteral nutrition upon morbidity and mortality. Surg Gynecol Obstet 1986;162:569-74.
145. Senkal M, Mumme A, Eickhoff U, Geier B, Spath G, Wulfert D, et al. Early postoperative enteral immunonutrition: clinical outcome and cost-comparison analysis in surgical patients. Crit Care Med 1997;25:1489-96.
146. Heatley RV, Williams RH, Lewis MH. Pre-operative intravenous feeding?a controlled trial. Postgrad Med J 1979;55:541-5.
147. Muller JM, Keller HW, Brenner U, Walter M, Holzmuller W. Indications and effects of preoperative parenteral nutrition. World J Surg 1986;10:53-63.
148. Daly JM, Massar E, Giacco G, Frazier OH, Mountain CF, Dudrick SJ, et al. Parenteral nutrition in esophageal cancer patients. Ann Surg 1982;196:203-8.
149. Klein JD, Hey LA, Yu CS, Klein BB, Coufal FJ, Young EP, et al. Perioperative nutrition and postoperative complications in patients undergoing spinal surgery. Spine 1996;21:2676-82.
150. Garibaldi RA, Cushing D, Lerer T. Risk factors for postoperative infection. Am J Med 1991;91(Suppl 3B):158S-63S.
151. Lee JT. Operative complications and quality improvement. Am J Surg 1996;171:545-7.
152. Kluytmans JA, Mouton JW, VandenBergh MF, Manders MJ, Maat AP, et al. Reduction of surgical-site infections in cardiothoracic surgery by elimination
of nasal carriage of Staphylococcus aureus. Infect Control Hosp Epidemiol 1996; 17:780-5.
153. Boyce JM. Preventing staphylococcal infections by eradicating nasal carriage of Staphylococcus aureus: proceeding with caution. Infect Control Hosp Epidemiol 1996;17:775-9.
154. Blajchman MA. Allogeneic blood transfusions, immunomodulation, and postoperative bacterial infection: do we have the answers yet? Transfusion 1997;37:121-5.
155. Garibaldi RA. Prevention of intraoperative wound contamination with chlorhexidine shower and scrub. J Hosp Infect 1988;11 (Suppl B):5-9.
156. Paulson DS. Efficacy evaluation of a 4% chlorhexidine gluconate as a full-body shower wash. Am J Infect Control 1993;21(4):205-9.
157. Hayek LJ, Emerson JM, Gardner AM. A placebo-controlled trial of the effect of two preoperative baths or showers with chlorhexidine detergent on postoperative wound infection rates. J Hosp Infect 1987;10:165-72.
158. Kaiser AB, Kernodle DS, Barg NL, Petracek MR. Influence of preoperative showers on staphylococcal skin colonization: a comparative trial of antiseptic
skin cleansers. Ann Thorac Surg 1988;45:35-8.
159. Rotter ML, Larsen SO, Cooke EM, Dankert J, Daschner F, Greco D, et al. A comparison of the effects of preoperative whole-body bathing with detergent alone and with detergent containing chlorhexidine gluconate on the frequency of wound infections after clean surgery. The European Working Party on Control of Hospital Infections. J Hosp Infect 1988;11:310-20.
160. Leigh DA, Stronge JL, Marriner J, Sedgwick J. Total body bathing with •eHibiscrub•f (chlorhexidine) in surgical patients: a controlled trial. J Hosp Infect 1983;4:229-35.
161. Ayliffe GA, Noy MF, Babb JR,

Davies JG, Jackson J. A comparison of pre-operative bathing with chlorhexidine-detergent and non-medicated soap in the prevention of wound infection. J Hosp Infect 1983;4:237-44.

162. Lynch W, Davey PG, Malek M, Byrne DJ, Napier A. Cost-effectiveness analysis of the use of chlorhexidine detergent in preoperative whole-body disinfection in wound infection prophylaxis. J Hosp Infect 1992;21:179-91.

163. Brady LM, Thomson M, Palmer MA, Harkness JL. Successful control of endemic MRSA in a cardiothoracic surgical unit. Med J Aust 1990;152:240-5.

164. Tuffnell DJ, Croton RS, Hemingway DM, Hartley MN, Wake PN, Garvey RJ. Methicillin-resistant Staphylococcus aureus; the role of antisepsis in the control of an outbreak. J Hosp Infect 1987;10:255-9.

165. Bartzokas CA, Paton JH, Gibson MF, Graham F, McLoughlin GA, Croton RS. Control and eradication of methicillin-resistant Staphylococcus aureus on a surgical unit. N Engl J Med 1984;311:1422-5.

166. Seropian R, Reynolds BM. Wound infections after preoperative depilatory versus razor preparation. Am J Surg 1971;121:251-4.

167. Hamilton HW, Hamilton KR, Lone FJ. Preoperative hair removal. Can J Surg 1977;20:269-71, 274-5.

168. Olson MM, MacCallum J, McQuarrie DG. Preoperative hair removal with clippers does not increase infection rate in clean surgical wounds. Surg Gynecol Obstet 1986;162:181-2.

169. Mehta G, Prakash B, Karmoker S. Computer assisted analysis of wound infection in neurosurgery. J Hosp Infect 1988;11:244-52.

170. Alexander JW, Fischer JE, Boyajian M, Palmquist J, Morris MJ. The influence of hair-removal methods on wound infections. Arch Surg 1983;118(3):347-52.

171. Masterson TM, Rodeheaver GT, Morgan RF, Edlich RF. Bacteriologic evaluation of electric clippers for surgical hair removal. Am J Surg 1984;148:301-2.

172. Sellick JA Jr., Stelmach M, Mylotte JM. Surveillance of surgical wound infections following open heart surgery. Infect Control Hosp Epidemiol 1991;12(10):591-6.

173. Ko W, Lazenby WD, Zelano JA, Isom W, Krieger KH. Effects of shaving methods and intraoperative irrigation on suppurative mediastinitis after bypass operations. Ann Thorac Surg 1992;53:301-5.

174. Moro ML, Carrieri MP, Tozzi AE, Lana S, Greco D. Risk factors for surgical wound infections in clean surgery: a multicenter study. Italian PRINOS Study Group. Ann Ital Chir 1996;67:13-9.

175. Winston KR. Hair and neurosurgery. Neurosurgery 1992;31(2):320-9.

176. Larson E. Guideline for use of topical antimicrobial agents. Am J Infect Control 1988;16:253-66.

177. Hardin WD, Nichols RL. Handwashing and patient skin preparation. In: Malangoni MA, ed. Critical Issues in Operating Room Management. Philadelphia: Lippincott-Raven; 1997. p. 133-49.

178. Ritter MA, French ML, Eitzen HE, Gioe TJ. The antimicrobial effectiveness of operative-site preparative agents: a microbiological and clinical study. J Bone Joint Surg Am 1980;62(5):826-8.

179. Mayhall CG. Surgical infections including burns. In: Wenzel RP, ed. Prevention and Control of Nosocomial Infections. 2nd ed. Baltimore: Williams & Wilkins; 1993. p. 614-64.

180. Committee on Control of Surgical Infections of the Committee on Pre- and Postoperative care, American College of Surgeons. Manual on Control of Infection in Surgical Patients. Philadelphia: J.B. Lippincott Co; 1984.

181. Hardin WD, Nichols RL. Aseptic technique in the operating room. In: Fry DE, ed. Surgical Infections. Boston: Little, Brown and Co; 1995. p. 109-18.

182. Lowbury EJ, Lilly HA. Use of 4 percent chlorhexidine detergent solution (Hibiscrub) and other methods of skin disinfection. Br Med J 1973;1:510-5.

183. Aly R, Maibach HI. Comparative antibacterial efficacy of a 2-minute surgical scrub with chlorhexidine gluconate, povidone-iodine, and chloroxylenol sponge-brushes. Am J Infect Control 1988;16:173-7.

184. Peterson AF, Rosenberg A, Alatary SD. Comparative evaluation of surgical scrub preparations. Surg Gynecol Obstet 1978;146:63-5.

185. Brown TR, Ehrlich CE, Stehman FB, Golichowski AM, Madura JA, Eitzen HE. A clinical evaluation of chlorhexidine gluconate spray as compared with iodophor scrub for preoperative skin preparation. Surg Gynecol Obstet 1984;158:363-6.

186. Lowbury EJ, Lilly HA. The effect of blood on disinfection of surgeons•f hands. Br J Surg 1974;61:19-21.

187. Association of Operating Room Nurses. Recommended practices for skin preparation of patients. AORN J 1996;64(5):813-6.

188. Kutarski PW, Grundy HC. To dry or not to dry? An assessment of the possible degradation in efficiency of preoperative skin preparation caused by wiping skin dry. Ann R Coll Surg Engl 1993;75(3):181-5.

189. Gauthier DK, O•fFallon PT, Coppage D. Clean vs sterile surgical skin preparation kits. Cost, safety, effectiveness. AORN J 1993;58(3):486-95.

190. Hagen KS, Treston-Aurand J. A comparison of two skin preps used in cardiac surgical procedures. AORN J 1995;62(3):393-402.

191. Shirahatti RG, Joshi RM, Vishwanath YK, Shinkre N, Rao S, Sankpal JS, et al. Effect of pre-operative skin preparation on post-operative wound infection. J Postgrad Med 1993;39(3):134-6.

192. Larson EL, Butz AM, Gullette DL, Laughon BA. Alcohol for surgical scrubbing? Infect Control Hosp Epidemiol 1990;11(3):139-43.

193. Faoagali J, Fong J, George N, Mahoney P, O•fRouke V. Comparison of the immediate, residual, and cumulative antibacterial effects of Novaderm R*, Novascrub R*, Betadine Surgical Scrub, Hibiclens, and liquid soap. Am J Infect Control 1995;23(6):337-43.

194. Larson EL. APIC guideline for handwashing and hand antisepsis in health care settings. Am J Infect Control 1995;23:251-69.

195. Rubio PA. Septisol antiseptic foam: a sensible alternative to the conventional surgical scrub. Int Surg 1987;72(4):243-6.

196. Lowbury EJ, Lilly HA, Ayliffe GA. Preoperative disinfection of surgeons•f hands: use of alcoholic solutions and effects of gloves on skin flora. Br Med J

197. Rotter ML. Hygienic hand disinfection. Infect Control 1984;5:18-22

198. Ayliffe GA. Surgical scrub and skin disinfection. Infect Control 1984;5:23-7.

199. Lilly HA, Lowbury EJ, Wilkins MD, Zaggy A. Delayed antimicrobial effects of skin disinfection by alcohol. J Hyg (Lond) 1979;82:497-500.

200. Nichols RL, Smith JW, Garcia RY, Waterman RS, Holmes JW. Current practices of preoperative bowel preparation among North American colorectal surgeons. Clin Infect Dis 1997;24:609-19.

201. Wade JJ, Casewell MW. The evaluation of residual antimicrobial activity on hands and its clinical relevance. J Hosp Infect 1991;18(Suppl B):23-8.

202. Babb JR, Davies JG, Ayliffe GA. A test procedure for evaluating surgical hand disinfection. J Hosp Infect 1991;18(Suppl B):41-9.

203. Holloway PM, Platt JH, Reybrouck G, Lilly HA, Mehtar S, Drabu Y. A multi-centre evaluation of two chlorhexidine-containing formulations for surgical hand disinfection. J Hosp Infect 1990;16:151-9.

204. Kobayashi H. Evaluation of surgical scrubbing. J Hosp Infect 1991;18(Suppl B):29-34.

205. Nicoletti G, Boghossian V, Borland R. Hygienic hand disinfection: a comparative study with chlorhexidine detergents and soap. J Hosp Infect 1990;15:323-37.

206. Rotter ML, Koller W. Surgical hand disinfection: effect of sequential use of two chlorhexidine preparations. J Hosp Infect 1990;16:161-6.

207. O•fShaughnessy M, O•fMalley VP, Corbett G, Given HF. Optimum duration of surgical scrub-time. Br J Surg 1991;78(6):685-6.

208. Hingst V, Juditzki I, Heeg P, Sonntag HG. Evaluation of the efficacy of surgical hand disinfection following a reduced application time of 3 instead of 5 min. J Hosp Infect 1992;20(2):79-86.

209. Wheelock SM, Lookinland S. Effect of surgical hand scrub time on subsequent bacterial growth. AORN J 1997;65:1087-92, 1094-8.

210. Deshmukh N, Kramer JW, Kjellberg SI. A comparison of 5-minute povidone-iodine scrub and 1-minute povidone-iodine scrub followed by alcohol foam. Mil Med 1998;163:145-7.

211. Masterson BJ. Cleansing the surgeon•fs hands. Scientific American Surgeon 1996;2:3-9.

212. Association of Operating Room Nurses. Standards, Recommended Practices, Guidelines. Denver: Association of Operating Room Nurses; 1999.

213. Pottinger J, Burns S, Manske C. Bacterial carriage by artificial versus natural nails. Am J Infect Control 1989;17:340-4.

214. Passaro DJ, Waring L, Armstrong R, Bolding F, Bouvier B,

Rosenberg J, et al. Postoperative Serratia marcescens wound infections traced to an out-of-hospital source. J Infect Dis 1997; 175(4):992-5.

215. Baumgardner CA, Maragos CS, Walz J, Larson E. Effects of nail polish on microbial growth of fingernails. Dispelling sacred cows. AORN J 1993;58:84-8.

216. Jacobson G, Thiele JE, McCune JH, Farrell LD. Handwashing: ring-wearing and number of microorganisms. Nurs Res 1985;34:186-8.

217. Hoffman PN, Cooke EM, McCarville MR, Emmerson AM. Microorganisms isolated from skin under wedding rings worn by hospital staff. Br Med J (Clin Res Ed) 1985;290:206-7.

218. Richet HM, Chidiac C, Prat A, Pol A, David M, Maccario M, et al. Analysis of risk factors for surgical wound infections following vascular surgery. Am J Med 1991;91(Suppl 3B):170S-172S.

219. Centers for Disease Control. Epidemic keratoconjunctivitis in an ophthalmology clinic?California. MMWR 1990;39:598-601.

220. Ford E, Nelson KE, Warren D. Epidemiology of epidemic keratoconjunctivitis. Epidemiol Rev 1987;9:244-61.

221. Birenbaum E, Linder N, Varsano N, Azar R, Kuint J, Spierer A, et al. Adenovirus type 8 conjunctivitis outbreak in a neonatal intensive care unit. Arch Dis Child 1993;68(5 Spec No):610-1.

222. Warren D, Nelson KE, Farrar JA, Hurwitz E, Hierholzer J, Ford E, et al. A large outbreak of epidemic keratoconjunctivitis: problems in controlling nosocomial spread. J Infect Dis 1989;160:938-43.

223. Jernigan JA, Lowry BS, Hayden FG, Kyger SA, Conway BP, Groschel DH, et al. Adenovirus type 8 epidemic keratoconjunctivitis in an eye clinic: risk factors and control. J Infect Dis 1993;167:1307-13.

224. Boyce JM. Should we vigorously try to contain and control methicillin-resistant Staphylococcus aureus? Infect Control Hosp Epidemiol 1991;12:46-54.

225. Boyce JM, Opal SM, Potter-Bynoe G, Medeiros AA. Spread of methicillin-resistant Staphylococcus aureus in a hospital after exposure to a health care worker with chronic sinusitis. Clin Infect Dis 1993;17:496-504.

226. Sheretz RJ, Reagan DR, Hampton KD, Robertson KL, Streed SA, Hoen HM, et al. A cloud adult: the Staphylococcus aureus-virus interaction revisited. Ann Intern Med 1996;124:539-47.

227. Belani A, Sherertz RJ, Sullivan ML, Russell BA, Reumen PD. Outbreak of staphylococcal infection in two hospital nurseries traced to a single nasal carrier. Infect Control 1986;7:487-90.

228. Kreiswirth BN, Kravitz GR, Schlievert PM, Novick RP. Nosocomial transmission of a strain of Staphylococcus aureus causing toxic shock syndrome. Ann Intern Med 1986;105:704-7.

229. Weber DJ, Rutala WA, Denny FW Jr. Management of healthcare workers with pharyngitis or suspected streptococcal infections. Infect Control Hosp Epidemiol 1996;17:753-61.

230. Viglionese A, Nottebart VF, Bodman HA, Platt R. Recurrent group A streptococcal carriage in a health care worker associated with widely separated nosocomial outbreaks. Am J Med 1991;91(3B):329S-33S.

231. Paul SM, Genese C, Spitalny K. Postoperative group A beta-hemolytic streptococcus outbreak with the pathogen traced to a member of a healthcare worker•fs household. Infect Control Hosp Epidemiol 1990;11:643-6.

232. Ridgway EJ, Allen KD. Clustering of group A streptococcal infections on a burns unit: important lessons in outbreak management. J Hosp Infect 1993;25:173-82.

233. Berkelman RL, Martin D, Graham DR, Mowry J, Freisem R, Weber JA, et al. Streptococcal wound infection caused by a vaginal carrier. JAMA 1982;247:2680-2.

234. Schaffner W, Lefkowitz LB Jr., Goodman JS, Koenig MG. Hospital outbreak of infections with group A streptococci traced to an asymptomatic anal carrier. N Engl J Med 1969;280:1224-5.

235. Richman DD, Breton SJ, Goldman DA. Scarlet fever and group A streptococcal surgical wound infection traced to an anal carrier. J Pediatr 1977;90:387-90.

236. Stromberg A, Schwan A, Cars O. Throat carrier rates of beta-hemolytic streptococci among healthy adults and children. Scand J Infect Dis 1988;20:411-7.

237. Stamm WE, Feeley JC, Facklam RR. Wound infection due to group A streptococcus traced to a vaginal carrier. J Infect Dis 1978;138:287-92.

238. Bolyard EA, Tablan OC, Williams WW, Pearson ML, Shapiro CN, Deitchman SD, et al. Guideline for infection control in healthcare personnel, 1998. Hospital Infection Control Practices Advisory Committee. Am J Infect Control 1998;26:289-354.

239. Nichols RL, Holmes JW. Prophylaxis in bowel surgery. Curr Clin Top Infect Dis 1995;15:76-96.

240. Nichols RL, Smith JW, Muzik AC, Love EJ, McSwain NE, Timberlake G, et al. Preventive antibiotic usage in traumatic thoracic injuries requiring closed tube thoracostomy. Chest 1994;106(5):1493-8.

241. Bullock R, van Dellen JR, Ketelbey W, Reinach SG. A double-blind placebocontrolled trial of perioperative prophylactic antibiotics for elective neurosurgery. J Neurosurg 1988;69(5):687-91.

242. Page CP, Bohnen JM, Fletcher JR, McManus AT, Solomkin JS, Wittmann DH. Antimicrobial prophylaxis for surgical wounds. Guidelines for clinical care. Arch Surg 1993;128(1):79-88.

243. McQueen M, Littlejohn A, Hughes SP. A comparison of systemic cefuroxime and cefuroxime loaded bone cement in the prevention of early infection after total joint replacement. Int Orthop 1987;11:241-3.

244. Henley MB, Jones RE, Wyatt RWB, Hofmann A, Cohen RL. Prophylaxis with cefamandole nafate in elective orthopedic surgery. Clin Orthop 1986;209:249-54.

245. Buckley R, Hughes GN, Snodgrass T, Huchcroft SA. Perioperative cefazolin prophylaxis in hip fracture surgery. Can J Surg 1990;33:122-7.

246. Boyd RJ, Burke JF, Colton T. A double-blind clinical trial of prophylactic antibiotic in hip fractures. J Bone Joint Surg [Am] 1973;55A:1251-8.

247. Bernard A, Pillet M, Goudet P, Viard H. Antibiotic prophylaxis in pulmonary surgery. A prospective randomized double-blind trial of flash cefuroxime versus forty-eight-hour cefuroxime. J Thorac Cardiovasc Surg 1994;107(3):896-900.

248. Platt R, Zucker JR, Zaleznik DF, Hopkins CC, Dellinger EP, Karchmer AW, et al. Perioperative antibiotic prophylaxis and wound infection following breast surgery. J Antimicrob Chemother 1993;31(Suppl B):43-8.

249. Rimoldi RL, Haye W. The use of antibiotics for wound prophylaxis in spinal surgery. Orthop Clin North Am 1996;27(1):47-52.

250. Bennion RS, Hiatt JR, Williams RA, Wilson SE. A randomized, prospective study of perioperative antimicrobial prophylaxis for vascular access surgery. J Cardiovasc Surg (Torino) 1985;26:270-4.

251. Kaiser AB, Petracek MR, Lea JW 4th, Kernodle DS, Roach AC, Alford WC Jr, et al. Efficacy of cefazolin, cefamandole, and gentamicin as prophylactic agents in cardiac surgery. Results of a prospective, randomized, double-blind trial in 1030 patients. Ann Surg 1987;206(6):791-7.

252. Miedzinski LJ, Callaghan JC, Fanning EA, Gelfand ET, Goldsand G, Modry D, et al. Antimicrobial prophylaxis for open heart operations. Ann Thorac Surg 1990;50:800-7.

253. Doebbeling BN, Pfaller MA, Kuhns KR, Massanari RM, Behrendt DM, Wenzel RP. Cardiovascular surgery prophylaxis. A randomized, controlled comparison of cefazolin and cefuroxime. J Thorac Cardiovasc Surg 1990;99:981-9.

254. Madsen MS, Neumann L, Andersen JA. Penicillin prophylaxis in complicated wounds of hands and feet: a randomized , double-blind trial. Injury 1996;27(4):275-8.

255. Burnett JW, Gustilo RB, Williams DN, Kind AC. Prophylactic antibiotics in hip fractures. A double-bind, prospective study. J Bone Joint Surg [Am]1980;62(3):457-62.

256. Nichols RL, Webb WR, Jones JW, Smith JW, LoCicero J 3rd. Efficacy of antibiotic prophylaxis in high risk gastroduodenal operations. Am J Surg 1982;143:94-8.

257. Lewis RT, Goodall RG, Marien B, Park M, Lloyd-Smith W, Wiegand FM. Efficacy and distribution of single-dose preoperative antibiotic prophylaxis in high-risk gastroduodenal surgery. Can J Surg 1991;34:117-22.

258. Young RF, Lawner PM. Perioperative antibiotic prophylaxis for prevention of postoperative neurosurgical infections. A randomized clinical trial. J Neurosurg 1987;66:701-5.

259. Djindjian M, Lepresle E, Homs JB. Antibiotic prophylaxis during prolonged clean neurosurgery. Results of a randomized double-blind study using oxacillin. J Neurosurg 1990;73:383-6.

260. Targarona EM, Garau J, Munoz-Ramos C, Roset F, Lite J, Matas E, et al. Single-dose antibiotic prophylaxis in patients at high risk for infection in biliary surgery: a prospective and randomized study comparing cefonicid with

mezlocillin. Surgery 1990;107:327-34.

261. van Ek B, Dijkmans BA, van Dulken H, van Furth R. Antibiotic prophylaxis in craniotomy: a prospective double-blind placebo-controlled study. Scand J Infect Dis 1988;20:633-9.

262. Krige JE, Isaacs S, Stapleton GN, McNally J. Prospective, randomized study comparing amoxycillin-clavulanic acid and cefamandole for the prevention of wound infection in high-risk patients undergoing elective biliary surgery. J Hosp Infect 1992;22 (Suppl A):33-41.

263. Browder W, Smith JW, Vivoda LM, Nicholas RL. Nonperforative appendicitis: a continuing surgical dilemma. J Infect Dis 1989;159(6):1088-94.

264. Platt R. Guidelines for perioperative antibiotic prophylaxis. In: Abrutyn E, Goldmann DA, Scheckler WE, eds. Saunders infection control reference service. Philadelphia: W.B. Saunders Co; 1997. p. 229-34.

265. Sanderson PJ. Antimicrobial prophylaxis in surgery: microbiological factors. J Antimicrob Chemother 1993;31(Suppl B):1-9.

266. Anonymous. Antimicrobial prophylaxis in surgery. Med Lett Drugs Ther 1997;39(1012):97-102.

267. Scher KS. Studies on the duration of antibiotic administration for surgical prophylaxis. Am Surg 1997;63:59-62.

268. Nichols RL. Antibiotic prophylaxis in surgery. J Chemother 1989;1(3):170-8.

269. Ehrenkranz NJ. Antimicrobial prophylaxis in surgery: mechanisms, misconceptions, and mischief. Infect Control Hosp Epidemiol 1993;14(2):99-106.

270. Berkeley AS, Freedman KS, Ledger WJ, Orr JW, Benigno BB, Gordon SF, et al. Comparison of cefotetan and cefoxitin prophylaxis for abdominal and vaginal hysterectomy. Am J Obstet Gynecol 1988;158:706-9.

271. Ehrenkranz NJ, Blackwelder WC, Pfaff SJ, Poppe D, Yerg DE, Kaslow RA. Infections complicating low-risk cesarean sections in community hospitals: efficacy of antimicrobial prophylaxis. Am J Obstet Gynecol 1990;162(2):337-43.

272. Soper DE. Infections following cesarean section. Curr Opin Obstet Gynecol 1993;5(4):517-20.

273. Enkin M, Enkin E, Chalmers I, Hemminki E. Prophylactic antibiotics in association with caesarean section. In: Chalmers I, Enkin M, Keirse MJ, eds. Effective care in pregnancy and childbirth. London: Oxford University; 1989. p. 1246-69.

274. Allen JL, Rampon JF, Wheeless CR. Use of a prophylactic antibiotic in elective major gynecologic operations. Obstet Gynecol 1972;39:218-24.

275. The Multicenter Study Group. Single dose prophylaxis in patients undergoing vaginal hysterectomy: cefamandole versus cefotaxime. Am J Obstet Gynecol 1989;160:1198-201.

276. Roy S, Wilkins J, Galaif E, Azen C. Comparative efficacy and safety of cefmetazole or cefoxitin in the prevention of postoperative infection following vaginal and abdominal hysterectomy. J Antimicrob Chemother 1989;23(Suppl D):109-17.

277. Friese S, Willems FT, Loriaux SM, Meewis JM. Prophylaxis in gynaecological surgery: a prospective randomized comparison between single dose prophylaxis with amoxycillin/clavulanate and the combination of cefuroxime and metronidazole. J Antimicrob Chemother 1989;24(Suppl B):213-6.

278. Senior CC, Steigrad SJ. Are preoperative antibiotics helpful in abdominal hysterectomy? Am J Obstet Gynecol 1986;154:1004-8.

279. Hemsell DL, Martin JN Jr, Pastorek JG 2d, Nobles BJ, Hemsell PG, Helman N, et al. Single dose antimicrobial prophylaxis at abdominal hysterectomy. Cefamandole vs. cefotaxime. J Reprod Med 1988;33:939-44.

280. Hemsell DL, Hemsell PG, Heard ML, Nobles BJ. Preoperative cefoxitin prophylaxis for elective abdominal hysterectomy. Am J Obstet Gynecol 1985;153:225-6.

281. DiPiro JT, Cheung RP, Bowden TA Jr, Mansberger JA. Single dose systemic antibiotic prophylaxis of surgical wound infections. Am J Surg 1986;152:552-9.

282. Trilla A, Mensa J. Perioperative antibiotic prophylaxis. In: Wenzel RP, ed. Prevention and control of nosocomial infections. 2nd ed. Baltimore: Williams & Wilkins; 1993. p. 665-82.

283. Ehrenkranz NJ, Meakins JL. Surgical infections. In: Bennett JV, Brachman PS, eds. Hospital infections. 3rd ed. Boston: Little, Brown and Co; 1992. p.685-710.

284. Nichols RL. Surgical antibiotic prophylaxis. Med Clin North Am 1995;79(3):509-22.

285. Classen DC, Evans RS, Pestotnik SL, Horn SD, Menlove RL, Burke JP. The timing of prophylactic administration of antibiotics and the risk of surgical-wound infection. N Engl J Med 1992;326(5):281-6.

286. McDonald M, Grabsch E, Marshall C, Forbes A. Single- versus multiple-dose antimicrobial prophylaxis for major surgery: a systematic review. Aust N Z J Surg 1998;68:388-96.

287. Clarke JS, Condon RE, Bartlett JG, Gorbach SL, Nichols RL, Ochi S. Preoperative oral antibiotics reduce septic complications of colon operations: results of prospective, randomized, double-blind clinical study. Ann Surg 1977;186:251-9.

288. Condon RE, Bartlett JG, Greenlee H, Schulte WJ, Ochi S, Abbe R, et al. Efficacy of oral and systemic antibiotic prophylaxis in colorectal operations. Arch Surg 1983;118:496-502.

289. Bartlett JG, Condon RE, Gorbach SL, Clarke JS, Nichols RL, Ochi S. Veterans Administration Cooperative Study on bowel preparation for elective colorectal operation: impact of oral antibiotic regimen on colonic flora, wound irrigation cultures and bacteriology of septic complications. Ann Surg 1978; 188:249-54.

290. Da Costa A, Kirkorian G, Cucherat M, Delahaye F, Chevalier P, Cerisier A, et al. Antibiotic prophylaxis for permanent pacemaker implantation: a meta-analysis. Circulation 1998;97:1796-801.

291. Bumpous JM, Johnson JT. The infected wound and its management. Otolaryngol Clin North Am 1995;28(5):987-1001.

292. Hospital Infection Control Practices Advisory Committee. Recommendations for preventing the spread of vancomycin resistance. Infect Control Hosp Epidemiol 1995;16(2):105-13. •@

293. Forse RA, Karam B, MacLean LD, Christou NV. Antibiotic prophylaxis for surgery in morbidly obese patients. Surgery 1989;106:750-7.

294. Polk HC, Wilson MA. Systemic antibiotic prophylaxis in surgery. In: Fry DE, ed. Surgical infections. Boston: Little, Brown and Co; 1995. p. 127-33.

295. Ayliffe GA. Role of the environment of the operating suite in surgical wound infection. Rev Infect Dis 1991;13(Suppl 10):S800-4

296. Gryska PF, O•fDea AE. Postoperative streptococcal wound infection. The anatomy of an epidemic. JAMA 1970;213:1189-91.

297. McIntyre DM. An epidemic of Streptococcus pyogenes puerperal and postoperative sepsis with an unusual carrier site?the anus. Am J Obstet Gynecol 1968;101:308-14.

298. Lidwell OM. Clean air at operation and subsequent sepsis in the joint. Clin Orthop 1986;211:91-102.

299. American Institute of Architects. Guidelines for design and construction of hospital and health care facilities. Washington: American Instituite of Architects Press; 1996.

300. Nichols RL. The operating room. In: Bennett JV, Brachman PS, eds. Hospital infections. 3rd ed. Boston: Little, Brown and Co; 1992. p. 461-73.

301. Laufman H. The operating room. In: Bennett JV, Brachman PS, eds. Hospital Infections. 2nd ed. Boston: Little, Brown and Co; 1986. p. 315-23.

302. Sessler DI, McGuire J, Hynson J, Moayeri A, Heier T. Thermoregulatory vasoconstriction during isoflurane anesthesia minimally decreases cutaneous heat loss. Anesthesiology 1992;76:670-5.

303. Hambraeus A. Aerobiology in the operating room?a review. J Hosp Infect 1988;11(Suppl A):68-76

304. Babb JR, Lynam P, Ayliffe GA. Risk of airborne transmission in an operating theatre containing four ultraclean air units. J Hosp Infect 1995;31(3):159-68.

305. Charnley J. Post-operative infection after total hip replacement with special reference to contamination in the operating room. Internal Publication 38, Centre for Hip Surgery, Wrightington Hospital, Wigan, Lancs., UK; 1972.

306. Friberg B. Ultraclean laminar airflow ORs. AORN J 1998;67:841-51.

307. Lidwell OM, Elson RA, Lowbury EJ, Whyte W, Blowers R, Stanley SJ, et al. Ultraclean air and antibiotics for prevention of postoperative infection. A multicenter study of 8,052 joint replacemnet operations. Acta Orthop Scand 1987;58:4-13.

308. Nelson JP. The operating room environment and its influence on deep wound infection. J Bone Joint Surg 1976;1-11.

309. Whyte W. Infection control in hospital operating rooms. Cleanrooms 1993 Proceedings 1993;157-66.

310. Charnley J. A clean-air operating enclosure. Br J Surg 1964;51:202-5.

311. Lidwell OM, Lowbury EJ, Whyte

W, Blowers R, Stanley SJ, Lowe D. Effect of ultraclean air in operating rooms on deep sepsis in the joint after total hip or knee replacement: a randomised study. Br Med J 1982;285:10-4.

312. Taylor GJ, Bannister GC, Leeming JP. Wound disinfection with ultraviolet radiation. J Hosp Infect 1995;30(2):85-93.

313. Bueno Cavanillas A, Rodriguez-Contreras R, Delgado Rodriguez M, Moreno Abril O, Gigosos R, Guillen Solvas J, et al. Preoperative stay as a risk factor for nosocomial infection. Eur J Epidemiol 1991;7(6):670-6.

314. Favero MS, Bond W. Sterilization, disinfection, and antisepsis in the hospital. In: Balows A, Hausler WJ Jr, Herrmann KL, Isenberg HD, Shadomy HJ, eds. Manual of clinical microbiology. 5th ed. Washington, DC: American ociety of Microbiology; 1991. p. 183-200.

315. U.S. Department of Labor, Occupational Safety and Health Administration. Occupational exposure to bloodborne pathogens; final rule (29 CFR Part 1910.1030). Federal Register 1991;56: 64004-182.

316. Rudnick JR, Beck-Sague CM, Anderson RL, Schable B, Miller JM, Jarvis WR. Gram-negative bacteremia in open-heart-surgery patients traced to probable tap-water contamination of pressure-monitoring equipment. Infect Control Hosp Epidemiol 1996;17(5):281-5.

317. Centers for Disease Control. Postsurgical infections associated with nonsterile implantable devices. MMWR Morb Mortal Wkly Rep 1992;41(15):263.

318. Soto LE, Bobadilla M, Villalobos Y, Sifuentes J, Avelar J, Arrieta M, et al. Post-surgical nasal cellulitis outbreak due to Mycobacterium chelonae. J Hosp Infect 1991;19(2):99-106.

319. Favero MS, Manian FA. Is eliminating flash sterilization practical? Infect Control Hosp Epidemiol 1993;14(8):479-80.

320. American Society for Healthcare Central Service Personnel. Recommended practices for central service. Section one, continuous quality improvement. Chicago: American Hospital Association; 1993.

321. Association for the Advancement of Medical Instrumentation. Flash sterilization: steam sterilization of patient care items for immediate use (ANSI/AAMI ST37-1996). Arlington (VA): Association for the Advancement of Medical Instrumentation; 1996.

322. Rutala WA, Gergen MF, Weber DJ. Evaluation of a rapid readout biological indicator for flash sterilization with three biological indicators and three chemical indicators. Infect Control Hosp Epidemiol 1993;14(7):390-4.

323. Vesley D, Langholz AC, Rohlfing SR, Foltz WE. Fluorimetric detection of a Bacillus stearothermophilus spore-bound enzyme, alpha-D-glucosidase, for rapid indication of flash sterilization failure. Appl Environ Microbiol 1992;58:717-9.

324. Rutala WA, Jones SM, Weber DJ. Comparison of a rapid readout biological indicator for steam sterilization with four conventional biological indicators and five chemical indicators. Infect Control Hosp Epidemiol 1996;17:423-8.

325. Vesley D, Nellis MA, Allwood PB. Evaluation of a rapid readout biological indicator for 121 degrees C gravity and 132 degrees C vacuum-assisted steam sterilization cycles. Infect Control Hosp Epidemiol 1995;16:281-6.

326. Smith RF. What is the purpose of the scrub suit? [letter]. AORN J 1980;31(5):769

327. Dineen P. The role of impervious drapes and gowns preventing surgical infection. Clin Orthop 1973;96:210-2.

328. Ha•feri GB, Wiley AM. The efficacy of standard surgical face masks: an investigation using "tracer particles". Clin Orthop 1980;148:160-2.

329. Moylan JA, Fitzpatrick KT, Davenport KE. Reducing wound infections. Improved gown and drape barrier performance. Arch Surg 1987;122:152-7.

330. Moylan JA, Balish E, Chan J. Intraoperative bacterial transmission. Surg Forum 1974;25:29-30.

331. Copp G, Mailhot CB, Zalar M, Slezak L, Copp AJ. Covergowns and the control of operating room contamination. Nurs Res 1986;35:263-8.

332. Beck WC. The surgical mask: another esacred cow•f? AORN J 1992;55:955-7.

333. Mitchell NJ, Hunt S. Surgical face masks in modern operating rooms?a costly and unnecessary ritual? J Hosp Infect 1991;18:239-42.

334. Tunevall TG, Jorbeck H. Influence of wearing masks on the density of airborne bacteria in the vicinity of the surgical wound. Eur J Surg 1992;158(5):263-6.

335. Tunevall TG. Postoperative wound infections and surgical face masks: a controlled study. World J Surg 1991;15:383-8.

336. Orr NW. Is a mask necessary in the operating theatre? Ann R Coll Surg Engl 81;63(6):390-2.

337. Lee JT. Making surgical care better: hard work, small gains [editorial]. Infect Control Hosp Epidemiol 1997;18:6-8.

338. Jarvis WR, Bolyard EA, Bozzi CJ, Burwen DR, Dooley SW, Martin LS, et al. Respirators, recommendations, and regulations: the controversy surrounding protection of health care workers from tuberculosis. Ann Intern Med 1995;122:142-6.

339. Centers for Disease Control and Prevention, National Institute for Occupational Safety and Health. Protect yourself against tuberculosis: a respiratory protection guide for health care workers (Publication No. 96-102). Cincinnati: Department of Health and Human Services (NIOSH); 1995.

340. Humphreys H, Marshall RJ, Ricketts VE, Russell AJ, Reeves DS. Theatre over-shoes do not reduce operating theatre floor bacterial counts. J Hosp Infect 1991;17:117-23.

341. Weightman NC, Banfield KR. Protective over-shoes are unnecessary in a day surgery unit. J Hosp Infect 1994;28:1-3.

342. Whyte W, Hambraeus A, Laurell G, Hoborn J. The relative importance of routes and sources of wound contamination during general surgery. I. Non-airborne. J Hosp Infect 1991;18(2):93-107.

343. Dodds RD, Guy PJ, Peacock AM, Duffy SR, Barker SG, Thomas MH. Surgical glove perforation. Br J Surg 1988;75(10):966-8.

344. Tokars JI, Culver DH, Mendelson MH, Sloan EP, Farber BF, Fligner DJ, et al. Skin and mucous membrane contacts with blood during surgical procedures: risk and prevention. Infect Control Hosp Epidemiol 1995;16:703-11.

345. Short LJ, Bell DM. Risk of occupational infection with blood-borne pathogens in operating and delivery room settings. Am J Infect Control 1993;21:343-50.

346. Garibaldi RA, Maglio S, Lerer T, Becker D, Lyons R. Comparison of nonwoven and woven gown and drape fabric to prevent intraoperative wound contamination and postoperative infection. Am J Surg 1986;152(5):505-9.

347. Muller W, Jiru P, Mach R, Polaschek F, Fasching W. The use of disposable draping materials in the operating room and its effect on the postoperative wound infection rate. Wein Klin Wochenschr 1989;101:837-42.

348. Smith JW, Nichols RL. Barrier efficiency of surgical gowns. Are we really protected from our patients•f pathogens? Arch Surg 1991;126(6):756-63.

349. Artz CP, Conn JH, Howard HS. Protection of the surgical wound with a new plastic film. JAMA 1960;174(14):1865-8.

350. Chiu KY, Lau SK, Fung B, Ng KH, Chow SP. Plastic adhesive drapes and wound infection after hip fracture surgery. Aust N Z J Surg 1993;63(10):798-801.

351. American Society for Testing Materials. Standard Test Method for Resistance of Materials used in Protective Clothing to Penetration by Synthetic Blood. American Society for Testing Materials 1998;F1670-98.

352. American Society for Testing Materials. Standard Test Method for Resistance of Materials used in Protective Clothing to Penetration by Blood-borne Pathogens using Phi-X174 Bacteriophage Penetration as a Test System. American Society for Testing Materials 1997; F1671-976.

353. McCullough EA. Methods for determining the barrier efficacy of surgical gowns. Am J Infect Control 1993;21:368-74.

354. Lewis JA, Brown PL. Breaking the comfort barrier in impervious gowns. Surgical Services Management 1998;4(2):29-38.

355. Granzow JW, Smith JW, Nichols RL, Waterman RS, Muzik AC. Evaluation of the protective value of hospital gowns against blood strike-through and methicillin-resistant Staphylococcus aureus penetration. Am J Infect Control 1998;26:85-93.

356. Walter CW, Kundsin RB, Harding AL, Page LK. The infector on the surgical team. Clin Neurosurg 1966;14:361-79.

357. Payne RW. Severe outbreak of surgical sepsis due to Staphylococcus aureus of unusual type and origin. Br Med J 1967;4:17-20.

358. Centers for Disease Control. Hospital outbreak of streptococcal wound infection-Utah. MMWR Morb Mortal Wkly Rep 1976;25:141

359. Herwaldt LA, Pottinger J, Coffin

SA. Nosocomial infections associated with anesthesia. In: Mayhall CG, ed. Hospital epidemiology and infection control. Baltimore: Williams & Wilkins; 1996. p. 655-75.

360. Bennett SN, McNeil MM, Bland LA, Arduino MJ, Villarino ME, Perrotta DM, et al. Postoperative infections traced to contamination of an intravenous anesthetic, propofol. N Engl J Med 1995;333:147-54.

361. Froggatt JW, Dwyer DM, Stephens MA. Hospital outbreak of hepatitis B in patients undergoing electroconvulsive therapy [abstract]. Program and Abstracts of the 31st Interscience Conference on Antimicrobial Agents and Chemotherapy, Chicago 1991;157:(347).

362. Centers for Disease Control. Postsurgical infections associated with an extrinsically contaminated intravenous anesthetic agent?California, Illinois, Maine, and Michigan, 1990. MMWR Morb Mortal Wkly Rep 1990;39:426-7,433.

363. Daily MJ, Dickey JB, Packo KH. Endogenous Candida endophthalmitis after intravenous anesthsia with propofol. Arch Ophthalmol 1991;109:1081-4.

364. Villarino ME, McNeill MM, Hall WN. Postsurgical infections associated with an extrinsically contaminated intravenous anesthetic agent [abstract]. Program and Abstracts of the 31st Interscience Conference on Antimicrobial Agents and Chemotherapy, Chicago 1991;156:(346).

365. American Association of Nurse Anesthetists. Infection control guide. Park Ridge (IL): American Association of Nurse Anesthetists; 1993.

366. American Society of Anesthesiologists. Recommendations for infection control for the practice of anesthesiology. Park Ridge (IL): American Society of Anesthesiologists; 1992.

367. Garner JS, Favero MS. CDC guideline for handwashing and hospital environmental control, 1985. Infect Control 1986;7:231-43.

368. Zacharias A, Habib RH. Delayed primary closure of deep sternal wound infections. Tex Heart Inst J 1996;23(3):211-6.

369. Smilanich RP, Bonnet I, Kirkpactrick JR. Contaminated wounds: the effect of initial management on outcome. Am Surg 1995;61(5):427-30.

370. Blomstedt GC. Infections in neurosurgery: a randomized comparison between silk and polyglycolic acid. Acta Neurochir (Wien) 1985;76:90-3.

371. Scher KS, Bernstein JM, Jones CW. Infectivity of vascular sutures. Am Surg 1985;51:577-9.

372. Durdey P, Bucknall TE. Assessment of sutures for use in colonic surgery: an experimental study. J R Soc Med 1984;77:472-7.

373. Chu CC, Williams DF. Effects of physical configuration and chemical structure of suture materials on bacterial adhesion. A possible link to wound infection. Am J Surg 1984;147:197-204.

374. Askew AR. A comparison of upper abdominal wound closure with monofilament nylon and polyglycolic acid. Aust N Z J Surg 1983;53:353-6.

375. Kapadia CR, Mann JB, McGeehan D, Jose Biglin JE, Waxman BP, Dudley HA. Behaviour of synthetic absorbable sutures with and without synergistic enteric infection. Eur Surg Res 1983;15:67-72.

376. Bucknall TE, Teare L, Ellis H. The choice of a suture to close abdominal incisions. Eur Surg Res 1983;15:59-66.

377. Bucknall TE. Factors influencing wound compications: a clinical and experimental study. Ann R Coll Surg Engl 1983;65:71-7.

378. Varma S, Lumb WV, Johnson LW, Ferguson HL. Further studies with polyglycolic acid (Dexon) and other sutures in infected experimental wounds. Am J Vet Res 1981;42:571-4.

379. Bucknall TE, Ellis H. Abdominal wound closure?a comparison of monofilament nylon and polyglycolic acid. Surgery 1981;89:672-7.

380. Dougherty SH, Simmons RL. The biology and practice of surgical drains. Part II. Curr Probl Surg 1992;29(9):635-730.

381. Cruse PJE. Wound infections: epidemiology and clinical characteristics in surgical infectious disease. In: Howard RJ, Simmons RL, eds. Surgical infectious diseases. 2nd ed. Norwalk (CT): Appleton and Lange; 1988. p. 319-29.

382. Drinkwater CJ, Neil MJ. Optimal timing of wound drain removal following total joint arthroplasty. J Arthroplasty 1995;10(2):185-9.

383. Tollofsrud SG, Gundersen Y, Andersen R. Perioperative hypothermia. Acta Anaesthesiol Scand 1984;28:511-5.

384. Sessler DI. Mild perioperative hypothermia. N Engl J Med 1997;336(24):1730-7.

385. Kurz A, Sessler DI, Lenhardt R. Perioperative normothermia to reduce the incidence of surgical-wound infection and shorten hospitalization. Study of Wound Infection and Temperature Group. N Engl J Med 1996;334(19):1209-15.

386. Hunt TK, Hopf HW. Wound healing and wound infection. What surgeons and anesthesiologists can do. Surg Clin North Am 1997;77:587-606.

387. Wenisch C, Narzt E, Sessler DI, Parschalk B, Lenhardt R, Kurz A, et al. Mild intraoperative hypothermia reduces production of reactive oxygen intermediates by polymorphonuclear leukocytes. Anesth Analg 1996;82:810-6.

388. Jonsson K, Hunt TK, Mathes SJ. Oxygen as an isolated variable influences resistance to infection. Ann Surg 1988;208:783-7.

389. Jonsson K, Jensen JA, Goodson WH 3d, West JM, Hunt TK. Assessment of perfusion in postoperative patients using tissue oxygen measurements. Br J Surg 1987;74:263-7.

390. Chang N, Goodson WH 3d, Gottrup F, Hunt TK. Direct measurement of wound and tissue oxygen tension in postoperative patients. Ann Surg 1983;197:470-8.

391. Knighton DR, Halliday B, Hunt TK. Oxygen as an antibiotic. The effect of inspired oxygen on infection. Arch Surg 1984;119:199-204.

392. Ikeda T, Tayefeh F, Sessler DI, Kurz A, Plattner O, Petschnigg B, et al. Local radiant heating increases subcutaneous oxygen tension. Am J Surg 1998;175:33-7.

393. DuMortier JJ. The resistance of healing wounds to infection. Surg Gynecol Obstet 1933;56:762-6.

394. Morain WD, Colen LB. Wound healing in diabetes mellitus. Clin Plast Surg 1990;17:493-501.

395. American Hospital Association. Infection control in the hospital. Chicago: American Hospital Association; 1979. p. 161-2.

396. Castle M, Ajemian E. Hospital infection control: principles and practice. New York: John Wiley & Sons; 1987. p. 114-6.

397. Centers for Disease Control. Isolation techniques for use in hospitals. Washington: Public Health Service Publication; 1970.

398. Kravitz M. Outpatient wound care. Crit Care Nurs Clin North Am 1996;8(2):217-33.

399. Condon RE, Schulte WJ, Malangoni MA, Anderson-Teschendorf MJ. Effectiveness of a surgical wound surveillance program. Arch Surg 1983;118:303-7.

400. Haley RW, Culver DH, White JW, Morgan WM, Emori TG, Munn VP. The efficacy of infection surveillance and control programs in preventing nosocomial infections in US hospitals. Am J Epidemiol 1985;121:182-205.

401. Lennard ES, Hargiss CO, Schoenknecht FD. Postoperative wound infection surveillance by use of bacterial contamination categories. Am J Infect Control 1985;13:147-53.

402. Olson MM, Lee JT Jr. Continuous, 10-year wound infection surveillance. Results, advantages, and unanswered questions. Arch Surg 1990;125:794-803.

403. Olson M, O•fConnor MO, Schwartz ML. Surgical wound infections. A 5-year prospective study of 20,193 wounds at the Minneapolis VA Medical Center. Ann Surg 1984;199:253-9.

404. Weigelt JA. Risk of wound infections in trauma patients. Am J Surg 1985;150:782-4.

405. Weigelt JA, Haley RW, Seibert B. Factors which influence the risk of wound infection in trauma patients. J Trauma 1987;27(7):774-81.

406. Anonymous. New classification of physical status. Anesthesiology 1963;24:-111.

407. Owens WD. ASA physical status classification: a study on consistency of ratings. Anesthesiology 1978;49:239-43.

408. National Nosocomial Infections Surveillance System. Nosocomial infection rates for interhospital comparison: limitations and possible solutions. A report from the National Nosocomial Infections Surveillance (NNIS) System. Infect Control Hosp Epidemiol 1991;12:609-21.

409. Cardo DM, Falk PS, Mayhall CG. Validation of surgical wound surveillance. Infect Control Hosp Epidemiol 1993;14:211-5.

410. Horan T, Gaynes R, Culver D, National Nosocomial Infections Surveillance (NNIS) System, CDC. Development of predictive risk factors for nosocomial surgical site infections (SSI) [abstract]. Infect Control Hosp Epidemiol 1994;15(suppl):P46(M72).

411. Nichols RL, Smith JW, Klein DB, Trunkey DD, Cooper RH, Adinolfi MF, et al. Risk of infection after penetrating abdominal trauma. N Engl J Med 1984;311:1065-70.

412. Nichols RL, Smith JW,

Robertson GD, Muzik AC, Pearce P, Ozmen V, et al. Prospective alterations in therapy for penetrating abdominal trauma. Arch Surg 1993;128:55-64.

413. Horan TC, Culver DH, Gaynes RP, National Nosocomial Infections Surveillance (NNIS) System. Results of a multicenter study on risk factors for surgical site infections (SSI) following C-section (CSEC) [abstract]. Am J Infect Control 1996;24:84.

414. Roy MC, Herwaldt LA, Embrey R, Kuhns K, Wenzel RP, Perl TM. Does the NNIS risk index (NRI) predict which patients develop wound infection (SWI) after cardiothoracic (CT) surgery? [abstract]. 34th Interscience Conference on Antimicrobial Agents and Chemotherapy 1994; Orlando, FL:196.

415. Lee TB. Surveillance in acute care and nonacute care settings: current issues and concepts. Am J Infect Control 1997;25(2):121-4.

416. Lee JT. Wound infection surveillance. Infect Dis Clin North Am 1992;6(3):643-56.

417. Mead PB, Pories SE, Hall P, Vacek PM, Davis JH Jr, Gamelli RL. Decreasing the incidence of surgical wound infections. Validation of a surveillance-notification program. Arch Surg 1986;121:458-61.

418. Kerstein M, Flower M, Harkavy LM, Gross PA. Surveillance for postoperative wound infections: practical aspects. Am Surg 1978;44:210-4.

419. Poulsen KB, Jepsen OB. Failure to detect a general reduction of surgical wound infections in Danish hospitals. Dan Med Bull 1995;42:485-8.

420. Haley RW, Schaberg DR, McClish DK, Quade D, Crossley KB, Culver DH, et al. The accuracy of retrospective chart review in measuring nosocomial infection rates. Results of validation studies in pilot hospitals. Am J Epidemiol 1980;111(5):516-33.

421. Mulholland SG, Creed J, Dierauf LA, Bruun JN, Blakemore WS. Analysis and significance of nosocomial infection rates. Ann Surg 1974;180:827-30.

422. Wenzel RP, Osterman CA, Hunting KJ, Gwaltney JM Jr. Hospital-acquired infections. I. Surveillance in a university hospital. Am J Epidemiol 1976;103:251-60.

423. Simchen E, Shapiro JM, Michel J, Sacks T. Multivariate analysis of determinants of postoperative wound infection: a possible basis for intervention. Rev Infect Dis 1981;3(4):678-82.

424. Collier C, Miller DP, Borst M. Community hospital surgeon-specific infection rates. Infect Control 1987;8(6):249-54.

425. Ehrenkranz NJ, Shultz JM, Richter EL. Recorded criteria as a "gold standard"for sensitivity and specificity estimates of surveillance of nosocomial infection: a novel method to measure job performance. Infect Control Hosp Epidemiol 1995;16:697-702.

426. Hirschhorn LR, Currier JS, Platt R. Electronic surveillance of antibiotic exposure and coded discharge diagnoses as indicators of postoperative infection and other quality assurance measures. Infect Control Hosp Epidemiol 1993;14:21-8.

427. Simchen E, Wax Y, Pevsner B, Erdal M, Michel J, Modan M, et al. The Israeli Study of Surgical Infections (ISSI): I. Methods for developing a standardized surveillance system for a multicenter study of surgical infections. Infect Control Hosp Epidemiol 1988;9(6):232-40.

428. Burns SJ, Dippe SE. Postoperative wound infections detected during hospitalization and after discharge in a community hospital. Am J Infect Control 1982;10(2):60-5.

429. Laxson LB, Blaser MJ, Parkhurst SM. Surveillance for the detection of nosocomial infections and the potential for nosocomial outbreaks. Am J Infect Control 1984;12(6):318-24.

430. Mertens R, Jans B, Kurz X. A computerized nationwide network for nosocomial infection surveillance in Belgium. Infect Control Hosp Epidemiol 1994;15:171-9.

431. Ehrenkranz NJ. Surgical wound infection occurrence in clean operations; risk stratification for interhospital comparisons. Am J Med 1981;(70):909-14.

432. Baker C, Luce J, Chenoweth C, Friedman C. Comparison of case-finding methodologies for endometritis after cesarean section. Am J Infect Control 1995;23:27-33.

433. Gaynes RP, Horan TC. Surveillance of nosocomial infections. In: Mayhall CG, ed. Hospital Epidemiology and Infection Control. Baltimore:Williams & Wilkins;1996. p. 1017-31.

434. Horan TC, Emori TG. Definitions of key terms used in the NNIS system. Am J Infect Control 1997;25:112-6.

435. Polk BF, Tager IB, Shapiro M, Goren-White B, Goldstein P, Schoenbaum SC. Randomised clinical trial of perioperative cefazolin in preventing infection after hysterectomy. Lancet 1980; 1:437-41.

436. Salem RJ, Johnson J, Devitt P. Short term metronidazole therapy contrasted with povidone-iodine spray in the prevention of wound infection after appendicectomy. Br J Surg 1979;66:430-1.

437. Walsh AL, Roberts FJ, Bryce EA. Post-discharge surveillance of surgical wound infections [letter]. Can J Infect Control 1996;11(1):29.

438. Brown RB, Bradley S, Opitz E, Cipriani D, Pieczarka R, Sands M. Surgical wound infections documented after hospital discharge. Am J Infect Control 1987;15:54-8.

439. Rosendorf LL, Octavio J, Estes JP. Effect of methods of postdischarge wound infection surveillance on reported infection rates. Am J Infect Control 1983;11(6):226-9.

440. Ferraz EM, Ferraz AA, Coelho HS, Pereira Viana V, Sobral SM, Vasconcelos MD, et al. Postdischarge surveillance for nosocomial wound infection: does judicious monitoring find cases? Am J Infect Control 1995;23:290-4.

441. Andenaes K, Amland PF, Lingaas E, Abyholm F, Samdal F, Giercksky KE. A prospective, randomized surveillance study of postoperative wound infections after plastic surgery: a study of incidence and surveillance methods. Plast Reconstr Surg 1995;96(4):948-56.

442. Keeling NJ, Morgan MW. Inpatient and post-discharge wound infections in general surgery. Ann R Coll Surg Engl 1995;77:245-7.

443. Manian FA, Meyer L. Adjunctive use of monthly physician questionnaires for surveillance of surgical site infections after hospital discharge and in ambulatory surgical patients: report of a seven-year experience. Am J Infect Control 1997;25:390-4.

444. Manian FA, Meyer L. Comparison of patient telephone survey with traditional surveillance and monthly physician questionnaires in monitoring surgical wound infections. Infect Control Hosp Epidemiol 1993;14:216-8.

445. Reimer K, Gleed C, Nicolle LE. The impact of postdischarge infection on surgical wound infection rates. Infect Control 1987;8(6):237-40.

446. Sands K, Vineyard G, Platt R. Surgical site infections occuring after hospital discharge. J Infect Dis 1996;173:963-70.

447. Weigelt JA, Dryer D, Haley RW. The necessity and efficiency of wound surveillance after discharge. Arch Surg 1992;127:77-82.

448. Gravel-Tropper D, Oxley C, Memish Z, Garber GE. Underestimation of surgical site infection rates in obstetrics and gynecology. Am J Infect Control 1995;23:22-6.

449. Taylor S, Pearce P, McKenzie M, Taylor GD. Wound infection in total joint arthroplasty: effect of extended wound surveillance on wound infection rates. Can J Surg 1994;37(3):217-20.

450. Hulton LJ, Olmsted RN, Treston-Aurand J, Craig CP. Effect of postdischarge surveillance on rates of infectious complications after cesarean section. Am J Infect Control 1992;20:198-201.

451. Law DJ, Mishriki SF, Jeffery PJ. The importance of surveillance after discharge from hospital in the diagnosis of postoperative wound infection. Ann R Coll Surg Engl 1990;72:207-9.

452. Donovan IA, Ellis D, Gatehouse D, Little G, Grimley R, Armistead S, et al. One-dose antibiotic prophylaxis against wound infection after appendicectomy: a randomized trial of clindamycin, cefazolin sodium and a placebo. Br J Surg 1979;66:193-6.

453. Bates T, Down RH, Houghton MC, Lloyd GJ. Topical ampicillin in the prevention of wound infection after appendicectomy. Br J Surg 1974;61:489-92.

454. Centers for Disease Control and Prevention. Evaluation of blunt suture needles in preventing percutaneous injuries among health-care workers during gynecologic surgical procedures New York City, March 1993-June 1994. MMWR Morb Mortal Wkly Rep 1997;46(2):25-9.

455. Fanning C, Johnston BL, MacDonald S, LeFort-Jost S, Dockerty E. Postdischarge surgical site infection surveillance. Can J Infect Control 1995;10(3):75-9.

456. Holbrook KF, Nottebart VF, Hameed SR, Platt R. Automated postdischarge surveillance for postpartum and neonatal nosocomial infections. Am J Med 1991;91(Suppl 3B):125S-30S.

457. Zoutman D, Pearce P, McKenzie M, Taylor G. Surgical wound infections occuring in day surgery patients. Am J Infect Control 1990;18:277-82.

458. Seaman M, Lammers R. Inability of patients to self-diagnose wound infec-

tions. J Emerg Med 1991;9:215-9.
459. Goulbourne IA, Ruckley CV. Operations for hernia and varicose veins in a day-bed unit. Br Med J 1979;2:712-4.
460. Garvey JM, Buffenmyer C, Rycheck RR, Yee R, McVay J, Harger JH. Surveillance for postoperative infections in outpatient gynecologic surgery. Infect Control 1986;7(2):54-8.
461. Flanders E, Hinnant JR. Ambulatory surgery postoperative wound surveillance. Am J Infect Control 1990;18(5):336-9.
462. Gentry LO, Zeluff BJ, Cooley DA. Antibiotic prophylaxis in open-heart surgery: a comparison of cefamandole, cefuroxime, and cefazolin. Ann Thorac Surg 1988;46:167-71.
463. Maki DG, Bohn MJ, Stolz SM, Kroncke GM, Archer CW, Myerowitz PD. Comparitive study of cefazolin, cefamandole, and vancomycin for surgical prophylaxis in cardiac and vascular operations. A double-blind randomized trial. J Thorac Cardiovasc Surg 1992;104:1423-34.
464. Haines SJ, Walters BC. Antibiotic prophylaxis for cerebrospinal fluid shunts: a metanalysis. Neurosurgery 1994;34(1):87-92.
465. Langley JM, LeBlanc JC, Drake J, Milner R. Efficacy of antimicrobial prophylaxis in placement of cerebrospinal fluid shunts: meta-analysis. Clin Infect Dis 1993;17:98-103.
466. Starr MB, Lally JM. Antimicrobial prophylaxis for ophthalmic surgery. Surv Ophthalmol 1995;39:485-501.
467. Gatell JM, Riba J, Lozano ML, Mana J, Ramon R, Garcia Sanmiguel J. Prophylactic cefamandole in orthopaedic surgery. J Bone Joint Surg Am 1984;66:1219-22.
468. Kent KC, Bartek S, Kuntz KM, Anninos E, Skillman JJ. Prospective study of wound complications in continuous infrainguinal incisions after lower limb arterial reconstruction: incidence, risk factors, and cost. Surgery 1996;119(4):378-83.
469. Wymenga AB, van Horn JR, Theeuwes A, Muytjens HL, Slooff TJ. Perioperative factors associated with septic arthritis after arthroplasty. Prospective multicenter study of 362 knee and 2,651 hip operations. Acta Orthop Scand 1992;63(6):665-71.
470. Stambough JL, Beringer D. Postoperative wound infections complicating adult spine surgery. J Spinal Disord 1992;5(3):277-85.
471. Trippel SB. Antibiotic-impregnated cement in total joint arthroplasty. J Bone Joint Surg Am 1986;68A:1297-302.
472. Nungu KS, Olerud C, Rehnberg L, Larsson S, Nordell P, Allvin I, et al. Prophylaxis with oral cefadroxil versus intravenous cefuroxime in trochanteric fracture surgery. A clinical multicentre study. Arch Orthop Trauma Surg 1995;114(6):303-7.
473. Norden CW. Antibiotic prophylaxis in orthopedic surgery. Rev Infect Dis 1991;13(Suppl 10):S842-6.
474. Aznar R, Mateu M, Miro JM, Gatell JM, Gimferrer JM, Aznar E, et al. Antibiotic prophylaxis in non-cardiac thoracic surgery: cefazolin versus placebo. Eur J Cardiothorac Surg 1991;5:515-8.
475. Cant PJ, Smyth S, Smart DO. Antibiotic prophylaxis is indicated for chest stab wounds requiring closed tube thoracostomy. Br J Surg 1993;80:464-6.
476. Pitt HA, Postier RG, MacGowan AW, Frank LW, Surmak AJ, Sitzman JV, et al. Prophylactic antibiotics in vascular surgery. Topical, systemic, or both? Ann Surg 1980;192:356-64.
477. Kaiser AB, Clayson KR, Mulherin JL Jr, Roach AC, Allen TR, Edwards WH, et al. Antibiotic prophylaxis in vascular surgery. Ann Surg 1978;188:283-9.
478. Bauer T, Vennits B, Holm B, Hahn-Pedersen J, Lysen D, Galatius H, et al. Antibiotic prophylaxis in acute nonperforated appendicitis. The Danish Multicenter Study Group II. Ann Surg 1989;209:307-11.
479. Skipper D, Corder AP, Karran SJ. A randomized prospective study to compare ceftizoxime with cephradine as single dose prophylaxis in elective cholecystectomy. J Hosp Infect 1991;17:303-6.
480. Kaufman Z, Engelberg M, Eliashiv A, Reiss R. Systemic prophylactic antibiotics in elective biliary surgery. Arch Surg 1984;119:1002-4.
481. Grant MD, Jones RC, Wilson SE, Bombeck CT, Flint LM, Jonasson O, et al. Single dose cephalosporin prophylaxis in high-risk patients undergoing surgical treatment of the biliary tract. Surg Gynecol Obstet 1992;174:347-54.
482. Lewis RT, Goodall RG, Marien B, Park M, Lloyd-Smith W, Wiegand FM. Biliary bacteria, antibiotic use, and wound infection in surgery of the gallbladder and common bile duct. Arch Surg 1987;122:44-7.
483. Saltzstein EC, Mercer LC, Peacock JB, Dougherty SH. Outpatient open cholecystectomy. Surg Gynecol Obstet 1992;174(3):173-5.
484. Meijer WS, Schmitz PI, Jeekel J. Meta-analysis of randomized, controlled clinical trials of antibiotic prophylaxis in biliary tract surgery. Br J Surg 1990;77:283-90.
485. Kaiser AB, Herrington JL Jr, Jacobs JK, Mulherin JL Jr, Roach AC, Sawyers JL. Cefoxitin versus erythromycin, neomycin, and cefazolin in colorectal operations. Importance of the duration of the surgical procedure. Ann Surg 1983;198:525-30.
486. Schoetz DJ Jr, Roberts PL, Murray JJ, Coller JA, Veidenheimer MC. Addition of parenteral cefoxitin to regimen of oral antibiotics for elective colorectal operations. A randomized prospective study. Ann Surg 1990;212:209-12.
487. Edmondson HT, Rissing JP. Prophylactic antibiotics in colon surgery. Arch Surg 1983;118:227-31.
488. Wapnick S, Guinto R, Reizis I, LeVeen HH. Reduction of postoperative infection in elective colon surgery with preoperative administration of kanamycin and erythromycin. Surgery 1979;85:317-21.
489. Washington JA 2d, Dearing WH, Judd ES, Elveback LR. Effect of preoperative antibiotic regimen on development of infection after intestinal surgery. Prospective, randomized, double-blind study. Ann Surg 1974;108:567-72.
490. Maki DG, Aughey DR. Comparative study of cefazolin, cefoxitin, and ceftizoxime for surgical prophylaxis in colo-rectal surgery. J Antimicrob Chemother 1982;10(Suppl C):281-7.
491. Rotman N, Hay JM, Lacaine F, Fagniez PL, The Association de Recherche en Chirurgie Cooperative Group. Prophylactic antibiotherapy in abdominal surgery. First- vs third-generation cephalosporins. Arch Surg 1989;124:323-7.
492. Lewis RT, Allan CM, Goodall RG, Marien B, Park M, Lloyd-Smith W, et al. Cefamandole in gastroduodenal surgery: a controlled, prospective, randomized, double-blind study. Can J Surg 1982;25(5):561-3.
493. McArdle CS, Morran CG, Anderson JR, Pettit L, Gemmell CG, Sleigh JD, et al. Oral ciprofloxacin as prophylaxis in gastroduodenal surgery. J Hosp Infect 1995;30(3):211-6.
494. Grandis JR, Vickers RM, Rihs JD, Yu VL, Johnson JT. Efficacy of topical amoxicillin plus clavulanate/ticarcillin plus clavulanate and clindamycin in contaminated head and neck surgery: effect of antibiotic spectra and duration of therapy. J Infect Dis 1994;170:729-32.
495. Johnson JT, Yu VL, Myers EN, Wagner RL. An assessment of the need for gram-negative bacterial coverage in antibiotic prophylaxis for oncological head and neck surgery. J Infect Dis 1987;155(2):331-3.
496. Elledge ES, Whiddon RG Jr, Fraker JT, Stambaugh KI. The effects of topical oral clindamycin antibiotic rinses on the bacterial content of saliva on healthy human subjects. Otolaryngol Head Neck Surg 1991;105:836-9.
497. Johnson JT, Yu VL, Myers EN, Wagner RL, Sigler BA. Cefazolin vs moxalactam? A double-blind randomzied trial of cephalosporins in head and neck surgery. Arch Otolaryngol Head Neck Surg 1986;112:151-3.

Selected Readings

Association of Operating Room Nurses. Standards, recommended practices, guidelines. Denver: Association of Operating Room Nurses; 1999.

Larson EL. APIC guideline for handwashing and hand antisepsis in health care settings. Am J Infect Control 1995;23:251-69.

Association of Operating Room Nurses. Recommended practices for skin preparation of patients. AORN J 1996;64:813-6.

Rutala WA. APIC guideline for selection and use of disinfectants. Am J Infect Control 1990;18:99-117.

Favero MS, Bond W. Sterilization, disinfection, and antisepsis in the hospital. In: Balows A, Haugler WJ Jr, Herrmann KL, Isenberg HD, Shadomy HJ, eds. Manual of clinical microbiology. 5th ed. Washington (DC): American Society for Microbiology; 1991. p. 183-200.

Association for the Advancement of Medical Instrumentation. Flash sterilization: steam sterilization of patient care items for immediate use (ANSI/AAMI ST37-1996). Arlington (VA): Association for the Advancement of Medical In-

strumentation; 1996.

American Institute of Architects Committee. Guidelines for design and construction of hospital and health care facilities. Washington: American Instituite of Architects Press; 1996.

Association for the Advancement of Medical Instrumentation. Selection of surgical gowns and drapes in health care facilities (AAMI TIR No. 11-1994).

Arlington (VA): Association for the Advancement of Medical Instrumentation; 1994.

Platt R. Guidelines for perioperative antibiotic prophylaxis. In: Abrutyn E, Goldmann DA, Scheckler WE, eds. Saunders infection control reference service.

Philadelphia: W.B. Saunders Co; 1997. p. 229-34.

Classen DC, Evans RS, Pestotnik SL, Horn SD, Menlove RL, Burke JP. The timing of prophylactic administration of antibiotics and the risk of surgical-wound infection. N Engl J Med 1992;326:281-6.

Wong ES. Surgical site infections. In: Mayhall CG, ed. Hospital Epidemiology and Infection Control. Baltimore: Williams & Wilkins; 1996. p. 154-74.

Hochberg J, Murray GF. Principles of operative surgery: antisepsis, technique, sutures, and drains. In: Sabiston DC Jr, ed. Textbook of surgery: the biological basis of modern surgical practice. 15 ed. Philadelphia: W.B. Saunders Co; 1997. p. 253-63.

Roy MC. Surgical-site infections after coronary artery bypass graft surgery: discriminating site-specific risk factors to improve prevention efforts. Infect

Control Hosp Epidemiol 1998;19:229-33.

Herwaldt LA, Pottinger J, Coffin SA. Nosocomial infections associated with anesthesia. In: Mayhall CG, ed. Hospital epidemiology and infection control.

Baltimore: Williams & Wilkins; 1996. p. 655-75.

Gaynes RP, Horan TC. Surveillance of nosocomial infections. In: Mayhall CG, ed. Hospital epidemiology and infection control. Baltimore: Williams & Wilkins;

1996. p. 1017-31.

Roy MC, Perl TM. Basics of surgical-site infection surveillance. Infect Control Hosp Epidemiol 1997;18:659-68.

Lee JT. Surgical wound infections: surveillance for quality improvement. In: Fry DE, ed. Surgical Infections. Boston: Little, Brown and Co; 1995. p. 145-59.

Meier PA. Infection control issues in same-day surgery. In: Wenzel RP, ed. Prevention and control of nosocomial infections. 3rd ed. Baltimore: Williams &

Wilkins; 1997. p. 261-82.

Burke JP. Infections of cardiac and vascular prostheses. In: Bennett JV, Brachman PS, eds. Hospital infections. 4th ed. Philadelphia: Lippincott-Raven; 1998. p. 599-612.

Lew DP, Waldvogel FA. Infections of skeletal prostheses. In: Bennett JV, Brachman PS, eds. Hospital Infections. 4th ed. Philadelphia: Lippincott-Raven;

1998. p. 613-20.

Nafziger DA, Saravolatz LD. Infection in implantable prosthetic devices. In: Wenzel RP, ed. Prevention and control of nosocomial infections. 3rd ed. Baltimore: Williams & Wilkins; 1997. p. 889-923.

Hospital Infection Control Practices Advisory Committee Membership List, January 1999

Chairman
Elaine L. Larson, RN, PhD, FAAN, CIC
Columbia University School of Nursing
New York, New York

Executive Secretary
Michele L. Pearson, MD
Centers for Disease Control and Prevention
Atlanta, Georgia

Surgical Site Infection Guideline Sponsor
James T. Lee, MD, PhD, FACS
University of Minnesota
Minneapolis, Minnesota

Members
Audrey B. Adams, RN, MPH
Montefiore Medical Center
Bronx, New York

Raymond Y. W. Chinn, MD
Sharp Memorial Hospital
San Diego, California

Alfred DeMaria, Jr, MD
Massachusetts Department of Public Health
Jamaica Plain, Massachusetts

Susan W. Forlenza, MD
New York City Health Department
New York, New York

Ramon E. Moncada, MD
Coronado Physician•fs Medical Center
Coronado, California

William E. Scheckler, MD
University of Wisconsin Medical School
Madison, Wisconsin

Jane D. Siegel, MD
University of Texas Southwestern Medical Center
Dallas, Texas

Marjorie A. Underwood, RN, BSN, CIC
Mt. Diablo Medical Center
Concord, California

Robert A. Weinstein, MD
Cook County Hospital
Chicago, Illinois